
旋風と雪風

明日は我が身

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旋風と雪風

【Nコード】

N3584M

【作者名】

明日は我が身

【あらすじ】

現代に生きる風術師。戦いの果て命を散らす寸前に現れた転移門。一縷の望みをかけて飛び込み、そこで見たものは？

死ぬ直前のシャルルに呼び出された主人公『草薙大和』はハルケギニアで自分の使命を見つける。
それはシャルルの娘シャルロットを守る事。

日本生まれの風術師が織りなす「ほのぼのストーリー」になればい

いな。
。
。

第1章 prologue：風と炎（前書き）

発投稿です！ゼロの使い魔SSです。オリ主×タバサで進行しますが、原作ファンの方には合わない内容かと思えます。暇つぶし程度に流し読みして頂けると幸いです。

第1章 prologue：風と炎

風と炎

”ドゴオオオ！”

終に最後の扉まで破られた。

100？ほどの会議室。

ただっ広い空間に一人の少年と10人の黒服。

少年の名は草薙^{くさなぎ} 大和^{やまと}。

15歳になったばかりの黒目、黒髪の少年である。

ある事情から一人で生きてきた大和は、食べる為に護衛やお祓いといった、普通ではない仕事をしている。ただの少年にそんな仕事が出来るはずもなく、当然、大和にはある力があつた。それは、風の精霊を召喚し、使役するという『精霊術師』だつた。

今回、受けた依頼は護衛である。

しかし、依頼者の命を狙う相手が大和とおなじ精霊術師であつたため、大和一人では撃退することが出来なかつた。

そのため、依頼人が逃げるまで時間を稼ぐという依頼内容に変わったのだつた。

少なくとも後5分は、背後にある扉を守らなければならなかつた。

（悪足掻きは得意分野だし、逃げ足だけなら自信あるけど…でもなあ、逃げれば信用を失うことは絶対だしなあ。まあ情性で生きてきた俺にはお似合いの最後かもな…）

五人の黒服が刀を抜き一気に間合いを詰めてきた。残った五人は散開し、銃を乱射。何処に逃げようとかわすことが出来ないような銃撃。

焦ることなく、背中に刺した2本の刀を抜き放ち構える。

迫る銃弾全てが、身体の数センチ手前で弾かれる。

黒服は多少驚いた表情をしたが、すぐに表情を消し、十人全てが殺到してきた。

目測10メートルにまで近づいた一人目の黒服に向かって右の刀で水平に素振り。

不可視の風の刃が放たれ、一瞬後にはその黒服は胸に赤い線を引いて上の部分を床に落とし3歩進んで下も崩れ落ちた。

それを見ることもなく右から向かってくる二人の間合いに一瞬で滑り込む。

正面から右の刀で腹を半ばまで切り、3メートル離れた黒服の背後に回り左の刀で頸動脈を絶ち切る。

背後からの殺気に前方へダイブ、そのまま前周り受身のように前転して立ち上がり床を蹴る。

直後、背後に銃弾の雨。

前方の一人に切りかかろうとした瞬間、直径60センチの火の玉が襲い掛かる。

「チィ！」左前方からきたそれに防御も虚しく吹き飛ばされ机やら椅子やらを巻き込み轟音が鳴り響く。

片膝について耐えたところに同じものが3つ降り注ぐ。

(何人術師がいんだよ！)

ココまで経過した時間は3分。

(後2分か、全力だしてギリかな?)

3つの火の玉が直撃する寸前に突如竜巻が起こる。全ての火の玉が飛散し、無数のカマイタチが黒服を襲う。

その場に居た黒服は防ぐことも出来ず七人全員が血煙の中倒れる。ただ、いつの間にか進入していた四人の人間は無傷で破壊された扉の前に立っていた。

一人は派手な着物を着た30代の女、残りの三人は黒で赤い縁取りがされた法衣を纏った40〜50代の男。

「強いねーぼうや。あれを防いだ上に反撃なんてされたのは初めてだよ」

血のように赤い唇を舐め、欲情したように両手で身体を抱え揺らす。

「鬼部の姫、自ら来るとはな…」

「草薙の生き残りが邪魔してるって聞いたものでね、楽しそうだから遊びに来たのさ」

「あんたらが関わっていると知ってたらこんな仕事請けなかったさ」

「よく言うよ、これまでも散々邪魔してくれたくせに、15のぼうやに煮え湯を飲まされて信用を崩され鬼部家としてはココで名誉挽回しなきゃやってられないのよ」

(そろそろ5分経つが、ミッションコンプリートとは行きそうにないな。流石に俺もここまでか)

「そろそろ依頼主も逃げ切れたんじゃないかい? こちらはあんた

さえ殺れればそれでいいから、死んで…ね？」

言うなり火の玉が3つ殺到する。

左に大きく避け、風の刃を飛ばすが遅れて飛んできた一回り大きな火の玉が風の刃を飲み込みながら接近する。

右で3つの火の玉が爆炎を上げ、続いて目の前で風の壁と火の玉がぶつかり合い周囲に炎を撒き散らす。

会議室の半分は炎と煙に包まれ、後半分も瓦礫に押しつぶされていた。

(やっぱ無理か)

同等の”風”では”火”には勝てない。この世界では常識である。

速さでは最速の”風”であっても、質量・エネルギーの差で威力は補えないのである。

さらに相手は鬼部家最強の術者と側近三人。勝ち目ゼロ。

「チツ！」

周囲で燃え盛る炎がいきなり俺めがけて殺到する。

避ける場所もなく上へ飛が当然のごとく火の玉が来襲する。

風を纏って空中を飛び回り避ける。

逃げ回りながらも風の刃を放ち一人を仕留めた。

「この！ チョコマカと五月蠅い！」

言った瞬間、女の圧力は膨れ上がった。

(まずい！)

一瞬の躊躇いを振り払い、風の防御陣を敷く。

自分を中心に半径1メートルほどの空間に高密度な空気が集まる。

直後膨大な炎の塊が周囲を圧倒する。

風の防御陣は徐々に喰われ、ジリジリと範囲を狭めていく。

(もたないか…)

空気の薄い地下では限界だった。
半径70センチまで狭まった防御陣の中で、半ば覚悟を決める。

「なっ！」いきなり目の前に大きな鏡が現れた。

「何が起こっている？　なんだこれは！」

盛大に混乱した脳をどうにか落ち着かせ、防御陣を維持するが後数分と持たないことは分りきっていた。

鏡に刀を入れてみる。何の抵抗もなく中に埋まり、何の抵抗もなく引き抜けた。

（転移陣？誰がこんなものを？）

何となく転移陣であると考えたが、誰が何のためにこんなところに？　という疑問は解決できない。

（どうせ後数分で死ぬのなら、飛び込んでみるか…）

盛大な胡散臭さを感じながらも現在の状況から選ぶ道は他になかった。

迷いを捨てた後の行動は早かった。防御陣を維持したまま、一気に鏡へと飛び込んだのだった。

第1章 prologue：風と炎（後書き）

2010'8'17

内容を変えないように言い回しを変えています。

勢いでやってしまった！

後悔は今のところしていない！

今後予想されるクレームで萎えたらごめんなさい>><

誤字・脱字などなど見つけたら教えてください。

第1章 1話 召喚と依頼（前書き）

ゼロの使い魔SSです。オリ主×タバサで進行しますが、原作ファンの方には合わない内容かと思えます。暇つぶし程度に流し読みして頂けると幸いです。

第1章 1話 召喚と依頼

召喚と依頼

深い森で一人の男が怪我を負い、追手から身を隠していた。

「クツ！」

左足に刺さった矢を抜き、血止めをするが、止めどなく流れ続ける血に紫色の液体が混じっていた。

(まず間違いなく毒だろうな…)

更に矢が複数飛んで来るが、短い詠唱で風を放ち矢を叩き落とした。続けて詠唱し、火の玉を放つ。避けることもできずに矢を放った相手が倒れこんだ。

周囲には男以外、誰も居なかった。

連れてきた護衛も半数が倒れ、残り半数は離ればなれとなっていた。

狙われた理由は……分っていた。

権力闘争に敗れた時点で覚悟していたが、こうまで行動が早いとは思わなかった。

妻と娘だけでも他国へ逃がすはずだったが、間に合わなかった。

男の名は、シャルル・ド・オルレアン。ガリア王国、国王の実弟であった。

兄との権力争いに負けたシャルルを狩りに誘ったのは実兄であり、この暗殺を企てたのも実兄であった。

血は流れ続け、矢を受けた場所は赤くはれ上がっていた。
このままでは30分もたないだろうと、覚悟を決める。

「シャルロット……………」

12歳になったばかりの愛しい娘の名前を呟く。

これから、我が子を襲う不幸を思い自分の不甲斐無さに唇を噛む。

せめて…

「我が名はシャルル・ド・オルレアン

五つの力を司るペンタゴン。

私の運命に従いし使い魔を召還せよ」

目の前に鏡が現れ、すぐに光が辺りを照らす。

先ほどの戦闘で使い魔も果てていた。

その為人生2度目の召還を行ったのだ。

運が良ければこの傷を治せる使い魔か……、伝言を頼める程度の使い魔が召還できるかもしれないと考えていた。

光が消えた時には目の前に黒髪の少年が膝をついていた。

（なぜ少年！？ 召還で人間が召還されるなど聞いたこともない！）
混乱したまま少年を凝視していると少年が口を開いた。

「あなたの転移陣でしたか、危ないところをありがとうございます
た。ところで、どちら様でしょうか？ お会いしたことはないと思
うのですが、それとここはどの辺りか教えていただきたいのですが
？」

（転移陣？ 助けた？ 分らないことばかりだが、不思議な少年だ
な）

「すまないが多分君と会ったことはないと思う。それと、さっきの

門は転移陣などではなく召還の門だ。私は、召還の魔法で使い魔を召還したのだが、君が召還されたのだ」

（日本語で通じた！ それもかなり流暢な日本語で返された！ ほんとに何者？ 召還って西洋魔術か？ 法術に生き物を召還するものがあつたか？ だが… あれは前もって契約が必要だったような？）
どう見ても、西洋人である男が流暢な日本語を話した事に驚く。

「転移ではなく召還… 人間を召還できるとはすごいですね。私の知る魔術では聞いたことがありません。私は草薙大和といいます。失礼ですがお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「ああすまない、私はシャルル・ド……………クツ」

「どうされました！？ ん、その傷！ 毒ですか？」

「そのようだ、多分後10分ともたない」
傷を中心に黒く変色した場所が広がっている。

「そんな！ 近くに集落は？ 薬……………魔術では？」

「いや、時間的に間に合わない。それにこの毒は治療できないだろう。」

多分エルフの毒薬だ… ハアハア」
まず間違いなくエルフが調べた毒だと確信している。
兄に誘われて来た狩猟大会なのだ、エルフが一枚かんでも驚きはない。

「それより、使い魔として呼んでおきながらルーンを授けることが出来ない。勝手ながら、ココから離れた方がよい。追っ手が何時来るか分からないからな」

「…死ぬことは確定なのですね。私も死確定の状態です。助けていただきました。何か出来ることをお返ししたいのですが」
大和は、エルフという言葉に疑問を浮かべる。それも含めて情報の把握と、結果的に命を救ってくれたシャルルに恩を返しておきたいと考えていた。

（一方的に呼び出されて、私に恩を感じるか…：なんとも可笑しい少年だ）

「では1つ頼みたい。これをガリアのシャルロットという娘に渡してもらいたい。それと…これは君に上げよう。報酬と思ってくれ」

「わかりました。後ガリアとは何処の国でしょうか？ あとこの場所はどこですか？」

「なん…？ ガリアがわからない？ 君は…！」

シャルルが言い終わる前に、大和は立ち上がり周囲を見渡す。

（全部で8人、姿を現してもらおうか！）

背中に掛け合わせるように差した刀を両手に抜き放ち一気に風の刃を5つほど放つ。

8人の姿が見えるように邪魔な木を切り倒す。

その背後から剣士が6名、術師と思われる2名驚きの表情で現れた。

「あれは敵で間違いないですか？」

殺気を放つ相手が『敵』である事は予想できたが、確認のためにシャルルに問う。

「ああ、すぐに逃げなさい！」

シャルルが言い終わる前に大和は目の前から掻き消えた。

敵であるという確認が取れると、大和はすぐに行動に出た。風を纏って手前にいた剣士2人の間合いに入り、切り伏せる。返り血を浴びる前に次の二人に切りかかり、右の刀で左腰から斜め上へ切り上げ遠心力を利用して一回転、左の刀で4人目の足を切り裂く。

最後に正面に戻り、右の刀で喉を突いた。

最後に残った剣士は流石に反応し、長剣で袈裟切りに振り下ろしてくるが、左の剣で右へ受け流し、右の剣で左脇から切り裂いた。

剣士が倒れると同時に、術師二人から魔術が飛んだ。

不可視の刃が迫り、同じく風の刃で相殺。遅れてくる火の玉を右に避け、火の玉を撃ったメイジに風の刃を放つ。

続けて風の刃をもう一人のメイジにも風を放ち、全ての敵を沈黙させた。

敵の使った魔法が西洋魔術であった為、詠唱を必要としない大和の方がスピードという面で有利だった。

(ふう 西洋魔術だな、大した使い手じゃなくて助かった)
全てを切り伏せシャルルを振り返ったところで、うめき声が聞こえた。

シャルルは、大和の動きと見たこともない魔法に驚いていた。

(すごい！ どこかの貴族か？ だが魔法とは違う。どちらかというと先住魔法のように感じたが)

魔力の動きが感じられなかったのだ。

「ふうふう……」

(もう時間がないな。シャルロット……………)

つめき声を最後にシャルルは息を引き取った。

第1章 1話 召喚と依頼（後書き）

文才ないのがよくわかる…

誤字脱字の指摘よろです。

少し言い回しを変えました。

腰の刀 背中に差した刀

大和視点では魔法＝魔術

7 / 1 5 3点リーダー、誤字、顔文字修正

第1章 2話 異世界と妖精（前書き）

ゼロの使い魔SSです。オリ主×タバサで進行しますが、原作ファンの方には合わない内容かと思えます。暇つぶし程度に流し読みして頂けると幸いです。

第1章 2話 異世界と妖精

3、異世界と妖精

シャルルの遺体を見晴らしの良い丘へ運び埋葬し、他の遺体はその場に纏めて埋葬した。

余裕があるときはいつでも行っていることであるが、余裕がないときのほうが多く、殆ど場合は放置。

別に良かれとおもってやってるわけではない。

追っ手があるなら証拠を少しでも隠したかったただけだ。

一息ついて辺りを見渡すと、すでに薄暗くなっていた。

気温はそれほど寒くはない。

「ここで野宿か。って月が二つ？」

ふと空を見上げた大和の目に飛び込んできたのは、赤く大きな満月と寄り添うように浮かぶ小さめの満月。

(…地球じゃないのか？ ここは？ どれだけ遠くに召還されてんだよ… まあー地球に戻った所でやらなきゃならないこともないし心配する相手もない…)

「どつち道死んでたはずだしな」

元の世界ではないと感しても大和はなんともマイペースだった。

上空150メートルから周囲を探索する。

(なんか、召還されてから精霊との繋がりが強くなったような…。

今なら予備動作なしで風を飛ばせるか？ ん…?)

「キヤアー来ないでよー」

視界の隅に鳥？ が何かを追っているのが見える。

（鳥？ 距離的には200メートル…でかいなアレ、で声はどこから？）

風と意識を同調させ、搜索範囲を一気に拡大する。

（オイオイ、同調率が倍？ 搜索範囲が2キロってどうなってんだ？ お！ 声の主発見！ って妖精？ 感じからして風の眷属かな？）

鳥？ の軌道を読み、予備動作なしで風の刃を放つ。

一瞬後には首を落とされた鳥が2、3度羽根を飛ばたかせて墜落した。

話ができそうな相手を見つけ妖精の元へと飛ぶ。

「大丈夫？」

きよとんとした表情で大和の存在を確認した妖精は逃げることもなく大和の胸に飛び込んだ。

「な！ え！ え〜？ なんだ？ 大丈夫か？」

いきなりのことであらうたえる大和。

「ん？ 人間？ え？」

サツと飛びのき恐る恐るといった感じで様子を窺う。

「なぜ疑問系？ 何処から見ても人間じゃないか俺？ 何に見えたんだ？」

失礼な！ と言わんばかりの表情「幼さと精悍さの中間くらいに位置する愛嬌ある表情ではあるが…」。

「精霊の匂い（雰囲気のようなもの）が強い人間なんて初めて見た。イルククウより強いかも…あなた何者？」

（イルククウってなんだよ、匂いって精霊を纏ってるからかな？）

「まあーなんだ。怪我が無いようでよかった。それと、人間以外の何者でもないよ。」

ただの風術師だ。出来れば少し話しを聞かせてもらいたいんだけど、時間ってあるか？」

「風術師？ 精霊に干渉出来るの？」

「ああ、風限定で多少の使役が出来る。珍しいの？」

「人間の精霊魔法使いなんて聞いたことも無い！ エルフの血とか混ざってない？」

胡散臭そうに半眼で見つめ様子を伺っている。

「こつちには居ないのか…向こうには結構居ただけだな。それと純日本人だから。」

（こつちの世界には精霊術を使える人間はいないが、エルフやら妖精やらは精霊術が使えると。かなりファンタジーな世界だなココは）

「ニホンジン？ ってハルケギニアにそんな種族いたっけ？」

なにやら考え込んでしまったセラに事情を話し、情報収集に努める。「たぶん召還魔法とやらで、呼ばれてきたからこの星じゃないと思う。俺の居た星にはエルフなんて存在しなかった。それと日本人ってのは日本って国の人間って意味だから」

「違う星？ 星ってお空に浮いてるアレ？ あそこにも人間が住んでるの？」

セラは大和の言うことのほとんどを理解できなかった。

「まあーそういうことだ、単純にどの星が分からないから異世界って言い方でも良いかも。

ところで、どこか落ちて着いて話せる場所があったら連れて行ってほしいんだけど、良い？」

上空100メートルに浮いた状態での会話も苦痛ではないが、ゆっくり落ちて着いて話をしたかった。

「えーと、名前なんだっけ？ 私はセラ」

「俺は草薙 大和。よろしく」

今更ながら自己紹介には必須な名前を伝え忘れていたことに苦笑しつつお互いの名前を伝えあった。

「取り敢えず私の村に行こう」 ヤマトなら皆怖がらないと思うし」

ニコニコと愛想を振りまきながら大和の周りを飛び回るセナに釣られるように大和もこの世界に来て初めて、心からの笑顔を見せた。

第1章 2話 異世界と妖精（後書き）

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。・|・。・)で
す。

評価してくださった方も励みになります^^
期待に沿えるよう頑張ります！

誤字脱字がありましたら教えてください><

7/15 3点リーダー、誤字、顔文字修正

第1章 3話 魔法陣と風石（前書き）

ゼロの使い魔SSです。オリ主×タバサで進行しますが、原作ファンの方には合わない内容かと思えます。暇つぶし程度に流し読みして頂けると幸いです。

第1章 3話 魔法陣と風石

4、魔法陣と風石

妖精の集落にて……………

お髭の素敵な長老から得た情報

1・此処はガリアとゲルマニアの国境近くの森である
国境といっても人間の手が入っていない森のため、あやふやであるとのこと

2・ハルケギニアという世界にはガリア、ゲルマニア、アルビオン、トリステイン、
ロマリアという国がある

3・妖精は人間との接点がないので、シャルルやシャルロットをしない

4・人間は四系統魔法を使う（精霊魔術は使えない）*魔法を使うときは杖を

媒介にしないとならない

5・精霊魔法を使えるのは幻獣・エルフなどで杖などの媒介は不要
人間は精霊魔術のことを先住魔法と呼んでいる

そのため、精霊魔術を使える大和は何者？ みたいな反応
大まかに聞いた内容では以上のことくらいしか分からなかった。

そして現在、精霊の匂い？が強い大和を珍しそうに囲む妖精達…

（珍獣扱い？ 和むから良いけどさ）

精霊の匂いが強く、セラを助けたという理由ですっかり信用されていた。

ちなみに、セラは勝手に村を離れたことで説教を受けている。ゴシ
ユウシヨウサマ

結構なお転婆娘なのだそうだ。

（情報を掴むためにもガリアってどこに行かなきゃならないか…
ただ、この世界における人間の生活やら常識みたいなのを得ない
と色々やばそうだな）

（食料の確保もしとかなないと…朝、ウサギそっくりな動物を捕まえ
て食べたつきりだし）

妖精達はもてなすと言ってくれたが、まず量が心配で丁重にお断り
した。

考え事をしてると半泣きのセラがフラフラと寄ってきた。

「うろうう」

「随分絞られたみたいだな。」

「ちょっと村から離れたくらいで、あんなに怒ることないのに〜」

「いや、離れた上に襲われたんだから心配するでしょ」

「うろうう」

半泣き状態のまま大和の右肩に座るセラ。

「セラ？ 聞きたいんだけど、ここから一番近い村か町ってどこら
辺？」

いきなりガリアへ行くよりも村か町に行って情報収集をした方が無

難と考えて質問した。

「えええ？ ヤマトってばもう行っちゃうの？」

少し寂しそうに問いかけてくるセラを見て保護欲に駆られる。

「この世界での常識を知っておきたいし後依頼を受けちゃったし」シャルルに命を救われたのは間違いなく受けた恩は返す主義だ。

(ん？ 人間の気配が1・2……………10?)

「なあ、ココって人間が来たのは俺が初めてだよな？」

「うん、こんな処まで普通は人間なんて近付かないよ。たまに上空を竜騎士が通り過ぎるだけ」

「1キロほど向こうから十人くらいの団体が近付いてる。メイジが2人まじってる」

「え？ 本当なの？」

「うん。間違いはないよ」

「大変！ 長老様に知らせなきゃ！」

あつという間に飛び去り長老に知らせにいったセラを眺めながら、団体が近付きつつある集落の端に向かう。

風を纏い、気配を消す。

序に光を屈曲させて姿も消す。(要は光学迷彩である)

精霊を感じるができない人間には感知することは難しい。

妖精やら、エルフやらは精霊の匂い？ を感じ取って意味をなさないだろうが。

「ヤマトく居るよね？ 姿が見えないけど……」
長老に知らせ、精霊の匂いを辿って近付いてくるセラ。

「ああー姿は隠したけどいるよ」

「私たちと同じようなことができるんだね」

（妖精の仲間くらいに思われてるな…）

「で、どう対処するか聞いた？」

「うん、私たちは守りの魔法しか使えないから姿を消して隠れるって」

「じゃあー見てるだけでいいのかな？」

「ただ、この場所を知られたら引越ししなきゃだめみたい……」
俯き寂しそうな表情に如何にかできないか思案する。

「あの人間たちはなぜ妖精の村にくるんだ？」

「たぶん風石を奪いに来たんだと長老様が言ってた。他の集落も襲われたことがあるって言ってた」

風石とは、風の力が宿った石で、風の力が強い場所で長い年月をかけて出来るものらしい。

人間には貴重な石で結構な値段で取引されるのだ。

（ってことは、山賊か？ 依頼をうけた傭兵って事もあり得るのか）
「追い払っても、次々と来そうだね。まあーなんとかしてみますか」

とりあえず追い払うことを決め身構える。

（殺してしまえば場所の特定はできないだろうけど、相手が分からない以上やめといた方が無難か）

「セラは隠れてて！」

言うが早いか大和は近付いて来る気配に向かって飛んだ。

（俺の姿は見せない方が今後のためかな？）
精霊魔術を使える人間が存在しない世界で、大和の存在は異様なのだ。

幸いこの世界は前の世界と違って精霊の密度というか、存在が大きい為結果的に大和の術の威力が上がっていた。

風を纏い飛ぶように進むと相手の姿が見えた。

先頭には屈強な戦士が四名、姿は確認できないが、風の索敵で左右に30メートルほど離れてメイジ1と戦士2のトリオが確認できる。

（逃げてもらうのに足を怪我されたらまずいな）
姿を現さないまま風の刃を放つ。

相手を視認できずとも気配のみでその場の精霊に干渉し十人全員の手、背中を中心に深くは深い傷を負わせる。

しかし、向かって右にいた戦士は数秒の停滞後、メイジを支え中央の戦士の下へ移動してきた。

遅れて左の三人も中央へと集まる。
周囲を警戒しつつ、右から来たメイジが怪我を負った仲間たちに魔法を掛けていく。

すると傷も浅かったが全ての怪我が一瞬のうちに消えていく。

（へえー系統魔法って便利だな！ 水の精霊術師みたいなことでき

るんだ。ってことはあのメイジは水の系統魔法を使えるってことかな？ただ、自分の怪我を治さないところを見ると、系統魔法では自分の怪我は治せないのか)

自分以外の怪我を治療し終わると、数分の会話の後、もと来た道を戻り始めた。

(戦略的撤退ってどこか？ 人数増やして対策練ってまた来るだろうな)

精霊との同調を全開にして捜査範囲を広げ、相手が範囲外に出たところで大和は村へと帰って行った。

姿を現し、風を纏って村へ辿りつくときセラが胸に飛び込んできた。

「おかえり あいつらは倒したの？」

「いや、帰ってもらった。それと、長老と話がしたいんだけど案内頼めるかな？」

逃がしたことで、また何時現れるとも分からないことに不安顔のセラは、取りあえず大和を長老の下へと促した。

「長老、こちらに近づいて来た人間は追っ払いましたが、態勢を立て直してまた来ることが予想されます。それで、風石を見せて頂けないでしょうか？ うまくいけば此处に寄りつけなくできるかもしれません」

大和の言葉に思案顔の長老は

「追い払ったことに対し、感謝します。それと、風石をお見せするのは問題ないのじゃが、如何されるおつもりで？」

「この村を覆うように結界を張るつかと思います。ただ、永続的に結界を維持するには何らかの力が必要ですので、風石を利用できないかと考えてます」

大和の言葉に「おお！」と驚いた声と共に、出来るなら是非にと長老は返す。

案内された貯蔵庫には沢山の風石が積み上げられていた。1つ1つの石から結構な風の力を感じる。

(これならいけるか)

「この村の中心ってこの辺ですよね？」

「ああ、この辺で間違いない」

「では、この辺に細工をしますので、少々おまちを貯蔵庫の近くにあった木に風で複雑な魔方陣を描くと、中心に直径15センチほどの穴を穿つ。

その中に風石を一つ入れ、風の力を加える。

すると、風の精霊が周囲に集まり、一気に飛散し村全体を覆った。

「これでこの村を周囲から目視できなくなりました。後、村からの出入りは体全体を風の精霊で纏わなければ出来ませんので、襲われることもないと思います。それと、風石の力が弱まれば結界の効果も弱くなりますから、定期的に風石を換えて下さい。多分3年〜5年で交換が必要です」

「おお！ なんとありがたい！ これで、村を棄てる必要がなくなりました！」

顔を輝かせてお礼を言われ、是非にと3つほど風石を頂いた。

そのまま一番近い町の場所を聞き、妖精の村を後にした。

第1章 3話 魔法陣と風石（後書き）

誤字・脱字の指摘&感想などもお願いします。

現在ユニーク1500超えました！ありがとうございます^^

7/15 3点リーダー、誤字、顔文字修正

第1章 4話 同行者と使い魔（前書き）

ゼロの使い魔SSです。オリ主×タバサで進行しますが、原作ファンの方には合わない内容かと思えます。暇つぶし程度に流し読みして頂けると幸いです。

第1章 4話 同行者と使い魔

3、同行者と使い魔

今にも泣き出しそうなセラに別れを告げ、村を後にして3日。ガイア国アルデラ領エギンハイムという村まで徒歩3時間という場所に上空から村を視認し、地面に降り立った。

（此処からは徒歩で村まで行った方が無難だな。精霊術がバレるとやばそうだし…）

よっぽどのがない限り精霊術は守りをメインに使う程度で、杖を準備してからじゃないと攻撃には使えないと考えていた。

前の世界では基本的に精霊術師の中で風は探索や補助がメインの立場であり、攻撃力に関しては4系統最弱だ。ただ、この世界では系統魔法より精霊魔術の方が威力があり、加減しなければすぐにバレル恐れがあった。さらに杖を媒介にしないと使えないことも考慮しなければならぬ。

（さて、この世界の文化レベルってどのあたりだろ？）

この前の賊が銃を持ってなかった。あるのかないのかは分からないが、少なくとも高価なものであると予想された。

（魔法が根付いた文化では科学力は高くて高くはないと思うが…）
科学とは人間の手では出来ないこと、それを効率化することで発展していくものである。

魔法という万能な力が根付いた世界では科学特に機械工学などは発展しにくいのだ。

考え事を整理させつつ村へ歩いていく。

獣との遭遇も考え、索敵範囲を100メートルほど風で行っていた。

(ん？　なんか来る？　人間ではないな…この感じ妖精？)

害意はないとみて、近寄ってくる妖精を待っていると、セラが此方へ飛んでくるのが見えた。

「ヤ〜マ〜ト〜待って〜」

急いで追って来たのか疲れているように見える。

「どうした？　村でなんかあった？」

(魔方阵に不備があったか？　また襲われた？)

嫌な考えが浮かび顔を顰める。

「ハアハア、そうじゃなくって村には何も問題ないわ…ハアハア」

徐々に息を整えつつあるセラのつぎの言葉を待つ。

「私も連れてって」

可愛らしく言われてしまった。

「連れていくって、根なし草な上に一文無し、一つ依頼を受けたが基本やることがない。付いてきてどうするんだ？」

大和自体シャルルからの頼まれごとを終わらせたら、何をすれば良いか分かっていなかった。

ただ、地球に帰ろうとは考えていなかった為、この世界に馴染んで生きていこうとは思っていたのだ。

「いいの〜ヤマトと居れば楽しそうだし　長老様もヤマトに付いて行くならって許可をくれたの」

「ん〜長老の許可があるのか…まあ〜話し相手も欲しかったし
いつかあ」

実際は勝手に飛び出して来たのだが、そんなことは知らない大和は
大して気にせず同行を許可した。基本のんびりな性格である。

因みに、セラはうまくいったとばかりに背中を向けて舌をだしてい
た。

「でも、人間の居るところに出歩いてもいいのかな？ 俺が近くに
いれば害はないと思うけど、珍獣扱いは決定じゃないか？」

滅多に人前へ姿を現すことのない妖精族は人間の興味を確実に引く。
姿を常に消す方法もあるが、術を使うことでの精神の負担が溜まる。

「ん〜大和の使い魔って事にすればいいんじゃないかな？ そうす
れば大和も疑われずに魔法使えると思うし？」

（なるほど、気づかれない程度の魔法なら少しは使えるか。）

「わかった。それで行こう。ってことで、よろしくな！セラ」

「こっちこそ、よろしくヤマト」

エンジンハイムに近づき、風を通して観察する。

お昼時ということもあり、人影はなく、村人は各自、自分の家で食
事中であった。

腹が減っては…ってことで、先ほど狩りをして食事を済ませた大和
は村人が午後の仕事へ出てくるまで、姿を消して村と周囲を探索し

た。

村の北側には畑が広がっており、各家の周囲には木材が積まれている。

林業が盛んな村だと判断する。

村の規模は家が30軒ほどで、100人前後の人口だと思われる。

一人、二人と村人が家から出始めたため、先ほどまでいた村の外へ飛んだ。

「セラ〜出てきていいよ」

「どうだった？」

「村人が午後の仕事へ出かけるみたいだから、村長さんに会いに行こうと思う」

「わかった〜 人間の村へ行くのは初めてだから楽しみ」

機嫌良く返事が返り、セラを肩に乗せ村へと向かう。

村に入るとすぐに斧を抱えた大男に声を掛けられた。

「何者だ？ 何の用でこの村へ来た？」

不審者を見る目で矢継ぎ早に問われる。

「すみません。行商をしながら旅をしているものです。

この森に入ったのはいいのですが、迷ってしまい村を見つけて来たしだいです」

旅人というのは間違っていない為、全てが嘘というわけでもない。ただ、かなり捉え方に差異が生じるが。

「ふん。行商人が珍しいな。

行商というには荷物が少ないように見えるが？荷物はどうしたのだ？」

背中が刀いがい荷物と呼べるものは何もない為疑われても仕方なかった。

「ゲルマニアで荷を下ろして森に入ったところで獣に襲われた為荷物と呼べるものはこの石くらいです。この村の名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

風石を一つ取り出し村人へと見せる。

「ゲルマニア！？よく一人で黒い森を抜けて来たな…その石はなんだ？不思議な石だが…」

「私は少し魔法を使えます。魔法より剣の方が得意ですから、ないようなものですが。こっちの妖精は私の使い魔でセラと言います。

それと、この石は風石といってそれなりに高価なものです」

「はじめまして、セラです」と挨拶をし右肩へと戻る。

「魔法？ 貴方様は貴族ですか？」

いきなり腰の低くなった男に周囲の村人も顔が青ざめる。

「いえ、貴族ではありません。少し素養があつた程度で、大したことは出来ないんですよ」

(魔法〓貴族という世界であれば言い逃れないか…)

「ああ、そうか、すまないメイジと聞いて吃驚してしまった。取りあえず村長の処へ来てもらえるか？」

何事か考えた男は多少の躊躇を残した言い方で村長宅へと案内した。

第1章 4話 同行者と使い魔（後書き）

7 / 2 2 誤字訂正
7 / 1 6 3点リーダー、誤字、顔文字修正

第1章 5話 勉強と初仕事（前書き）

ゼロの使い魔SSです。オリ主×タバサで進行しますが、原作ファンの方には合わない内容かと思えます。暇つぶし程度に流し読みして頂けると幸いです。

第1章 5話 勉強と初仕事

6、勉強と初仕事

村長の家に案内され、村長の居る部屋に通された。正面に村長と村長の息子で先ほどココまで案内してくれたサムが座る。

「ゲルマニアからアルデンの森を抜けてこられたそうで、かなりの腕だと察します。」

お急ぎの用事がないのでしたら、ひとつ頼まれごとをしていただけないでしょうか？」

馬鹿丁寧な対応に吃驚したものの、戦闘の腕を買われての仕事だと感じた。

メイジというのはそうそう居ないのだと思われた。

「畏まらないで頂きたい。魔法といつてもたいしたこと出来ません。急ぎの用もありませんし、旅が長いので多少の争いごとには慣れていますが、内容をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

シャルルからの依頼は情報収集が先であり、この村で情報収集と先立つ物の案件が解決するのなら仕事を請けても良いと考えたのだ。

「実は…最近コボルド鬼が現れるようになったのです。村に近づくことはありませんが、仕事のため森に入りますから、襲われることもあるのです。死者は出ていませんが、怪我人が数名でおります。領主様へ討伐の依頼を出しておりますが、最近王都が騒がしくなっているとかで何時討伐に来ていただけるか分からない状態なのです」

「コボルド鬼ですか、どのくらいの数が目撃されてるのしょう?」

「一度に目撃された数は5匹程度ですが、それで全部かは分かっていません。引き受けていただけるようでしたら、宿と食事、後1日につき10スウ、コボルド鬼1匹に対して30スウを支払います。小さな村ですので、これが限界です。お願いできませんでしょうか?」

価値基準が良く分からないが、申し訳なさそうにしている時点で基準よりは安くなっていると思われた。

「はい、急ぎの用もありませんしお引き受けします」

「おお! ありがとうございます。予算の都合もありますので、長くてニユーイの月までで、もしコボルド鬼を5匹倒していただければ契約終了ということをお願いします」

ニユーイって…なに?とも思ったが取り合えずは頷いておく。

話も終わり村長宅の客間へと通された。

特別やることもなく村周辺の探索ということで村長宅を出る。

村の北へ30メートルほど離れ森に入る。

「この辺でいいかな?」

「何をするの?」

セラが右肩から飛び立ち正面にまわる。

「風の精霊に頼んで周囲を探索するの」

風の精霊と意識を同調し、半径2キロまでの探索を行う。

(探索にはコボルド鬼は居ないな。どこかに棲家があるのかな?)

「コボルド鬼は？」

「半径2キロ以内には居ないね」

「2キロ？」

(あれ？単位が違うのか…通貨単位も違っただし面倒くさいな)

「ん〜さつきセラと合流して町までゆっくり来たでしょ？ あれとの3分の1くらいの距離だね。キロっていうのは俺の元居た世界の単位なんだ」

普通に歩けば時速4〜6キロで、さつきは話しながらゆっくり歩いたから多分時速4キロ。

計算上はさつき1時間半ほど歩いたので、おおよその程度と考えた。

ちなみに、自動巻きの手時計をしているがこの世界で時間が通用するか分からず目安程度に考えていた。

「ん〜さつきの距離の3分の1ってことは…2リーグくらいだね
(なるほど、キロ≡リーグで考えていいかもしれないな)

「じゃあさ、リーグ以外の単位もあつたら教えて？」

「1000サントが1マイルで10000マイルが1リーグだよ」

(おお！センチ、メートル、キロの単位がそのまま使えるとは！
他の単位もきいところ)

こうして夕暮れまでセラの知っている情報を聞き出した。

1、通貨単位 エキュー、スウ、ドニエ、左から金貨、銀貨、

銅貨で1エキュー≡100スウ、1スウ≡100ドニエとのこと。

2、暦は12月あり、4週で1月、1週が8日。今はフェオの月第3週らしい

（ってことは、約3月ほど滞在か。もしくはコルボルト鬼5匹ね）

3、面積と重量の単位は分からない

日も暮れて村長宅へと帰ってきた。

応接間へ入り見回りの情報と、森で仕事をしていた村人の情報を交換する。

今日はコボルドを見かけることはなかったとのこと。

食事を取り湯浴み後客間で時間をつぶす。

先ほど食事の時に暇つぶしになにか本はないか？ときいたが、高価なためないとのことだった。

（字の勉強でもしたかったが……）
さすがに妖精であるセラは字の読み書きはできなかった。

村に滞在して2週間が過ぎた。その間に結構な収穫があった。

まず気が付いたことが、口の動きと聞こえる発音が違うということ。これは、召還された際に何らかの魔法を浴びて、念話のように相手の言葉を理解できるようになったと考えられた。

自分の身体に掛かった魔法を解読しようと精霊術を駆使した結果、微量の魔力を頭を中心に感じる事が出来、解除することもできるがその途端にハルケゲニア語を理解できなくなる為諦める。

ただし、魔力を抑えることは出来た為、口の動きと発音を合わせる事が出来た。

セラに同じ単語を時間差で言うてもらったことで、生活における単語

は理解できるようになった。

理解できた段階で、こんどは村で唯一読み書きが出来る人に会い、時間が空いたときに発音と文字を50音のようにして書き込んでもらった。(20スウあげた)

要は、ローマ字の要領である。片言ではあるがなんとか読むことが出来るようになった。

分からない単語は言葉で発し、セラに聞くことで徐々に難しい単語も覚えていった。(発音が片言で苦労した)

前の世界では職業柄学校へは通えず、家で家庭教師に生きていくうえで必要なことのみを学んでいた。

これには戦闘も含まれる。

知識の面ではインターネットで雑字を叩き込み、仕事で武器の扱いや戦闘術を学んでいたのだ。

ただし、14歳になったばかりのころに、ある事情から家を失い、自分ひとりで生きてきた。まあ15歳でこっちに召還されたから1年程度ではあるが。

ウルのみ月へイムダルの週ラーグの曜日。

コボルド鬼の気配を村の東で感知し、セラをつれて向かう。数は5匹。目撃情報と同じ数であった。

但し、そう遠くない場所で村人3名の気配も感じ取っていた。

「これで、依頼も終了だね」

「いや、今から戦闘になるんだからまだ終わってないよ」

「ヤマトは強いからすぐ終わるよ」

なんとも信用されたものだが、大和自身も負ける気はしなかった。

視認できる位置に付き様子を伺う。

コルボルト鬼は戦闘体制のまま村人がいる方向へ向かっている。そろそろ村人も視認できる場所まで来ていた。

「魔術は最低限で剣でやるか」

精霊術と魔法の区別が村人に出来るとも思わないが、「念には念を入れる」とうのが大和のスタンスである。

「セラはその辺に隠れてて」

「はい。いつてらっしゃい」

なんとも緊張感に欠けるやり取りで…

一番先頭のコボルト鬼に向かって風の刃を飛ばし、最後尾の2匹に飛び掛る。

「ゴルトオ」

先頭の1匹は上半身と下半身がズレそのまま倒れこむ。

最後尾の2匹の間に滑り込み、左右の刀で一閃（二閃？）同時に頸動脈を切られ豪快に血を噴出しながら倒れこむ。

中央にいた2匹は左右に飛び去り、粗末な短剣を構えるが、大きく左に回りこんでいた大和を2匹は見失っていた。

（たしか、コボルト鬼討伐の証拠に首が必要だっけ？ 持って帰るのやだな…）

考え事は後回しにして、背中を向けている1匹に背後から首を落とす、倒れこむ前に風の力で飛び越え、正面から最後の1匹を蹴り倒し、倒れたところに心臓をさして戦闘は終わった。

（ん〜首1つ持って帰って、あとは4匹分の牙もって帰るかな？ 死体を村人に確認してもらえば大丈夫かも）

「おつかれ〜やっぱりヤマトは強いね〜」
上機嫌で大和にまわり着くセラ。和む……………

「不意打ちが得意だからね」

などと話をしていると、戦闘が始まってから気が付いていた村人三人が恐る恐る近づいてきた。

「大和さん！ 大丈夫ですか？」

「ええなんともないですよ。それよりコボルド鬼の首を持って帰らなきゃならないのですが、死体の確認を三人にしてもらって、首1つと牙を4匹分持って帰ることで証拠になりませんか？」

「5匹全部退治してくださったのですか！ スゴイ！ ……多分首1つと牙で大丈夫だと思いますが、荷車を持ってきてますので首5つを持って帰られた方が良くと思います」

口々に「すごい」だの「信じられない」だのと小声で行っていた他の二人も同意してくれた。

申し出をありがたく受け荷車で首を5つ運び五人で村へと帰った。

（セラを匹で呼ぶのは躊躇われたので…）

村長にお礼を言われ、1エキュー50スウを貰い、残金2エキュー90スウとなった。その日は宴となり、宴の場で、他にコルボルト鬼がいなか調べたいので3日ほど滞在させてもらえるように頼む。もちろん報酬は不要だと告げた。

村長は低頭し是非お願いしたいことと、せめて食事と宿は提供したいとの申し出を受けた。

翌日から移動しながらの搜索を開始した。

村人に気づかれぬように上空から風で搜索すること2日目、東に5リーグ離れた場所に複数の気配を確認した。単位を覚えたのでハルケギニア風に……………

その日は日も落ちた為、村へ帰り翌日改めて向かうことにした。

「色々調べましたがこの周辺にコボルド鬼は確認できませんでした。もう大丈夫だとは思いますが一応領主様に掛け合って、搜索させたほうがよろしいかと思えます」

「何から何までありがとうございます。

そのように領主様へは伝えておきます」

翌日

「何も無い村ですが、近くにいらした時は是非立ち寄ってください」

「では、失礼します」

丁寧に挨拶をし、村人に送られ徒歩で東に向かう。

「何でコボルド鬼がいっぱい居ることを伝えなかったの？」
理解できないという表情でセラが問いかけてくる。

「退治してもこれ以上あの村では報酬が難しいでしょ？かといって、無償で退治したら変に有名になっちゃいそうだし」

セラとしては大和がコボルド鬼を退治するのは確定で話を振っており、

大和も退治することは前提で話が出ている。

なんとも人の良い話である。

十分に村から離れ、風を纏って飛び立つ。
数分で洞窟へとたどり着いた。

「ん〜30匹くらいいるな…。ちまちまやってたら時間かかるしメンドイ」

「風で一気にやっちゃえば？」

「ん〜〜あ！ いいこと考えついた」

洞窟の入り口から3メートル上に岩の出っ張りを見つけ、ご機嫌な口調で言い放った。

少し精神を集中し、何時もより威力のある風の刃を解き放つ。

風の刃は岩の下から一気に斜め上へと吸い込まれ、地響きとともに入り口を岩が覆った。

「後は、洞窟内の酸素を無くしてと……………はい終了」

風で探索した結果、10分後には洞窟内の生命反応が全てなくなつた。

「なんか、豪快に終わらせちゃったわね…」

啞然としながらも半笑い状態のセラ

まあーミッション・コンプリートってことでいいんじゃない？

第1章 5話 勉強と初仕事（後書き）

7 / 16

3点リーダー、誤字、顔文字修正

第1章 6話 情報収集と噂話

7、情報収集と噂話

「やっと大きな町に着いたな」

眼下にはガリア国アルデラ領の町アルデラがあった。徐々に高度を下げ、町から3リーグほど離れた森に下りる。

「あそこに用事があるの？」

相変わらず右肩で寛ぐセラが大和の髪をもてあそびながら問いかける。

「用事っていうか、情報収集と観光」

エンジンハイムを発つてからいくつかの村を巡り、情報を集めていたが、小さな村では大した情報は得られていなかった。

他の村でも、コボルド鬼退治や山賊退治などの仕事を請け負い、持ち金12エキュール80スウまで増えていた。

村を巡っているうちに召還されてからすでに半年が経過している。

「にしても、この格好は…落ち着かないな」

「似合ってるよ それに大して前の格好と変わらないじゃない」

「いや、色合いとか見た目は大して変わらないけど生地がね…」

現在、大和の着ている服は、立ち寄った村で仕入れたハルケギニアでは一般的な平民の服であった。

黒いズボン（裾が広がってスースーする）に薄い茶色のシャツ。さらに、皮製の粗末な胸当てを着けていた。

生地は荒く、ゴワゴワしているため着心地はあまりよくない。
行商は組合のパスが必要らしく、傭兵ということにするためだ。
前着ていたジーンズに黒いシャツ、黒いコートは背中のリュックに
入れている。

「この町でシャルロットって人のことが分かればいいんだけど…シ
ヤルの身なりが良かったし、魔法を使えたようだから貴族様確定
だろうな…」

貴族という言葉に睥睨しながら今後の展望に精神が沈む。

立ち寄った村での話しでは、表面上「貴族様のおかげで」とか「貴
族様は素晴らしい方々で」と話していたが、酒場で話し込むと
いい噂なんて一つもなかった。

貴族は魔法が使える。

平民は魔法を使えない。

一部魔法を使える平民もいるが、貴族との交わりによるもので要は
妾だったり、犯罪まがいでも出来た子供ということ。

貴族と平民の格差は天と地。

町で肩がぶつかっただけでも殺されることがある。
もちろん殺した貴族を罪に問うことはない。

話をまとめると、中世ヨーロッパあたりと同じような感覚。

唯一の違いは魔法が表舞台に上がっている事と、モンスターなどが
存在することか？

「おい！ 止まれ！」

門番に槍を突きつけられ問いかけられる。

「何のようでココに来た？ 素性を明かせ！」

高圧的な態度で一方的に話しかけられた。

「仕事を求めて旅をしているものです。傭兵として各村に立ち寄りコボルド鬼や山賊の退治をしてきましたので、兵士さまにご報告と村の代表から手紙を託ってまいりました」

色々な村を巡ったうち、2つの村で「アルデラに行く」と伝えたところ、手紙を託ったのだ。

手紙を兵士へ渡し、しばらく待つように言われる。

「その妖精はお前の使い魔か？」

見たところ杖は持っていないようだが…剣と契約でもしているのか？」

他の村でも不思議がられ問われたことがあった。

話の内容で『杖』という形に拘らずとも、

魔法の媒介には使えるということが分かっていた。

「はい少しだけ魔法の素養がありましたが一、身を立てるほどではありませんので剣を使っております」

「ん〜妖精を使い魔にしている時点でかなりの使い手だとおもったが、

実力だけで選ばれるわけではないようだな」

勝手に納得しなにやら思案顔で無言になった。

暫くして…手紙を持って行った兵士が戻ってきた。

「討伐の件はご苦労だった。

これといって不信なことはないので町への立ち寄りを許可する」

「ありがとうございます」

深く頭を下げ町の中へと入っていく。

「わあ〜人がいっぱい!」

町に入つてすぐに露天の並ぶ通りに出る。

溢れかえるほどの人に興味津々といった表情のセラが肩の上からキョロキョロと辺りを見回している。

「まずは宿屋をさがさなきゃ」

セラの為に果物を数個買った際、店主に安い宿屋を紹介してもらった。

大通りからそれ、少し路地を進むと紹介された宿屋へと到着する。

その宿屋は『流れる希望亭』という名前だった。

(希望が流れちゃまずくね? なんてネーミングセンスだよ……)

宿を取り荷物を置いて町をぶらつく。

「ねえねえ、あれはな〜に?」

「あれは?」

「これおいしいね」

はしやぎまくりのセラに苦笑しつつ周囲の噂話に耳を傾ける。

「オルレアン様がお亡くなりになってからたったの半年で、奥様まで病気になるれたそうよ……」

「それに、ココ半年の間に王都で……」

「最近貴族様のお屋敷に盗みが入ったらしいわ……フーケ……」

重要そうな話はあまり聞こえてこなかったが、

オレルアンって偉い人が死んで奥さんまで病気になるたとのこと。

(なんとも貴族らしいことで陰謀だらけだな)

(そろそろ戻って酒場で情報収集しますかね)

宿の1階は酒場兼食堂だったが問題があった場合そのまま2階で寝るのが難しくなると考え、路地裏を適当にうろつき酒場を探してい

た。

「待て！」

路地の角から全身を真っ黒なローブで包み込んだ人影が飛び出し、その後ろから衛兵らしき甲冑をまとった騎士が3人現れる。

大和にぶつかる直前ローブ姿の人物は空高く舞い上がり屋根伝いに消えて行った。

「くっそ！ また、フーケに逃げられた！」

振り切られた3人の騎士は悔しそうにフーケを罵る。

「すみません、先ほどの人物は盗人かなにかですか？」

「なんだ？ フーケをしらんのか？ 悪名高い盗賊だ。もし見かけたら知らせる！」

上司にでも報告に行くのか、早足で元来た路地に消えていく。

「フーケ？ 噂話に出てた盗賊か？」

昼間、耳にした話を思い出しつつそんな話があったことを思い出す。

「盗賊だって！ 捕まえたらお礼くれるかもよ？」

「んゝあまり目立ちたくない……」

セラが面白そうに話を振ってきたが、大和がやる気なし！ という態度でいると「面白そうなのに」だとか「お金があれば美味しいものいっぱい食べられるのに」だとか言っている。

軽くスルーして一軒の酒場へと足を向けた。

酒場へと入りカウンター席へと座る。

酒場には4つの丸テーブルに椅子が5つづつ、カウンターに5席あり25人ほど座れるようになっていた。大和を含め13席が埋まっている。

カウンターに座った大和は簡単な食事とエール、それとセラ用に果物の盛り合わせを注文する。

30分ほど食事に専念し、エールを追加注文し店主に話かける。

「さつきフーケとか言う盗賊を見かけたんだけど、追いかけてた騎士は振り切られて苦虫をつぶしたように悔しがってた。そんなに腕のいい盗賊なのかな？」

「なんだ、おまえ『土くれのフーケ』をしらないのか？ 貴族ばかりを狙うメイジの女盗賊さ」

心底驚いた表情でなにやら自慢げに店主は語りだした。

「あまり評判の良くない貴族ばかりを狙って盗みを繰り返してるが誰も捕まえることが出来ないのさ。まあー平民からするとスカッとさせてくれるヒーローだな」

（なるほど、馬鹿な貴族ばかりを狙ってるため、平民からすると『ざまーみる』てきなことか）

「最近王都がきな臭いって聞いたがそれもフーケのせいなのかな？」

「いや…………おまえよそ者か？」

「ああ、小さな村を巡ってたからこつちについたのは今日の昼でさ、噂話程度にしか知らないんだ」

そういつて金貨を1枚手渡す。

「ん。まあーそういうことなら知らなくても当たり前かもな」
軽く口角を上げただけの笑いで金貨を懐にしまう。

- 1、半年前に王弟のオルレアン公シャルルが狩に出かけ亡くなる。
- 2、つい先日その婦人が病気に倒れる。
- 3、ココ半年で王弟派の貴族が複数名事故・変死・追放・行方不明などが続いている。

大きくはこの3つの情報が得られた。

「あと、シャルロットという人を知らないか？」
ついでとばかりに聞いてみた。

「シャルロット様は亡くなったオルレアン公シャルル様の一人娘だ」
そんなことも知らないのかと言わんばかりに即答された。

「なるほど、今シャルロット様が何処にいるか知らないか？」

「さあ〜な、そんなことを聞いてどうするんだ？」

「いや、気になっただけさ」

もう話すことは無いぞと小声で話し店主は仕事へと戻っていった。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

アルデラへと来て1週間が過ぎた。

その間、情報収集に走り回っていたがシャルロットに関する情報は

大して得られなかった。

噂話のなかでは、フーケが派手に盗みを繰り返しており町民の娯楽話が増えていることが分かった。

「フーケと接触できないかなあ？」

知らないうちに言葉に出ていたが大和は気づいていなかったが、

「なんで？ やっと捕まえる気になった？」

目の前をふわふわと浮かんでいたセラが振り向き声をかけきたことで、

思わず呟いていたことに驚き他の人に聞かれなかったかと周囲を警戒した。

「いや情報が欲しいからさ、盗賊なら情報に強いんじゃないかなと」

昼食をとるため宿屋へと戻り1階で昼食をとる。

「なんか、フーケ捕縛の為に結構な数の兵士が集められたって…」

何の気なしに聞いていた噂話に大和は考えをめぐらし、『ニヤツ』と不適に笑った。

## 第1章 6話 情報収集と噂話（後書き）

久々に原作キャラが登場！

ココから一気に……イケルノカ？

今後もダラダラと行きそうな予感であります。

7話まできてヒロインが名前だけしか登場しないとか・・・馬鹿なの？俺馬鹿なの？

誤字・脱字の指摘ありがとうございます。

ユニークも3000を超え順調な伸び率に感動しております。

お気に入り登録してくださった方、評価をつけてくださった方、ここまで目を通して下さった方に心からの謝辞を^^ママダマダガンバリマス

7/15 3点リーダー、誤字、顔文字修正

## 第1章 7話 盗賊と追跡者

### 8、盗賊と追跡者

真夜中の町。

一軒の大きなお屋敷の屋根の上。

遠くに追いかけてっこしている影が見える。

そう、フーケと領主の雇った3人のメイジである。

メイジがファイヤーアローを放てば、フーケが土の壁で防ぐ。

フーケが土の壁を高く作り上げ道をふさげば、ファイヤーボール2つとエアールハンマーが飛び壁を粉碎する。

「ああ〜こりやフーケも捕まるな〜」

大捕り物を見学しながら、のんびりと口ずさむ。

「そんなにのんびりしていいの？」

今回の『フーケ捕縛クエスト』に参加した大和は全くやる気も見せず見学に徹していた。

捕縛した者には1000エキューが支払われるとあって結構な人数が集まっていた。

「ん〜そろそろ行動を起こさないとだめかも？」

言葉にした内容と態度がかみ合わない。

「もう！ 急がなきゃ他の人に先越されちゃうよ」

一人焦るセラを余所にのんびりと立ち上がると風を纏って屋根から

離れる。

立地的にはあの川がいいかな？

光学迷彩を纏い姿を消すと川の上空で停止する。

丁度、川がある場所目指してフーケが走ってきた。

《一瞬でいい、後ろに壁を作って追手を足止めしろ。そのまま真っ直ぐ向かい、川を飛び越えろ》 風に言葉を乗せて遠くのフーケへと言葉を伝える。

「だれだい！？ どこから……」

《時間がない、逃げ切りたかつたら言う通りにしろ》  
相手の言葉を風伝いに聴き、遮るように命令する。

フーケが背後に土壁を作り一気に跳躍。

フライを利用して向こう岸へとたどり着く。

土壁を破壊し跳躍する2人のメイジ達は川の中央にたどり着く前にその場にとどまったメイジが詠唱を終える前に、水飛沫が視界を覆った。

大和が空気を圧縮し川の中央に叩き込み、盛大に水を巻き上げたのだった。

水しぶきの中今度は体中に電気を浴び、二人のメイジが川の中へと落ち、留まったメイジはその場で昏倒する。

風を複数操りぶつけ合うことで、摩擦により静電気を作り上げた結果だった。

水飛沫のせいで、遠くから迫っている追手には何がおきたのか分かっていない。

フーケは水飛沫が上がった時点で逃げることをやめ、一部始終を見ていた。

ただし、この現症を起こした人物は何処にも見当たらなかった。

(ふう、終わったな)

呆然とするフーケの傍へ降り立ち、光学迷彩を消す。

「なっ！」

身構えることも忘れ、動揺の色を濃く現したフーケの表情はあどけなくかわいいと感じる。

「取り敢えず隠れようか。他の追つてが迫ってるから……」

何でもないように声をかけ、フーケの手をとり暗い街へと消えて行った。

「なんで助けたのさ？あんたも私を捕まえようとしてる奴に雇われたくちだろ？」

追手が迫っていたこともあり、大人しく大和の泊まっている宿まで付いてきたフーケは部屋へ入るなり口を開いた。

「雇われはしたけど、フーケの情報が欲しかっただけで、捕まえる気は最初からなかったよ」

「ええええええ！折角捕まえたのに！ お金もらえるのに！ なんで……！」

「いや、捕まえるって言うのは情報を貰う為で、礼金欲しさではな



いぞ…最初から。一度も報酬云々は話してないと思うが？ それに、こないだ情報が欲しいってセラにも言ったよね？」

「ぶう」

不貞腐れたセラを宥めつつ、フーケに視線を向ける。

「情報つてのはなんだい？ 助けてもらったし答えれる範囲でなら教えるよ。ただし、知らなかったり話すわけには行かないことで、あんたが得をすることは無い場合でも逃がしてくれるんだろっかね？」

「そのことは約束する。フーケが盗賊だろうがなんだろうが、弱いものいじめをしてるわけではないことは分かっているから」

「…あんた、変な奴だね。まあいいさ。で？ 何を聞きたいんだい？」

「まず、オルレアン公シャルルの娘シャルロットの居場所が分かれば教えて欲しい。」

「…お姫様の居場所なんか知ってどうしようってのさ？」

「質問してるのは俺なんだけど？ 別に危害を加えようとかじゃないから知ってるのなら教えて欲しい」

「…本当かどうかは知らないけど、オルレアン家の屋敷に母親と共に幽閉されてるって聞いた」

「オルレアンの屋敷の場所は？」

「トリスティンとの国境近くってどこまでしか知らない」

「わかった。ありがとう」

「なんだい？ それだけかい？」

「ああ。他にも聞いて良いのなら後ひとつ。何で盗賊なんてやってる？ あんたほどの腕なら真つ当で稼げる仕事もあるだろうに？ 余計なお世話するのは分かっているが、今日みたいに何時かは捕まるぞ」

「…わかつてるさ、それくらい。大きく稼がなきゃならない理由と、貴族が嫌いつていう理由で貴族専門の盗賊をしてるってことさ」

「大金が必要な理由を聞いても？」

「…見逃してくれる御礼と、あんたが面白いから特別教えてやるよ。ただし…誰にも言うな」

「ああ、誓って」

「孤児を沢山抱えてるのさ、外に出て働けるのが私一人ってのが理由」

少し寂しそうに、ただ何かを思い出すような優しい眼ではっきりと言った。

「余計なことを聞いた…すまない」

「いいさ。勝手にしゃべっただけだ」

「見かけどおり優しいな、フーケ」

「なんつ…」  
顔を赤くしたフーケは言葉をなくした。

~~~~~  
~~~~~

o u t   s i d e

「ちつ私としたことが畏にはまるなんてね…」  
何時ものようにお宝を手に入れ、屋敷から出た瞬間にメイジ3人に襲われた。  
襲われるタイミングや、周囲を囲まれた状態を見れば畏であることは明白だった。

昨晚、酒場で聞いた情報からして畏だったのだろう。

包围を突破することはできた。

しかし、メイジ3人を撒くことはできず、追いかけてこの最中である。

背後からの攻撃に土壁で対処し、足止めとばかりに飛び越えられないような高い壁を作る。

しかし、メイジ3人による魔法で破壊される。

(こりゃ〜やばいね…)  
半ば覚悟しながらも、最後まで生きることが諦めるつもりはなかった。

(ティファ達のためにも如何にか生き伸びないと…)

前方に川が見えてくる。

(一か八か飛び込んで姿を眩ませるか?)

だが、それでも逃げ切れる可能性は殆どゼロに近いと分かっている。

《一瞬でいい、後ろに壁を作って追手を足止めしろ。そのまま真っ直ぐ向かい、川を飛び越えろ》

「だれだい!? どこから…」

《時間がない、逃げ切りたかったら言う通りにしろ》

何処から聞こえたのか? いったい誰が? 疑問は多く、とてもではないが信用なんてできない。

しかし、このままでは確実に捕まる。

覚悟を決め背後に土壁を作り上げる。

助走をつけて川へとダイブし、フライを唱え向こう岸へとたどり着く。

物陰へと入った瞬間、大きな音に振り返る。

目の前は大きな水柱と水飛沫により視界を遮られ、追手の姿は確認できなかった。

一瞬後、水飛沫のなかに無数の光が発生したのが確認できた。

水飛沫が消え戻った視界に昏倒するメイジ3人の姿が映った。

(水飛沫で視界を遮り小さな雷を作り出すことで3人もメイジを一瞬で倒す。そんな芸当を出来る奴が…)

理解は出来ても実行は無理。それほどにこの現象を起こした者は高い技量をもっていると言えた。

「なっ!」

いつの間にか直ぐ脇に若い少年といえる年齢の男が立っていた。

(何時現れた？ 全く気配を感じなかった)

「取り敢えず隠れようか。他の追手が迫ってるから言うが早いかな、手を取られて暗い道を走りだした。」

手をひかれるままに、少年の後を付いていく。

(10代半ば？ 20までは届いていない。それに肩に乗ってるのは妖精？ いったい何者なんだ？)

「なんで助けたのさ？ あんたも私を捕まえようとしてる奴に雇われたくちだろ？」

少年に促されるままに一軒の宿屋へと転がり込んだ。

追手から逃げ切れたことで緊張も和らぎ、疑問を口にした。

「雇われはしたけどフーケの情報が欲しかっただけで、捕まえる気は最初からなかったよ」

「ええええええ！ 折角捕まえたのに！ お金もらえるのに！ なんだ~~~~~！」

「いや、捕まえるって言うのは情報を貰う為で、礼金欲しさではないぞ…最初から。一度も報酬云々は話してないと思うが？ それにこないだ情報が欲しいってセラにも言ったよね？」

「ぶう」

緊張感の欠片もない会話に脱力し、お金目当てではなく情報ということに興味がわいた。

「情報ってのはなんだい？ 助けてもらったし、答えられる範囲でな

ら教えるよ。ただし知らなかったり、話すわけには行かないことで、あんたが得をすることは無い場合でも逃がしてくれるんだろっね？」

「そのことは約束する。フーケが盗賊だろうがなんだろうが、弱いものいじめをしてるわけではないことは分かっているから」

「…あんた、変な奴だね。まあいいさ。で？ 何を聞きたいんだい？」

盗賊家業をやってて弱い者いじめじゃないから良いなどと言われたのは初めてだった。

結論、馬鹿なやつ。ただし、人の良いってのが付きそつだ。

「まず、オルレアン公シャルルの娘シャルロットの居場所が分かれば教えて欲しい」

「…お姫様の居場所なんか知ってどうしようってのさ？」

(暗殺者？ 完璧に気配を消した技量と魔力。考えられなくはない)

「質問してるのは俺なんだけど？ 別に危害を加えようとかじゃないから知ってるのなら教えて欲しい。」

「…本当かどうかは知らないけど、オルレアン家の屋敷に母親と共に幽閉されてるって聞いた」

(これだけ腕の良い暗殺者がシャルロットの居場所を掴んでいないわけではないか・・・)

「オルレアンの屋敷の場所は？」

「トリスティンとの国境近くってどこまでしか知らない」

「わかった。ありがとう」

「なんだい？ それだけかい？」

（たったそれだけの為に、私に恩を売るようにまわりくどい方法で助けたと？）

「ああ。他にも聞いて良いのなら後ひとつ。何で盗賊なんてやる？ あんたほどの腕なら真つ当で稼げる仕事もあるだろうに？ 余計なお世話つてのは分かってるが今日みたいに何時かは捕まるぞ」

「…わかってるさ、それくらい。大きく稼がなきゃならない理由と、貴族が嫌いつていう理由で貴族専門の盗賊をしてるってとこさ」

「大金が必要な理由を聞いても？」

「…見逃してくれる御礼とあんたが面白いから特別教えてやるよ。ただし誰にも言うな。」

（こいつの目は興味本位というより、心配してくれていると感じる）

「ああ、誓って」

「孤児を沢山抱えてるのさ、外に出て働けるのが私一人つてのが理由」

そう、貴族が勝手に起こした戦争で、済むところも家族も失った子供たち。

何としてでも助けたい。

「余計なことを聞いた…すまない」

「いいさ。勝手にしゃべっただけだ」

「見かけどおり優しいな、フーケ」

「なんつ…」

餓鬼のくせに!!!

~~~~~

y a m a t o s i d e

夜が明けきる前にフーケは宿を後にした。

オルレアンの屋敷の場所がトリスティンとの国境と言われたが、大和には土地勘が全くなく、地図を手に入れることを考えた。

1日をつぶして手に入れた地図は大まかなことしか書かれておらず、今いる場所から西ということしか分からなかった。

更にもう一日つぶし、旅に必要な物を揃え、明日の旅に備えて宿へと戻っていた。

「色々買い込んだなあ。セラの着替えとおやつ（ドライフルーツ）が一番高かったけど…」

旅用品として、寝袋が欲しかったが、そんなものは存在しなかった。厚めの毛布で我慢した。

他にも、調理用の鍋・干し肉などの保存食、着替え、アルコール度の強いお酒（怪我したときの消毒用）、包帯、各種薬などを買い込んでいた。

中でも、セラ用の着替え3つが高すぎた。

「1着2エキューって…俺の服なんて5分の1だぞ」

今回の買い物と宿代で残金が3エキュー30スウまで減っていた。

「女の子の服はそれくらいするのよ」

「…布の使用量は少ないのにな、加工代だろうね…」

翌朝早くに宿を引き払い、オルレアンの屋敷へ向けて旅立った。

第1章 7話 盗賊と追跡者（後書き）

今回は長文です！駄文です！フーケ視点を入れただけの…
原作キャラとの絡み！

ただし、大和にハーレムは来ません！（これは決定事項）

でも、フーケには幸せになってもらいたい…
どうにかするのが俺の仕事…そうですね><

7/15 3点リーダー、誤字、顔文字修正

第1章 8話 芝居と信用

9、芝居と信用

「お？」

「どうしたの？」

町を出て2日目、街道を東へ進んでいたが感知できる範囲ギリギリに多数の生命反応を感じ取った。

無意識下では20メートルほどの感知しかできないが、少し意識するだけで2リーグまでの感知を可能としていた。

「2リーグ先に人が15人いる…あ！3つ生命反応が消えた。戦闘中みたいだな」

速度を上げ、視認できる場所まで移動する。

「馬車を山賊が襲ってるってとこかな？急ぐよ！」

馬車の直ぐ傍に騎士2人が剣を構え、山賊10人が囲んでいる。

馬車の中には人の反応はなく、視認出来ている者が全てだった。

倒れている3人はどれも騎士のようで山賊には被害が出ていない。

（おかしいな…少し様子を見るか）

山賊程度に騎士が遅れをとって3人もの犠牲が出ている。対する山賊には死人はおるか怪我をしている者も見られない。

（ん？ 森の中に1人隠れてる？ 気配を消してる処を見ると密偵

か?)

200メートルほど離れた森の中にメイジらしき反応が1つあった。

(話を聞いてみるか)

隊長らしき騎士に風で語りかける。

《突然で悪いが助太刀が必要ななら剣を掲げて頂きたい》

数秒反応を待つが剣を掲げる仕草はなかった。

(やっぱりな。理由は分からないが演技で間違いないか)

小声でぶつぶつと語りかけていた大和を不審げにセラが見つめる。

「ねえねえ、早く助けなくてもいいの？ あの人たちやられちゃうよ?」

「ああ〜ごめん。騎士に話しかけてたんだ。助太刀無用ってさ」

「ええ〜あの人たち死にたいの?」

「いや、何か考えがあるんだろ」

(密偵はどうするかな? 取りあえず寝とってもらおうか)
背中から風で衝撃を与え昏倒させる。

騎士がもう一人倒され、先ほど話しかけた騎士1人が山賊10人と向かい合っていた。

騎士はなにやら目配せをして風の魔法を山賊の目の前に打ち出す。山賊達は掠り傷を負うこともなく逃走する。

(どうやら終わったようだな)

消していた気配を戻しゆっくり騎士へと近づいていく。

「おまえが話しかけて来たのか？ いったいどうやって？」
不審げに騎士が話しかけてくる。

「えーっと、風の魔法を使いました。オリジナルですのでなんと
うか、感覚でやってることですので、説明が難しいです」

「…それで、如何して演技だと気づいた？」

「山賊程度に騎士様が遅れをとるとも思えませんし、山賊には怪我
人すら出てなかったです。違和感があっただけです」

「…貴様は何者だ？ 風のメイジだと言うが貴族には見えない」

「しがない傭兵ですよ。もちろん貴族ではありません。それと、向
こうの森に密偵らしきメイジがいましたが…、お仲間ですか？」

「っ、他にもいたか」

駆け出そうとする騎士を留める。

「仲間ではないのなら謝る必要はないですね。気絶させてますので
ホッとした表情で大和が声をかける。

「そうか、感謝するのは此方のようだな」

丁寧に頭を下げ、お礼をいわれた。

「私は、バツソ・カステルモール。ガリア東薔薇騎士団の花壇騎士
だ」

「俺は、草薙大和。こっち風に言えば、ヤマト・クサナギと言いま
す。それにしても、あなたが隊長だと思っただんですか？」

「なぜそう思ったか聞かせてもらえるかな？」

「ここに居た騎士団5人の中でバツソさんが一番強い。それに雰囲気というか、落ち着きの差ですね」

「まあ実力差は間違っていないが、落ち着きという面では演技だったからな……山賊も仲間だ」

「ってことは、バツソさん以外の騎士が敵だったってことですか？」

「まあーそう言う事だ。私はオルレアン候の屋敷まで向かっているが、クサナギはどこへ向かって旅をしているのか聞かせてもらえるか？」

「シャルロット様へとお目通りを願いたく、オルレアン候の屋敷へと向かっています」

バツソを見て、何故かシャルロット側の人間ではないかと感じた。態々演技と称して自分以外の騎士を排除したのに、不審者といったも過言ではない大和と話をしている。

更には頭を下げるバツソにかまをかける意味でもシャルロットのことを話す。

「…理由を聞いても？」

目を少し細め、今にも切りかかるつかという態度が見て取れた。

「そんなに警戒しないで下さい。頼まれ物をお渡しするだけです。危害を与えることはありません」

(やはり、王弟派の騎士か)

「私に言付けるといふのは無理か？」

「そうしたいのは山々ですが、ご本人に直接渡すように頼まれました。危険なものではありません」

「…依頼人を聞くわけにはいかないだろうか？ 無理を言っているのは分っているが、シャルロット様を万が一にも危険に晒す訳にはいかないのだ。」

「何このおじさん！ ヤマトが変なことすると思ってるの!?!」
いきなりセラが口を挟みバツソの度肝を抜く。

「セラ？ そんなに怒ることは言われてないよ。シャルロット様を守る為に用心を越したことはないんだよ」

「だって……ヤマトのことを不審者か何かのように言うから……」

「ふふ、セラありがとう」

「…っ」

「ああ、すまない。この妖精はクサナギの使い魔か？」

「いえ、使い魔ではなく、友人です。どこを探してもルーンはありませんが、女の子ですので、調べるのは控えて頂けると助かります」

（…っ）

大和の隣でなぜか照れるセラを不思議に思いながら、信用を得る為にある程度の真実を話す。

「…妖精は嘘つきだと言われている」

「なななんですって~~~~~!!」

先ほどとは違う意味で顔を真っ赤にして叫ぶ。

「だが相手を傷つけたり、悪意ある嘘は絶対に付かないそうだが
幾分落ち着いたセラにバツソは微笑を浮かべる。

「クサナギのことを信用しよう。一緒にお屋敷まで同行しよう」

(セラのお陰で信用されたってのが意外だ…)

「ええ、よろしく願います」

「お屋敷の周囲にも密偵が潜んでいるはずだ。その格好では怪しま
れるな…。こいつの鎧なら良さそうだ。これに着替えてもらえるか
？」

「そうですね、その方がいいですね」

亡骸から鎧を脱がし、血を丁寧に拭きとって大和は鎧を着ていく。

第1章 8話 芝居と信用（後書き）

次回、ついにタバサと出会います！

長かった…本当に長かったよ～～～><

書いてて楽しいから良いんだけどねw

7/15 3点リーダー、誤字、顔文字修正

第1章 9話 真実と願い

10、真実と願い

「居ますね、屋敷の東側に一人」

「ヤマトは此処から相手の存在を確認できるのか？」

屋敷まで200メートル、バツソには確認できないが風で探索していた大和には気配を巧妙に隠すメイジの存在が確認できていた。

「ええ、気配を消すのがうまいので、ココまで来てやっと分った感じですが」

「色々謎が多いなヤマトは…」

出合ってから2日。

名前で呼んでもらえる程には信用を得ていた。

「予定通り放置でいいですか？」

「ああ、始末すると返って怪しまれる」

小声で言葉を交わし屋敷へと向かう。

屋敷に近づくと初老の男性が門の前で迎えてくれた。

「いらっしやいませ、バツソ様。

御付の騎士様は御初かと存じます。

私、当屋敷の執事を勤めさせて頂いております。
ベルスランと申します」

「東薔薇騎士団所属、カルロ・ヘリオールと申します」
先の戦闘で命を落とした騎士の名前を伝える。
バツソがベルスランに目配せをする。

「御付の方はお一人ですか？」

「此方へ来る途中で山賊に襲われ、私たち2人しか生き残れなかつたのだ」

「左様でございますか、それは大変でございました」
数秒目を閉じ黙祷を捧げる。

「ささ、シャルロット様がお待ちです。お入り下さい」

“コンコン”

「お嬢様、バツソ様がお見えです」

軽くノックし声をかけるが中からの反応は無い。
10秒ほどの時間を開け扉を開ける。

書斎のような部屋に大量の本が積みあがっていた。

「失礼します。シャルロット様、バツソ様がお見えです」

「…」

「此方へおかけになってお待ち下さい」
そういうとベルスランは部屋から出ていった。

「シャルロット様、お元気そうでした」

「なに？」

窓側の椅子に腰掛け、本を読んでいたシャルロットは本から目を離すことなく一言だけ言葉を発した。

シャルロットは身長140センチほどの可愛い少女で、少し釣り上がった大きな蒼い瞳で大きな眼鏡を掛けている。髪も蒼くショートカット、利発そうな顔で感情を消している為大人びた表情だ。

「騎士団より仕事を仰せつかって参りました」

苦い表情で用件を伝え手紙をシャルロットへと渡す。

「そう」

またも一言だけ発し受け取った手紙に素早く目を通す。

ベルスランがティーセットをもって部屋へと入ると徐にバツソが詠唱する。

周囲に妙な力が働く。

「音を消しました。ココからは内緒の話ということで」

ベルスランと大和が頷く。シャルロットは相変わらず本に目を落とされており何の反応もなかった。

「まず、ヤマトの話を知りたい」

バツソの言葉にシャルロット以外の視線が集まる。

「では、シャルロット様これを受け取ってください」
シャルルから預かったブローチをシャルロットの前に差し出す。

「……!!!」「……」
今まで無反応だったシャルロットだけではなく、バツソ、ベルスランも目を見開きブローチを凝視する。

奪い取るように手にしたブローチをシャルロットは涙を流しながら抱きかかえた。

「失礼ですが、ヘリオール様は之をどちらで手に入れられたのですか？」

「あ、すみません先ほどは偽名を使わせていただきました。」

私はヤマト・クサナギと言います。騎士団の人間ではありません」
一拍置いて、

「このブローチはシャルル様本人よりシャルロット様へお渡しするようにと依頼を受けたものです。依頼を受けた際に依頼料の換わりにとこの指輪を頂きました」

「……!!!」

「シャルル様本人から？ 何時！どこで！」
ベルスランが叫ぶように問い、泣いていたシャルロットと共にバツソまでもが食い入るように大和を見つめる。

「まず、聞いていたきたい事があります」
落ち着かせようと数秒の時間を開ける。

「私はこの世界の人間ではありません。シャルル様の魔法によってこの世界へと召還されました。残念ながらシャルル様は毒を受けて

いた為、直ぐにお亡くなりになれましたが、亡くなる前に私に依頼をしたのです」

シャルルの死亡を伝えるとシャルロットは泣き崩れ、ベルスランとバツソは沈痛な表情でうな垂れた。

「とても信じられるような話ではないが、ココに来るまでに不思議な力を使っていたのは異世界の魔法なのか？」
沈黙を破りバツソが問いかけてくる。

「ええ、私は風術師。風の精霊を使役することが出来ます。此方で言う先住魔法と同じです」

「先住魔法を使えると!?!」

「ええ此方の世界では珍しい物のようですが…
私の居た世界では極一部ではありますが、精霊術を使う人間が存在しました。」

「それで、妖精を友人といったのか…」

「ある意味では私とヤマトは仲間なの」
バツソの言葉にセラが反応する。

「お父様を襲った相手は？ ジョゼフなのでしょ!?!」
泣き崩れていたシャルロットは厳しい目を大和へと向け胸にしがみ付く。

「襲った相手はわかりません。召還されて直ぐのことで…相手を殺してしまいましたので。シャルル様は私の手で埋葬しました」

大和の言葉を聞いて、大和の胸に顔を埋め泣き続ける。

「ヤマトの話は分った。いや正直信じられないが妖精を友人と言い、不思議な魔法を使うことだけでも信じなければならぬと思う」
「バツソの言葉にベルスランも頷く。」

「ヤマト、之からどうするのだ？」

「…特に決めてはいません。元の世界に帰りたいとも考えていませんし、この世界でやりたい事を探そうかと思ひます」

「…ヤマト、私たちに協力して貰えないだろうか？」

「協力と言つと？」

「私の肩書きはガリア東薔薇騎士団の花壇騎士であるのだが、今でもシャルル様に忠誠を誓っている。シャルル様亡き後はシャルロット様への忠誠を誓ったのだ。表面上はジュセフに忠誠を誓っているように見せているが、何時かはジョセフ王権を倒すことを目的に仲間を増やしてるのだ」
「一度紅茶を口にし再度口を開く。」

「ヤマトにはシャルロット様と婦人を他国へ連れ出してもらいたい。但し、ご婦人の病気が治つてから出ないとシャルロット様はガリアから動かないと言い張っているのだ。だから、まずはシャルロット様と婦人を匿える場所を探して欲しい」

「……………」

シャルロットの存在を胸で感じ、大和は過去を思い出していた。

.....

大和は古くから風術師として東京に存在する『草薙家』の長男として生まれた。

風術師としての力量は平凡で跡取りとして教育を受けていたが両親、親族からの期待は8歳になる頃には落胆へと変わっていた。

跡取りとしてしか見てもらえず、両親からの愛情を感じたことはなかった。

そんな中、二つ下の妹『遥』だけが大和にとっての家族だった。

風術師として大和以上の才能を見せ両親からの期待も高かった。

そんな遥は大和にとっても懐いており、見かければ後を付いてまわることがよくあったのだ。

そして、大和が14歳になって直ぐ、土門家が草薙家を襲うという事件が起こった。

土門家は土術師の名門で草薙家とは仕事を通してぶつかる事も多く、事あるごとに衝突していたのだ。

正面から遣り合えば草薙家がまけることなどありえなかった。

だが、草薙家のなかに裏切った一派が存在し、草薙家は1200年の歴史を途絶えることとなった。

この事件の時、仕事で家を離れていた者が数名存在した。その中に大和も含まれたのだ。

しかし、妹の遥は両親と共に殺されてしまった。

その事実を知った大和は普段の温和な性格をかなぐり捨て、土門家への復讐を開始する。

単純に威力という面では劣るものの、暗殺という手法で土門家の当主、重臣を3ヶ月という期間で亡き者とした。実質的に家を支える重鎮が居なくなった事で、土門家の歴史も幕を閉じたのだった。目的を失った大和は抜け殻のように行き続け今に至る。

.....

（遙と同じくらいか…口数が少ないのは心を閉ざしているからだろうな。

感情が壊れていないことはこの泣き顔で確信できる…タスケタイ）
妹と被ったというのも少なからずあった。だが助けたいと思う気持ち
ちは本当だった。

「分りました。微力ながらお手伝いさせていただきます」
決心した大和は真っ直ぐにバツソの瞳を見つめる。

「恩に着る。匿う場所はヤマトに任せる。それと之は足しにしてくれ」

懐から袋を取り出すと大和へ差し出す。

受け取った大和は中身を確認する。300エキューが入っていた。
今後、どのように匿う場所を探せばいいのか分らず、手持ちも少な
かったため、遠慮なく頂くこととした。

「コレをお返しします」
シャルルから受け取った指輪をシャルロットへと差し出す。

「…お父様が貴方にお渡ししたものだから、受け取れない」
瞳を潤ませながらはつきりとした断りを述べる。

「大事な物だと分ります。私が持っていてても価値はありませんが、
シャルロット様には思い出のある大切なものでしょう?」

「…何時かその指輪に相応しくなれた時に返してもらおう。」

その時までヤマトに持っていて貰いたい」

言葉の意味が良く分らなかったが、シャルロットの覚悟が伝わり預かることを了承する。

「分かりました。その時まで大切にお預かりしておきます」

泣き止んだばかりのシャルロットが少しだけ笑ったような気がした。

第1章 9話 真実と願い（後書き）

タバサと出合った〜

出合っただけ………まだまだスイートな状況にはならんのだよ！

前回の前振りで期待してくださった方、申し訳ありません><

簡単に出会いをまとめて、次に進もうと思ったのですが、重要なシーンだと思いましたので、シリアスに引っ張りました。ごめんなさいm) ————— m)

原作介入までは突っ走って連投しようかと…体力の続く限り…

7 / 16 3点リーダー、誤字、顔文字修正

7 / 22 誤字訂正

第1章 10話 転生者と面接

11、転生者と面接

トリステイン王国、王都トリスタニア。
王城をはじめ白い石造りの建物が目立つ美しい街である。

大通りを背中に刀を二本さした全身黒尽くめの大和はセラを肩に乗せて歩いていった。

「しかし…人が多いな。道が狭いから特別そう感じるんだろうな」
首都の大通りと言われているが幅が5メートルほどしかなく、日本の商店街などと比べてしまい、非常に狭く感じてしまう大和だった。

「あれ食〜べ〜た〜い〜」

「あれってなんだろう？」

「ヤ〜マ〜ト〜早くううう！」

(街に寄る度にこれだよ。300エキューは支度金だっていったのに…)

大通りを進み、商業系のギルドを探す。

「お！ここかな？」

大きな商店のような建物を見つけた。

玄関前に大きな掲示板を設置している所を見ると唯の商店ではないと思われた。

建物へと入る前に掲示板に目を通す。

募集欄には『調理人』『兵士』『文字の読み書きが出来る人募集』
『土のメイジ募集』など多岐に渡って存在した。

内容を眺めていくと『全ての職種』という欄を見つける。

(大雑把な…目を引くという点では合格か…)

『文字の読み書きと計算が出来る人』『魔法が使える、戦闘経験がある人』という欄を読んで吃驚した。

この二つは領主付きの仕事であり公務員的な職種だと思われた。

給金が月給で20〜50エキューと破格であり、何より有給休暇や年2回のボーナス。

更には週休2日の制度まで書かれていた。

「…まさか？」

「ん？ どうしたの？ ヤマト」

「いや…この求人出してる領地の領主もしくは側近が俺と同じ世界の人かもしれない…」

(と言うかまず間違いなく関係者だろ…コレ)

ハルケギニアでの平民の扱いは低い。ココまで破格の採用条件は有得ない。

その上、中世ヨーロッパ程度の文化で有給休暇にボーナスって…

「へえーヤマトみたいに誰かに召還されたのかな？」

「それは分からないけど、会ってみたいね」

話して見れば確信できるだろうし…旨く行けば協力を得られるかも

しない。

建物へと入り詳しく情報を聞く。

募集している人物はフォルテ男爵ロアン・ラ・ド・フォルテで、トリスティン北西部に位置する自治領ダングルテルとの境に位置する30アルバンほどの土地である。5年ほど前に興され、フォルテ領と言っらしい。

希望人数も多く今行っても雇ってくれるかどうかは分からないと言われた。

希望することを伝えると驚いたことに履歴書らしき物を手渡せられた。

なんでも文字の読み書きが出来る人に書かせるようにと領主から預かったとの事だった。

(地球人かってーい！)

心の中でガッツポーズを決めて建物をでる。

宿を取り早速履歴書の記入に取り掛かる。項目を埋めていく。

- 1、 名前：ヤマト・クサナギ (from Japan)
- 2、 年齢：15歳
- 3、 性別：男
- 4、 魔法：風・ドット
- (これは適当)
- 5、 特技：料理・剣術・簡単な計算
- 6、 過去経験した職業：傭兵 (コボルド鬼討伐他)

不思議なことに出身地などの記載欄がない。気にしないと言っことなのだろう。

相手に気が付いてもらえるように、名前の横に英語で出身を書いてみた。

(向こうの世界と関係ない奴が見ても落書きにしか見えないはず)

~~~~~

o u t   s i d e

“ コンコン ”

「ロアン様、面接希望の方がお見えになってます」

執務室で書き物をしていると、メイドが声をかけてきた。

「ん〜今月雇う分の人数は終わってるはずだが？ お断りして」

屋敷付きの雇用は領内の経済成長と人口に合わせて月に1〜3人雇うようにしていた。一気に雇い入れるのではなく、毎月少人数を雇い入れた方が掲示板に常に掲載される為、口コミで大人数へと広まるのだ。

「存じておりますが、メイジの方ですのでお会いになられた方が良いかと思ひまして」

「おお！ メイジか！ 確かに足りてないからね」

様々な職種を雇い入れているが、メイジだけは人数が足りていない。メイジは何処でも引つ張りだこで、貴族であることが多く集まらないのだ。

メイドから履歴書を受け取りサツと目を通す。

「え？ 日本？」

驚いたことに名前の横に f r o m   J a p a n と英語で書かれてい

ただ。

（ヤマトクサナギ。日本人の名前だな、転生者ではなく迷い込んだ人間か？）

ロアンはこの地に生を受ける前の記憶を残している。俗に言う『転生者』と言うやつである。

前世の名前は宮永 ミヤナガ 啓治 ケイジ 日本人であった。

転生者意外にもこの世界に迷い込むと言う可能性はあるのだ。

前世の世界の物が此方の世界に多数存在する事を知っている為、人間がこの世界へ迷い込むことも十分に有得ると考えた。

（態々英語で記載している所を見ると…こっちの素性も気が付いてるか）

応接間へと向かい相手を待つ。

“コンコン”

「クサナギ様をお連れしました」

「どおぞ、通して」

「失礼します」

メイドに続いて真っ黒な少年が入ってくる。

（完璧に日本人だな）

真っ黒な髪の毛に黒目が目立つ。

整った顔にあどけなさが残る。

着ている服も日本のものだろう。

背中に差した2本の刀が目を引く。



「はじめまして、ロアン・ラ・ド・フォルテだ、君は“クサナギヤマト”君でよかったかな？」  
手を差し出し、相手の反応を待つ。

「はい、草薙 大和です。お会いできて光栄です」  
しっかりと握手を交わしお互いに椅子へ腰掛ける。

「単刀直入に聞く。日本から迷い込んだのか？」  
お互いに素性を確信している以上、腹の探りあいは無意味だ。

「ええ、ロアン様も日本からの転生者ですか？」  
全く動じることなく聞き返してくる。

「ああ、25年前に東京で事故に合つてね、28歳でこつちに転生した」

「そうですね、私は7ヶ月前に召還されました。召還した本人は亡くなつてしまいましたので、ルーンは付けられていません」

「そうか、召還されたのか。すまないが帰る方法は分かっていない」

「いえ、帰る方法を探して此方へ伺つたではありません」

「は？ 君は帰りたくないのか？」

「ええ、待つ人もいませんし…この世界に召還された時点で何かしら役目があるものと考えています」

「そうか…君は大人だな」

（訳もわからずに無理やり召還され、こうまで冷静にいられるもの

だろうか？)

「では仕事を探しに来たのかい？ それなら力になれると思うが」

「いえ、ある方を匿って頂きたいと思ひまして」

「続けてくれ」

「まず今から聞くことは、受け入れる、受け入れないに限らず絶対に口外しないでください」

「約束しよう」

「私を召還した人の名前は、オルレアン候シャルル様。匿って頂きたいのは、その娘シャルロット様とお母様です」

「っ！ そんな大物の名前が出てくるとは…流石に思わなかったよ。ただ、なぜ匿わなければならぬのかは分かった。

だが…匿ったとして私に何の徳がある？ リスクばかりしか思いつかないが？」

「おっしゃる通り見返りよりリスクの方が圧倒的です。

確定ではない見返りであれば、ジョゼフ王権を倒した後ということになると思ひます。

それとシャルロット様を一番に考えて宜しければ、2番目にロアン様のお役に立ちます」

「私の役に立てるような何かがあるのか？」

この少年を突き動かしている原動力はなんだ？

この世界でいつたい何を見た？何を感じた？

「戦闘に関する事であればお役に立てると思います。  
私は風術師です。この世界で言うところの先住魔法に近い力を持っています」

「風術師…先住魔法…要は風の精霊を操れると？」

「はい」

「…ひとつ聞きたい。たかが半年前にこの世界へ召還され、大した恩も見返りもない相手をなぜ助けようとする？自分の生活、命を投げ出してまで…」

「私が生まれたのは『草薙家』という風術師の家系でした。

両親は跡継ぎとしての私しか見ておらず、愛情を感じたことはありませんでした。

ただ、妹だけが私の家族で全てでした。

14の時です。

対立する相手により私以外の家族は皆死にました。

シャルロット様と被ったんです。

今のシャルロット様は少し前の私です。

そして、私の妹です。

助けを求め、心の中で泣き叫んでいました。

ただ、助けたいと思った。

自己満足なのも分かっています。

でも、支えになりたいと思っただんです」

「…分かった。ひとつ条件をつけても良いかな？」

一瞬の逡巡、無表情の中に悲しみと苦痛が見え隠れする。  
しかし、言葉を終えた時は優しさで決意が表情に現れる。

同郷だから、可愛そうだからという感情がないわけではない。  
だが、それ以上にこの少年は危ういと感じた。

「はい」

「私はまだ君を信頼できる仲間とは思えない。  
だから暫く私の元で働き、君を観察したい。」

その上で信頼できると判断できたなら匿うことを約束しよう」

「その条件でお願いします。」

シャルロット様がガリアを出るのはまだ先のことですので」

「ふむ。では仕事は任せる。此方からは与えないので最初は好きに  
動いてくれてかまわない」

もう少しこの少年を見て、感じて、自分の気持ちも整理することを  
決めた。

そう決めた時点で手助け前提で考えが傾いているのではあったが…

~~~~~

Y a m a t o s i d e

(優しそうな人だったな)

ロアンとの話を終え、嶺館の中に1室を与えられた。

「ねえ、あの人つてば信用出来るの？」

窓際に腰かけたセラが真面目な顔で問いかけてくる。

「大丈夫だと思つよ。会つて直ぐに転生者のこと認めてたし」
貴族であるという驕りは感じなかった。

ただ、真剣に話をしてくれたことに大和は信用出来ると感じたのだ。

「ん〜良く分からないけど、明日から何するの？」

「まあ〜俺に何ができるのか情報収集が先かな。明日1日は話を聞いて回るよ」

「…ねえ〜ヤマト。向こうの世界には“待つ人がいない”って言うてたけど、本当？」

「ああ、顔見知りと呼べる人間しか“残つて”いないからね」
幾分表情を陰らせセラが見つめてくる。

「…私は大和の味方で…その…えーっと」
しどろもどろなセラに笑顔を向ける。

「ありがとうセラ。俺もセラの味方だよ。向こうには居ない俺の大切な友達だ」

過去の話聞いて、同情という感情だけではなく大和のことを信頼し助けになりたいという気持ちが伝わる。

「…っ」

真つ赤な顔で、大和の肩へ移動するセラ。

心地よい重さを右肩に感じながら心の重しが少しずつ軽くなるのを感じた。

第1章 10話 転生者と面接（後書き）

オ리지主以外の異世界人。

オリジナルキャラって設定が面倒ですね><

原作介入までもう少し！早くダバサと漫才…

7 / 16 3点リーダー、誤字、顔文字修正

第1章 11話 貴族と義兄

12、貴族と義兄

フォルテ領

北にダングルテール自治領、東にゲルマニアの国境へと続く深い森
西に海、南に荒地を含む王領がある。

人口1700人。

主な産業は農業、林業、漁業。

集落は3つ、領主のいるフォルトス。

東の森に位置するフラン。

西の海岸沿いに位置するメイハマ。

其々上から人口1500、120、80である。

領主付きの家臣は総数80名、うち内務官が7名、軍人54名、それ以外は領館つきの使用人である。

大和がフォルテ領に来て3カ月。

山賊討伐、モンスター討伐の出陣は22回にも及ぶ。

「こんなに山賊がウロウロしてるもんなの？」

「いや、この土地が特殊なのさ。

すぐ隣にダングルテール自治領があるからな。

あそこは貧困に喘いでるから山賊に身を落とす奴が多いのさ」

軍部の隊長であるカルロスは火のメイジでライン。年齢45歳
無精ひげが凜々しい大男である。

領館に努めるメイド長のリリアと結婚しており、12歳になる息子が居る。

元は下級貴族の長男であったが、両親が他界し領地もなかったことから、貴族の位を棄て、傭兵として生活をしていた。5年前からフォルテ領を支えてきた1人である。

山賊討伐、コボルド鬼討伐に参加する大和はその実力、人柄から領館に務める者だけでなく、街の住人からも信頼されるようになっていた。

「これだけ出勤してるのに被害が少ないのはヤマトのお陰だな」
笑顔で大和の背中を強く叩く。
周囲の部下からもむず痒くなる賛辞を言われた。

「カルロス隊長、ヤマトさん。ロアン様がお呼びです」
メイド兼秘書のケートが声を掛けてくる。

カルロスと共にロアンの居る執務室へと向かう。

“コンコン”

「ロアン様、カルロス隊長とヤマト様をお連れしました」

「どつぞ」

ロアンは読んでいた手紙から目を離し、二人をソファアへ座るように促す。

向かい合うようにロアンが腰かけ話した。

「ダングルテール自治領で亜人が活発に動いていることは君たちも知っていると思うが、その件について王宮から討伐命令が来た。」

そこで、大和を隊長として25人で討伐に赴いてもらいたい。カルロス、大和を隊長として派遣するのについてどう思う?」

「はい、実力、部下からの信頼に置いて問題ないかと存じます」

「では大和、引き受けて貰えるか?」

「はい、引き受けるのは構いませんが自治領であるのに助けるといふことは王領にでもなるのですか?」

「察しが良いな。」

本来自治を謳って無理やり国から距離を置いたのに助けを求めた。これに応えた国は助けを求めて来た村について自治権を剥奪し、フォルテ領に組み込むことになったのだ。

まあー最初からこうなる事を予想してこの場所を国から買い取ったのだから、予想通りということだよ」

「自由の為に安全を棄て自治を選んだというのに、その条件を呑んでまで助けを求めたと言うことは、かなり状況が良くないということですか?」

「ああ、亜人の規模は50前後の群れが確認されているだけで4つ。現在3つの村から庇護の要請が来ている。多分今後はもつと増えるぞ」

(各村に駐屯させる兵も必要となると、実際に討伐に加われる人数は10人程度か…)

「各村で戦える者を徴用するのは構いませんか?」

「ああそれも頼もうと考えていた。
メイジ以外は新兵と同じ条件で使えそうな者は出来るだけ徴用して
ほしい。」

メイジに関しては条件保留で一度ココに来るようにしてほしい。改
めて条件を話し合おう」

後は小さな事柄を話し合い、1週間後に発つことが決められた。

~~~~~

「ライカさん！ 魔法をお願い！」

怪我を負った兵士を下がらせライカに治療を頼む。

ライカはフォルテに1人しかいない水のラインで、19歳の元貴族  
令嬢だった。

今回の遠征では副長として追従していた。

「前衛も下がって後衛の守備！弓放て！」

声を張り上げ、大和自身は前線へと1人切り込む。

長期戦を考え、術の使用は最低限に抑える。

2刀を素早く操り確実にコボルト鬼を始末していく。

最初35居たコボルト鬼は11まで数を減らし逃走へと移る。

（逃がすと他で被害がでる！）

逃走しようとする敵に風を纏った大和が追撃する。

時には風の刃で、時には刀で、圧倒的な暴力でコボルト鬼を蹂躪す  
る。

最後の1匹を葬り仲間の元へと帰還する。

「怪我人は？」

「治療は終わったわ。疲労は残っても傷一つ残してないわよ」  
微笑を湛えライカが応える。

「そっか、ありがとうライカさん」

「それより最後は1人で終わらせちゃったわね。お疲れ様」

「流石に疲れた。今日は何匹討伐しただろ？」

庇護を求めて来た村付近の平定という任を受けてから2カ月が過ぎた。

最初200〜300程度と考えられていた亜人もすでに討伐数が350を超えていた。

3つの村に兵士3人づつ駐屯させ、村で雇った傭兵にも各村で護衛の任を与えていた。

大和の指揮する16名を含め総数100を超える部隊となっていた。

「ヤマト〜私も褒めてよ〜。頑張ったんだから〜」

セラは風の精霊により飛んできた石、矢などから後衛の兵士を守っていた。

「セラも御苦労さま。被害が少なかったのはセラのお陰だよ」  
近付いてきたセラの頭を優しく撫でる。

「ふふ」

セラは眼を細め、顔を赤らめて小さく笑う。

「一旦村へ帰還する」

~~~~~

各村への被害はここ2週間報告されていない。

今日の戦闘も村から30リーグ離れた所にあったコボルド鬼の住処であり、

直接村への被害があつたものではなかつた。

“コンコン”

「ヤマト隊長、ロアン様からの遣いが来てます」

宿でロアンへの報告書を書いていると、ロアンからの手紙を兵士が届けられた。

手紙には今後の方針を話し合う為、一度帰還しろということが書かれていた。

翌日、馬だと1日かかる距離を空を飛ぶことで2時間でフォルトスへと帰ってきた。

屋敷へと入り、メイドにロアンの所在を確認する。

「執務室でお仕事中です」

「そうですか、暇になる時間とかわかりませんか？」

「いえ、ヤマトさんがお見えになったらすぐ通すように言われてますので大丈夫ですよ」

「分かりました。伺ってみます」

メイドにお礼を言ってロアンのいる部屋へと向かう。

“コンコン”

「ロアン様、大和です」

「入って」

「失礼します」

「早かったね〜到着するのは早くても明日だとばかり思ってたんだよ」

「ええ馬ではなく飛んできましたから」

「馬より早いつて凄いね…」

それより、今後のことについて話をしようと思っただけ」

「はい。今回要請のあった3つの村についてですが、現状の戦力で問題なく警護出来ると思います。周囲にあった亜人の住処もほぼ壊滅させました」

「うん。大和のお陰で予想より早く片付いて助かったよ。」

そこで、これまでの大和を見てて私自身が大和を信頼できると考えたんだ。

だから、最初に約束してたようにシャルロット様と御婦人を匿う件を引き受けよう。

それを伝えたくてね」

「ありがとうございます。これからもお力になれるよう頑張ります」

「うん、こちらこそよろしく。」

後ね、先走ったことかも知れないけどバツソ殿と連絡を取ってね、色々情報交換をしたんだよ。シャルロット様はまだ亡命しない様なんだけど、来年トリステイン魔法学院への留学が決まったらいいんだ。まあ厄介払いに近いらしいけど……」

「なるほど、留学中に殺害ですか」

陰謀、策略など生まれながらに目の前で見て来た大和はうんざりといった表情で話の続きを待つ。

ガリア王家にとって民衆の人気の高いオルレアン候の娘というのは邪魔ものでしかない。何とかして亡き者にしようと思っているようだが王家自らが殺害に関わったという証拠を残すと民衆からの不満が大きくなる。

そこで、危険な任務を与え間接的に殺害を試みているのだ。

しかし、今のところその試みは上手くいっていない。

今回、ガリア王家が考えた方法が他国への留学中に命を狙うというものだと察しがつく。

「そう言うこと。そこで協議した結果、大和にも来年トリステイン魔法学院へ入学してもらうことにしたんだ。シャルロット様第一で考えてる大和なら断らないと思っすでに動いてるよ」

「話は分かりますが、貴族でもない私が学院に入り込めるとは思えないのですが？」

「そこで、君を私の弟にしようと思っすね」

ロアンはいたずらっ子のような笑顔でとんでもないことを言い放つ

た。

「それはまたどうやって？」

突拍子のない話に敬語を忘れ『素』で返した大和を見てロアンは益々表情を崩す。

「父の妾の子がメイジだったから遣いつぶすつもりで家に入れたって事にする。

この時代、何処にでもこんな話が転がってるから怪しまれることはないはずだよ。

まあー亡くなつた父上には申し訳ないがね」

申し訳ないと言葉では言っていて表情では心底楽しんでいるように見えた。

「分かりました、その辺はお任せします。

ですが、私の精霊術ではコモンマジックを誤魔化せるかどうか不安ですね。

似たような現象は起こせますが、上位のメイジにはバレル可能性があります」

「それも解決できると思うよ。

この石は触れた状態でスペルを唱えるとフライの魔法が使えるんだ。これ以外のコモンマジック用の石も準備してる。

流石にサモン・サーヴァントとコントラクト・サーヴァントは、無理だけどね。

但し、魔力を持たない者が使った場合使用時間が15秒しか持たないんだ、魔力を石に込められたものしか使えないからね。

後1年でこの点を改良すれば大丈夫だと思う」

「そこまでお考えでしたか…それなら不安はありません。

私の方からお願いしなければならぬくらいです」

「ん、まあーこの程度で頼りになる弟を手に入れることができるなら安いものだ。」

それと、今後は堅苦しいしゃべり方はやめてね？義理とはいえ兄弟だし」

「え、あ、はい。之からもよろしくお願いします。義兄上」

この日より、ヤマト・クサナギ・ド・フォルテというのが名前となった。

第1章 11話 貴族と義兄（後書き）

やっと下地整理が終わった…

長かった><

次回から学院編です！

まだ原作介入はできないけどね…

7 / 16 3点リーダー、誤字、顔文字修正

第2章 1話 再会と心の傷（前書き）

ピンクの少女は何者よ？

カテルキガシマセンガ…

第2章 1話 再会と心の傷

13、再会と心の傷

“ガタツゴゴツガツ”

「痔になるぞ！ 街道整備するか、サスペンション効かせないと長距離の馬車移動は地獄だな」

「さすぺんしょん？ なにそれ？」

「ああ、バネをつて、バネがわからないよな…
難しいな…要は揺れを抑える装置だよ」

学院へ向かう道中、大和の肩で寛ぐセラは良いが畦道のような街道でサスペンションのような気の利いたもの物もない馬車では大和もダウンしていた。

「あ！ 馬車の中で浮かんでたらいいんじゃないか？」

空気を纏った大和は馬車の中で在りながらフワフワと宙に浮いてみた。

「痔の心配はないけど…精霊の無駄使いのようで気が引けるな」
暫く宙に浮いていた大和だが力の無駄使いにアホらしくなってしまい椅子に座りなおした。

「ヤマト様、学院が見えてきました。後10分程で到着できます」

「わかった、ありがとう」

「ねね、入学式って明日だっけ？ 今日は何をするの？」
御者からの声で降りる準備をしているとセラが話しかけてくる。

「部屋に荷物を運びこんで、後は特別な予定はないよ。」

.....

「やっと着いたか。ココがトリステイン魔法学院ね」
馬車を降り風で探索を行う。

（流石に力のあるメイジが数名いるな。ん？なんだこれは！）

直ぐ近くに桁違いの魔力を感じ、そちらを凝視する。

「え？」

「なに、どうしたの？」

気の抜けた声を上げる大和をセラは不審げに見つめる。

「いや、なんでもない」

学院内に感じる魔力とは桁違いに濃い魔力を発していたのはピンク色の髪の美少女だったのだ。

（訳がわからないが、要注意人物その1つと。）

お？ あの禿げてる人は教師かな？結構強いな。

ん？ 今度はこっちの方が……ってこの感じはシャルロット？
でも前より強くなってるな。）

蒼いショートに140センチほどの身長。

少し釣り上った蒼い瞳に赤い縁取りのメガネ。

(見た目は全く変わってないな…ってか、成長してない?)

「えーっとタバサ？」

バスソからの手紙に『タバサ』と呼ぶように書かれていた事を思い出す。

「…だれ？」

「……」

「……」

(本気で覚えてないな…ちょっと泣きそう)

『泣きそう』ではなく薄っすらと涙を湛えた瞳で真っ直ぐに見返す。

「大和です。お忘れですか？ シャルロット様」

最後の一言は小声で話す。

「そう」

「…」

(前会った時より心を閉ざしてる。重傷だな)

「これから3年間よろしくお願いします。ミス・タバサ」

「ん」

興味無さそうに宛がわれた女子寮へと入っていく。

(結局会話は成立せず。話してくれた言葉は5文字。
ココは抱き合って感動の再会じゃないの？
まあ、それほどの『傷』ってことだろうな)

自分の荷物を運び込み、ある程度整理しているとセラが話しかけてくる。

「ねえ。シャルロットってなんであんなに暗いのかな？」

「俺にも経験があるけど、余裕がないんだよ。

必ず成し遂げなければならぬと思いついたことを達成する為に不要なことは全て棄てる。

そうしないと叶えられないと思いついた。

シャルロットの場合、父親の仇討と母親の病気を治すという目標を掲げてる。

この二つは今のところ相反することだから余計に空回りしてるんだと思う」

「なんで相反することなの？」

父親の仇討をすると、母親の病気を治す手掛かりが無くなっちゃうんだよ。

だから順番として母親の病気が治らなきゃ仇討は出来ない」

世間一般の常識人を謳う者は『仇討なんて意味がない』と言う。

だが、『仇討』を決めた者は頭ではなく心が止まらないのだ。

大和自身が『仇討』の経験者であるからその事は理解できる。

しかし、今のシャルロットを見て『仇討』を諦めさせたいと思った。

この2年間殆ど笑うことがなかったのではないかと思う。

だから、これから沢山笑ってほしい。笑顔を見せてほしい。

切実にそう願った。

その日の晩。

「早速お見えですか」

学院内に昼間は感じることもなかった反応を捉える。気配を殺し女子寮へと向かっていることが分かった。

更に搜索範囲を広げると森の中に二人の反応を感じることが出来た。

「何が来たの？」

「刺客と思われる反応が3つ。

うち一つが女子寮に向かつてる。

後の二つは森の中で待ち伏せかな？」

窓から飛び出し、女子寮に近づく刺客に風を放つ。

風が相手を切り裂く前に大きく飛びさった。

「こんな時間に何の用でしょうか？」

大和に見つかったことで、気配を消すことを止め殺気を放ってくる。

「お答えできませんか？」

返事の変わりにナイフが飛ぶが大和に届く前に風で弾き飛ばす。

不利を悟った刺客は仲間の下へと逃げ込むように飛びさった。

「ヤマトくなんで逃がしたの？」

「逃がしたわけじゃないよ。
ココで争ったら面倒くさいことになるからね。
他の二人と一緒に外で始末つけたほうが楽だから。
それと、セラは一応シャルロットに付いてて」

刺客の後を追って森へ向かう。
気配も姿も消さず近づく。

火の玉2つと風の塊が襲ってくるが、一気に加速して刺客の背後へと回りこむ。

「遊んではあげない。
諦めるまで何度でも消してあげるよ」

集めた風を一気に開放し、新たに放たれた魔法を消し去る。
圧倒的な風の精霊により勢いは衰えることなく刺客を襲った。
全身から血を噴出しながら3人の刺客は絶命する。

「やあ。散歩かな？」

「…」

背後からシャルロットが近づいてくる。

戦闘が始まった頃から此方を伺っているのは確認していた。

「不審者が多いみたいだから、気をつけないと」

「…なぜ？」

「なぜって？」

「私を狙ってきた刺客をなぜ？」

「うん。我が儘かな」

「？」

「シャルロットを狙ってきた刺客を倒したかったから倒した。これって我が儘だからってことでいいんじゃないかな？」

「そう…でも余計なことはしないで」

「だから、我が儘なんだって。」

『するな』と言われても止める気はないから我が儘」

「…」

「一つ質問。」

なぜ一人で背負い込む？」

「…一人でできるから」

「一人より二人。」

仲間が居れば目的を達成する可能性が上がると思っけど？」

「足手まとい」

「…違うだろ？」

他の人を巻き込みたくないだけだろ。

自分が行おうとしてることが危険だから」

「…私の何が分かるの？」

「同じだから」

「？」

「俺も家族を殺されて復讐したんだ。

誰も信用せず、一人で生きてきた。

前の世界では生きる意味をなくしていたんだ。

でもシャルルに呼ばれ、シャルロットやセラと出会って、

俺にも出来ることがあるんだと感じた。

だから、シャルロットを手伝わせて欲しい。

一人で何でも背負い込むな。

俺だけは何があってもシャルロットの味方だ。

俺を頼って欲しい」

「…っ」

徐々に表情を崩し、ついに泣き出したシャルロットは大和の胸に縋り付き声を上げて泣き出した。

「一人はきついよ。

何より寂しいよ。

よく今までがんばったね」

「うあああああああ！！」

何時までも泣き止むことのないシャルロットと頭を撫でる大和を静

かに双月が照らしていた。

第2章 1話 再会と心の傷（後書き）

シャルロットの傷を表面に現すのって難しい><

文章力の無さを痛感しております。

第2章開幕です！

7 / 16 3点リーダー、誤字、顔文字修正

第2章 2話 舞踏会とPTT（前書き）

一人より二人。

二人より三人。

仲間って多い方が楽しいよね。

シャルロットにもわかって欲しいのですよ…

第2章 2話 舞踏会とPT

14、舞踏会とPT パーティ

入学式当日

式も終わり緊張から解放された生徒達はそれぞれ午後の時間を過ごしていた。

大和はセラと一緒に広場の陰で休んでいた。

シャルロットが近寄り、無言で横に座るとそのまま読書を始める。

「…」

「タバサ？ 挨拶くらいないの？」

「こんにちは」

セラが声をかけるとシャルロットは顔を向けて挨拶をする。しかし、すぐに本に目を落とし読書を再開する。

「こんにちはタバサ。良い天気だね」

「うん」

「何の本を読んでいるの？」

「これ」

読んでいた本を大和に見せる。

表紙には『イーヴアルディの勇者』と書かれていた。

「今度俺にも貸してくれるかな？」

「いい」

そう言っただけで読んでいた本を渡してくる。

「いや今度でいいよ」

「いい、何度も読んで」

「そっか、じゃあ遠慮無く借りるね。ありがとう」

御礼を言っただけで本を受け取る。

なぜかシャルロットは顔を赤らめて俯いた。

違う本を取り出したシャルロットと一緒に読書始める。

セラはいつの間にか大和の肩で眠っていた。

.....

ウルは月ティワズの週ダエグ曜日。

昼食も終わり、何時ものように木陰でシャルロットと読書をして
いた。

「……ん？」

一匹の鼻が直ぐ近くに舞い降りた。

シャルロットが近寄り足に巻かれていた手紙を取り目を通す。

「命令書？」

「そう、今から行ってくる」

「俺もついて行って良いかな？」

「私もいく」

「でも…」

「この前も言っただけど、力になりたいんだ」

「…わかった」

オールド・オスマンに話を通し3人でガリアとの国境へ向かう。

シャルロットと大和の事情を学院長であるオールド・オスマンには話しており、直ぐに許可が下りた。

「馬を準備しなくても本当によかったの？」

「ああ、明日の舞踏会までには帰って来たいしね。」

シャルロット1人なら俺が抱えて飛べば何とかなるから」

「…っ」

シャルロットは顔を赤くし俯いてしまった。

学院から十分に距離を取ってから、シャルロットを抱え上げる。お姫様抱っこをされたシャルロットは先ほど以上に顔を赤くし、大

和の顔を見ないように視線を外す。

「ごめん、嫌だったかな。背負うほうが良いかな？」

「いい」

視線を合わさないまま答えるシャルロットに笑顔を向け風を纏って飛び上がる。

「んー」

「ん？ 怖い？ 少し速度落とそうか？」

「いい」

「そう？ じゃーもう少し飛ばそっか」

「うん」

真っ直ぐ視線を向ける大和の横顔をシャルロットは微笑を浮かべ盗み視ていた。

.....

「なんだって？」

「オーク鬼の討伐」

城から出てきたシャルロットは淡々と命令内容を語った。
リュティスとトリスタニアのちょうど中間あたりに位置する森でオ

「ク鬼の被害が出ていると言う事だった。数は20匹程で殲滅が今回の任務だった。」

「取り敢えず宿を取って、明日の朝一番で向かうってことでいいかな？」

「いい」

「やったー！ ごはん、ごっはん」

翌日の早朝、深い森の前に来ていた。

そんなに大きな森ではないが、豊富な山菜と狩りに適した小型の野生動物を目的に人が入っていくことが多い森だった。

「ああー報告より多いな。」

「35匹かな？ 1匹桁違いに魔力の強いのが居るのは気のせいかな？」

「群れのリーダーかも、ツール・ロード」

「ふむ。まあーどうにでもなるかな」

群れを指認出来る場所へ移動し作戦を練る。

「私にやらせて」

「シャルロットならやれるだろうけど、俺は手伝いたいんだけど」

「私は今より強くなりたい。だから……」

「じゃあさ、連携の練習をしよつか。
シャルロットが後衛で足止めと錯乱。
俺が前衛ってことでどう？」

今後シャルロットの横に居続けるつもりだからさ、
二人で強くならなきゃね。

個人戦で強くなりたいなら俺が稽古つけるから」

「ん、わかった」

「私は？」

「ごめんごめん、3人で強くなろう。」

セラはシャルロットの守りをよろしく」

「うん！ シャルロットには怪我一つさせない」

「じゃあーいつちょやりますか」

シャルロットのアイスニードルでトール鬼を足止めし、大和が刀で
止めを刺す。

多方向からトール鬼が襲ってくると、エアハンマーで数匹まとめ
て吹き飛ばす。

風の衝撃波を逃れたものは大和の刀により切り裂かれる。
30分ほどの戦闘で残り5匹まで数を減らしていた。

「セラ！」

少し離れた場所から巨大な精霊の反応が上がると、生きていたトール鬼全てを飲み込みながらシャルロットとセラに向かって土が競りあがる。

セラが精霊の加護でバリアを張るが敵の攻撃が終わった頃にはバリアも消え去り、土礫により二人とも吹き飛ばされた。

「シャルロット！ セラ！」

「大丈夫、かすり傷」

「ああー服が汚れちゃったじゃない！」

それぞれの反応に安堵し、精霊が膨れ上がった場所に注意を向ける。

そこには他よりも一回り大きなトール鬼が立っていた。

「トール・ロードか。先住魔法を使うのか？」

頭が良さそうには見えないが」

大和の声が聞こえたのか怒りの形相で新たに精霊を集めるトール・ロード。

「あまいよ、召還速度では俺のほうが早い」

トール・ロードが攻撃するよりも早く大和の風が襲う。

“ピシッ！”

「え？」

大和の放った風はトール・ロードの手前で見えない壁に遮られる。呆けた声を出した大和に土の槍が数十個襲い掛かる。

「ッ！」

土の槍の大半は風をぶつけて砕くが、3つほどの槍は砕けることなく大和に襲い掛かった。

精霊の召還に間に合わず、迎撃するだけの数が集まらなかったのだ。

3つの槍のうち2つまでは避けることの出来る軌道だったが、残る1つは2つを避ける事で逃げ場を失い確実に当たると覚悟した。

目の前にまで迫った槍が突風により軌道がずれ大和にかすり傷を負わせる。

シャルロットがエア―ハンマーで軌道を変えたのだった。

「サンキュ〜シャルロット」

「…ん」

「しかし…なんだ？ あのバリアは？」

精霊魔法であることは間違いないが、風と土の反応があるのだ。

大和の常識では2つの精霊を同時に使役し、尚且つ融合させる術式は存在しない。

（先住魔法つてのは、精霊術とは微妙に違うようだな。）

「シャルロット！ 俺があいつのバリアに穴を開ける！」

その穴に魔法を打ち込んで！」

髪を逆立てた大和の周囲に見えないはずの空気が青く輝く。

同じように精霊を纏ったツール・ロードに向けて風の刃を無数に解き放つ。

全方位から風の刃がトール・ロードを襲った。
無数の風の刃は竜巻となって荒れ狂う。

風の刃一つ一つがトール・ロードの纏った精霊を削り取る。
徐々に薄くなる精霊にダメ押しとばかりに風を一塊打ち込む。

すると、トール・ロード正面の守りが砕けちり、
直径30センチ程の穴が開く。

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ウインデ」
流麗な詠唱がシャルロットの口から発せられ、
氷の槍が真っ直ぐにトール・ロードの胸に穴を穿つ。

「ギヤアアアアアア！」
断末魔と血飛沫を上げながらトール・ロードは絶命する。

.....

「3人での初仕事が無事に終わってよかった…お疲れ！シャルロッ
ト、セラ」

任務完了の報告を終え、シャルロットを抱えて学院へと飛ぶ。

「お疲れ様」

「おつかれ」

「一人で任務をこなすより、仲間とこなす任務のほうが良いでしょ？
なにより、一緒に喜び合えるから」

「…ありがとう」

「ん？なにが？」

「ヤマト一人で終わらせれたのに、私に合わせて戦ってくれた。

私の経験の為に…」

「そんなこと無いよ。

先住魔法があんなに桁違いな代物だとは思ってなかったからね、シャルロットとセラが居なかったら正直やばかったよ」

「それでもヤマトなら如何にかしたとおもっ」

「ん〜買いかぶりだと思うよ。

3人だったから勝てたんだよ」

「でも、ありがとう」

はにかむように笑ったシャルロットを見た大和の顔は、何故か赤く目も泳いでいた。

.....

フリッグの舞踏会の主役は召喚の儀式を終えた2年生である。

新入生歓迎という触れ込みがあるのは形だけのような雰囲気であった。

しかし、その中でルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールと

キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーは

有力貴族の令嬢であり、何より飛びぬけた美少女であった為

1年生の中で周囲の目を引いていた。

そんな中、周囲には目もくれず食事に勤しむ2人（3人？）がいた。

大和とシャルロット&セラである。

「タバサこれも美味しいよ」

「ん」

（つてか、その体のどこにそれだけの量が入るのだろう…）
人並み以上に食べる大和ではあったが、同じかそれ以上に食べるシャルロットだった。

食事に満足した3人はベランダへ移動し風に当たる。

「タバサは踊らないの？」

「…いい」

「んじゃ、俺と…」

私と踊っていただけませんか？お嬢様」

「…………はい」

数秒の間を置き、顔を真っ赤にしたシャルロットは小さな声でしかしはつきりと返事をした。

たどたどしいステップで周囲から失笑が起こる。

しかし、まったく周囲を気にすることなく顔を赤くした二人は踊り続ける。

「なんか、見てるこっちが恥ずかしくなるわ」
一人取り残されたセラはそんなことを呟いた。

第2章 2話 舞踏会とP.T（後書き）

書いててむず痒くなる回です>><

でも楽しく書けました

助言して頂きました句読点などの改変作業がんばります！

7 / 16 3点リーダー、誤字、顔文字修正

第2章 3話 決闘と親友（前書き）

女の嫉妬って怖いよね？

今回改めて思い知らされたよ。

第2章 3話 決闘と親友

15、決闘と親友

踊り疲れた大和とシャルロットは会場の隅でワインを飲んでいた。

「私とも踊ってよ〜」

いきなりセラが大和に飛びつき会場の中央に引つ張る。

「踊るって言ったって…」

手のひらサイズのセラとどう踊ればよいのか分からず立ち止まってしまつ。

「こんなの二人でくるくる回ればいいのよ」
言つて大和の周りをふわふわと回りだす。

「そつか、楽しんだもの勝ちだな」

笑顔で大和の周りを漂うセラに手を伸ばし、一緒になって踊つた。

そろそろ「休もうか」とセラに声をかけたとき、会場内に突風が巻き起こる。

「魔法？」

意識せずシャルロットの姿を探すと先ほどと同じ場所でワインを飲んで見つけた。

(刺客じゃないか。じゃ〜悪戯かもしくは狙いが他に?)

会場を観察すると、一人の少女が服を切り裂かれしゃがみ込んでい

た。

先ほどの突風によりドレスを切り裂かれたのだろう。

怪我を負っていないようなので、悪戯だと判断する。

(悪戯にしては酷いな、大勢の前で女性の服を切り裂くなんて)

陰湿な悪戯を目の当たりにして、大和は不快な感情に顔を顰める。

突然のことでもまだ誰も少女を助けに行けないでいる。

「大丈夫か？」

着ていたコートを脱ぎ少女に掛ける。

「ありがとう。ミスター

私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツ

エルプストー。

キュルケでいいわ」

「俺はヤマト・クサナギ・ド・フォルテ。

ヤマトと呼んでくれ」

やたらと長い名前で自己紹介され一瞬困ったが顔には出さず自己紹介を返す。

「ところで、キュルケ。

この低俗な悪戯の犯人に心当たりはあるかい？」

「あるって言えばあるのかな…」

振った男か私に男をとられた女か…

多すぎていまいち絞り込めないわ」

言いくそうに話し出した割には言い終わったときには妖艶な微笑を湛えていた。

コートは今度会ったときに返せば良いと伝え、シャルロットの場所まで戻った。

「…」

シャルロットとセラの無言に迎えられ、居心地の悪さを感じる。

「どうしたの二人とも？」

居た堪れなさに話しかけるが、冷たい目で見られた。

「ヤマトが優しいのは知ってたけどさ、誰にでも優しいのは…何か良くわかんないけど腹が立つ」

「…」

理不尽な言われようにシャルロットに視線を向けるが同意と取れる無言。

（俺が悪いのか？取りあえず風を放った犯人を怨んどくか…）

舞踏会も終わり3日後の夕方。

シャルロットから決闘の立会人になってほしいと頼まれた。

「なんでまた決闘なんかすることになったの？」

「…向こうから言ってきた」

「いや、だからその理由は？」

「私がドレスを破いたからって」

「ん？シャルロットはそんなことしないだろ？」

「ん…」

大和が否定するとほんのり顔を赤く染めたシャルロットが肯定する。

「否定すれば…って、勢いに押されて面倒くさくなってそのままなし崩し？」

何となくその情景が思い浮かび溜息をつく。

「俺が言っただろうか？」

「いい、納得しないだろうし…折角だから」
何が折角なのか良く分からなかったがシャルロットの真剣な表情を見ると何も言えなくなってしまった。

.....

「私から仕掛けた決闘だから立会人は誰でもいいって言ったけど、普通は大して仲良くない人に頼まない？」

「…ん」

「俺では不満か？」

心配しなくても決闘自体にはどちらにも肩入れしないよ」

何故か赤くなってるシャルロットを見て照れるポイントがいまいち解らないと思う大和だった。

「では、怪我だけはしないように！ はじめ！」

「……」

「……ヤマト？ 決闘なのに怪我するなってどうかと思っわよ？」

「殺し合いの決闘なのか？ それなら全力で止めるが」

「いやそうじゃないけど」

「じゃあー怪我しないように、はじめ！」

「……」

「……もう良いわ」

半ば呆れて戦闘態勢に入る二人。

先手を取ったのはキュルケ、60サントの火球をシャルロットへ向けて打ち出す。

シャルロットはエアーハンマーで火球の軌道を外し、アイスニードルを放つ。

辛うじて避けたキュルケは次の詠唱を始めるが、既にシャルロットから追撃が迫っていた。

キュルケの目の前まで迫った氷の塊を当たる寸前で大和の風が受け止める。

（流石トライアングルと言うところか。魔法のランクは双方同じ程度だが、使い分けと詠唱速度、手の抜き方でシャルロットが数段上だな。近接も混ぜて攻撃すれば大人と子供ほど実力差がある。まあ実戦経験の差がそのまま出た結果だが）

「キュルケ、負けを認めても良いんじゃないか？」

「そうね…私の負け」

「ところで、舞踏会の時の犯人がなぜタバサなんだ？」

「実力を隠してた風のトライアングルってのが一点

あの場に杖を持ってきていたってのがもう一点

私の社交性に嫉妬した無口で根暗な人間がタバサって訳」

「おいおい、タバサは口数が少ないだけで無口って程じゃないぞ？

それに杖なら他にも持ってたやつが居たし。

何よりあんな陰険なことをタバサは絶対にしない」

「…ン」頬を染めるタバサ。

口数が少なく、他者との接触を必要以上に持たないシャルロットは周囲から見ればかなり浮いた存在なのは間違いないだろう。だが、たったそれだけで疑われるようなことはあり得ない。

（誰かが裏で糸を引いてる？）

「誰かにタバサが怪しいみたいなこと言われなかった？」

「…ヤマトってばタバサと付き合ってるの？」

「なんでそうなる。そういう関係ではないぞ」

なぜかむくれるシャルロット。

大和とシャルロットの顔を見比べてニヤケ顔のキュルケ。

「ただ、大切な人つてとこかな」

「…ッ」

赤くなったりむくれたりと忙しいシャルロット…

「で、どうなんだ？ 何か言ってきた奴はいなかったの？」

「んああ、ロレーヌが『タバサは実力を隠してるし、風のメイジだから怪しい』って言ってた」

「確定かな」

一瞬のうちに30メートルほど離れた木陰へ移動した大和は隠れていた4人に剣を向ける。

「どういふことか説明してもらおうか？ ミスタ・ロレーヌ」

「ヒィ」

すっかり委縮したロレーヌは涙目で真相を語った。

キュルケに彼氏を奪われた女子生徒達が、彼女へ復讐するために舞踏会での悪戯を思いつき、風のメイジの手伝いとしてロレーヌを誘った。

此処までが女生徒の計画であり、シャルロットと決闘で破れ彼女に

恨みを抱いていたロレーヌがシャルロットに犯人を擦り付け、キュルケとの同士討ちを狙ったとのことだった。

ちなみに、ロレーヌとシャルロットが2週間ほど前に決闘を行っていた。

理由は「俺より目立つ風のメイジが気に入らない」というロレーヌのプライドが原因だった。

もちろんシャルロットの圧勝で決着がついた。

「女の子達の言い分は解ったが、ロレーヌの言い分は単なる逆恨みじゃないか」

「ちよっと！ 私のドレスが破られたのは逆恨みじゃないっていの？」

「いや逆恨みには違いないが、彼氏を取られた彼女達に少し同情したからさ、

ただ、誰がしたのかわからないように仕返しをするってのは気分悪いけどね。

面と向かって宣戦布告ってのがカッコイイと思ってるからさ」

大和に責められた女生徒達は項垂れてキュルケに謝った。

キュルケも気がそれたのかすんなりと許したのだった。

「で、ミスタ・ロレーヌ？

逆恨みの上キュルケのドレスを破り、下手をすれば二人とも大怪我するところだったんだが、納得のいく言い分はあるかな？

ないよね？じゃあーキュルケ、後は任せた」

「迷惑を被ったのは貴方とタバサも一緒でしょ？」

「キュルケが『半端な御仕置き』をすることは思えないから俺達まで関わるとロレーヌが死んじゃうかもよ?」

「そうね、じゃあーお言葉に甘えて貴方達の方まで…
そうそう、タバサ御免なさい。」

勝手な言いがかりで巻き込んでしまって、どんな罰でも甘んじて受けるから」

「…いい。ヤマトが言いたいこと言ってくれた」

「そう、ありがとうタバサ」

(雨降って地固まるってのはこう言うことなのかな?
俺以外に話相手が出来ればもっとシャルロットも笑ってくれるかな?)

そしてロレーヌはボロボロの状態で学院の屋根から吊るされたのだ
った。(一晩も…)

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

Outside

夕方、授業も終わり寮へと戻る途中でキュルケに声を掛けられた。

「あなた、風のトライアングルなんだってね。」

私に何の恨みがあるのかは知らないけど恥をかかされて黙ってるほどシユルプストーの名前は安くないの。1時間後にヴェストリの広場で決闘よ！立会人の選定は貴方に譲ってあげる」

「ちがう、私じゃない」

「何が違うの？実力を隠してたくせに。」

それに友達もいない貴方が人目を引く私を羨んだとかそういう理由じゃないの？」

「…わかった」

「そう、じゃあ1時間後に。逃げないですよ？ フフツ」

自分じゃないと伝えたかった。

でも一方的に突きつけられた悪意に神経を逆なでされた。

さらに、キュルケを見ていると先日の舞踏会で大和が自分のコートを脱ぎキュルケに掛けてあげるシーンが思い出されて何故だか無性に腹が立った。

シャルロットは自分の中に渦巻く気持ちは何なのか分からず苛立っていたのだ。

.....

「私が吹っ掛けた決闘だから立会人は誰でもいいって言ったけど、普通は大して仲良くない人に頼まない？」

「…ん」

キュルケの物言いに『大和と仲が良い』というニュアンスがある事に気が付き顔が熱くなった。

「では、怪我だけはしないように！ はじめ！」

「……」

「……やまと？ 決闘なのに怪我するなってどうかと思っわよ？」

「殺し合いの決闘なのか？ それなら全力で止めるが」

「いや、そうじゃないけど」

「じゃあー怪我しないように、はじめ！」

「……」

「……もう良いわ」

大和らしいと思った。

多分どちらかが危険になると怪我をしないように止めてしまうだろう。

全力で行っても大丈夫だと確信する。

キュルケは火のトライアングルというだけあって、大した火力だった。

ただ、シャルロットからすると穴だらけだった。

攻撃は避けられない事を前提に、

もしくは避けられた後の行動を念頭に入れて行つべきである。

しかし、キュルケの攻撃には次がないのだ。

自分の攻撃が『当たるはず』という驕り。

命を賭けた戦いで一番してはならない事である。

僅か3回の詠唱で決着がついた。

最後の止めは思った通りに大和に止められた。

「キュルケ、負けを認めても良いんじゃないか？」

「そうね…私の負け」

「ところで、舞踏会の時の犯人がなぜタバサなんだ？」

「実力を隠してた風のトライアングルってのが一点

あの場に杖を持ってきていたってのがもう一点

私の社交性に嫉妬した無口で根暗な人間がタバサって訳」

「おいおい、タバサは口数が少ないだけで無口って程じゃないぞ？

それに杖なら他にも持ってたやつが居たし。

何よりあんな陰険なことをタバサは絶対にしない」

「…ん」

大和が自分を信頼してくれていることに嬉しくなった。

「誰かにタバサが怪しいみたいなこと言われなかった？」

「…ヤマトってばタバサと付き合ってるの？」

「なんでそうなる。そういう関係ではないぞ」

キュルケの言葉に一瞬の停滞もなく否定の言葉を言い放った大和を見つめ、訳も分からず悲しくなった。

自分も大和のことを仲間としか見ていない。

信頼出来ると言ってくれただけで十分なはずなのに、

大和の「ただ、大切な人つてとこかな」という言葉で

「…ッ」思いつきり照れた。

.....

疑いも晴れ、キュルケに御仕置きを任せるということで話がまとまった。

「そうね、じゃあーお言葉に甘えて貴方達の方まで・・・

そうそう、タバサ御免なさい。

勝手な言いがかりで巻き込んでしまっって、どんな罰でも甘んじて受けるから」

「…いい。ヤマトが言いたいこと言ってくれた」

「そう、ありがとうタバサ」

悪い事したら謝る。

プライドの高い貴族にはそんな当たり前のことが出来ない輩が多い。



しかし、キュルケという少女は潔く謝ったのだ。

謝られることに慣れていないシャルロットはどう返してよいのか解らなかった。

ただ、キュルケは見かけと違って素直な、優しい少女なのだと感じた。

.....

翌日の朝、食堂で大和の隣で朝食を摂っていると、

「おはようタバサ、ヤマト」

キュルケが挨拶をしてタバサの隣に腰かけた。

「（タバサとヤマトのこと応援してあげる、貴方達結構お似合いよ）」

小声で囁かれた言葉でいつも以上に顔を赤くして俯くシャルロットだった。

## 第2章 3話 決闘と親友（後書き）

原作にある「お話」を第3者視点で書くのって意外と難しいのですね><

タバサの感情をどうやって表わせれば良いのか考えながら書いてますが、感情を出しすぎるとタバサっぽく無くなって、抑えすぎると話がまとまらなくなっちゃうのですよ・・・

試行錯誤で頑張りますので、温かい目で見てください。

お気に入り2000超え！こんな駄文にお付き合い下さりありがとうございます

7 / 16 3点リーダー、誤字、顔文字修正

第2章 4話 ゼロと特訓（前書き）

最近俺への扱いが酷いように感じる。

天然？鈍感？なぜに><

## 第2章 4話 ゼロと特訓

### 16 ゼロと特訓

夏休み突入まで半月後と迫ったある日。  
その前にあるテストに向けて皆大忙しであった。

そんな中大とシャルロットは我関せずな日常を過ごしていた。

「みんなテストに向けて大変だな」

「ヤマトは勉強しなくてもいいの？」

「学院へ通うようになった理由が皆とは違うからね。

皆のように社会勉強という名の見栄の張り合いをしに来たわけじゃない。

良い点を取る必要がないから」

「ふーん、タバサは勉強しなくていいの？」

「いい」

「…また一言で終わっちゃったよ」

「返答があるだけましでしょ。」

興味がなかったり、嫌な相手だと話もしないんだから」

何時ものように3人で広場の木陰で過ごしていた。

「あなた達はなんでそんなに余裕なの？」

寄って来たキュルケの言葉に先ほどのやり取りを思い出し3人で吹き出してしまった。

「なんで笑うの？ 可笑しなこと言った？」

不貞腐れたキュルケに何でもないと告げる。

「いや、さつきも同じようなことを話してたからね、それと残念な点数じゃなければ文句言われないんだよ俺たちは」

「そう、楽でいいわね」

この間の決闘騒ぎ以降、この4人で過ごすことが多くなっていた。勘違いが原因だっただけに、それさえ晴ればキュルケは基本良い奴だった。

今では気の許せる友人であり、それはシャルロットにとっても同じだ。

「ミスタ・フォルテ！ 決闘を申し込む！」

いきなり現れたローレー又とその他2名は大和に決闘を申し込んだ。

「いきなり何事？ 君に恨まれるような事は…」

この前の決闘騒ぎの逆恨み？」

「逆恨みなどではない！」

男爵家の二男坊ごときに後れを取ったとあればロレーヌ家の恥だ」

フォルテ家は新興の男爵家でありトリステインの中では軽視されていた。

さらに、腹違いの弟となれば馬鹿にする生徒が多くいたのだ。

「俺が軽くみられる分にはどうでも良いんだが、フォルテの家は貶してほしくないな」

周囲にどう思われようが大和自身のことであれば気にはしない。

しかし、多大な恩があるフォルテ家を貶される事は我慢できなかった。

「名前の格が低いと友人の一人も集まってこないだろ。

君の周りにいるのはゲルマニアの貴族と家名も名乗らないチビ、後は小さな使い魔の虫だけ、

周りからもそういう風に見られてるから他の貴族は寄ってこないのさ」

「…3対1でいいぞ。

お前らまとめて痛い思いしてもらおうから」

殺気に近い怒気を発しながら大和がシャルロットとキュルケ、セラに離れるように伝える。

「3対1で勝負になると思ってるのかい？」

「相手にすらならないだろうが、自分の発言を悔いるんだな」

「馬鹿にしゃがって！」

シャルロット達が十分に離れ、大和が「いつでもいいぞ」と声をかけるとロレーヌ達3人が詠唱を開始した。

空気エア・ハンマーの塊、20サントの炎球ファイアー・ボールそれと突風ウィンドが同じタイミングで大和を襲う。

風の壁を作り上げ、全ての魔法を押し止め相手を鋭く見つめる。

「これで終わりかな？」

「貴様！ 本当にラインなのか？」

「風にしか適応がなくなつてね、魔力はあるがライン止まりなんだよ。嘘も方便、理には叶つてると思いたい。」

「エア・シールド程度で3人の魔法を受け止めるなんて……」

「君達が弱いだけだろ？」

俺の大切な人たちを蔑んだ事を後悔させてあげるよ」

「デル・ウインデ」

必要のない詠唱を唱え風の刃を2つ飛ばす。

ロレーヌ以外の生徒の杖を真ん中から切断し、大和自身は刀を1本抜いてロレーヌの正面へ移動する。

「これで終わりだな」

剣を一閃しロレーヌの杖を切り落とす。

「決闘は終わりだが、罰は与えないとな」

刀を持っていない方の拳をロレーヌの鳩尾へと叩きつける。

3メートルほど吹き飛んだロレーヌは気を失っていた。

「数日は痛むだろうが、懺悔する時間と思えば軽いだろう」

ロレーヌを抱え二人の生徒が逃げるように去って行った。

「流石ね。ラインなんて嘘でしょ？ タバサ以上に速かったわよ？」

キュルケがそんな事を言いながら近づいてくる。

「いや、あれでも結構ギリギリだったんだ」

「ふーん、余裕に見えたけどね」

疑わしく見つめるキュルケは次にシャルロットへと話を振った。

「ヤマトとタバサではどっちが強いのかしら？」

「ヤマト」

即答するタバサに啞然とする。

「あっさりと認めるわね…タバサってトライアングルでしょ？  
ラインのヤマトに勝てないって本当に？」

「魔法の強さじゃない、使い方。」

それにヤマトの方が私より戦いなれてる」



「へえ、魔法は強さじゃないか：使い方次第で格上のメイジにも勝てるって訳ね」

大和を無視して二人で話を進めるが、いらぬ事を言って混ぜ返したくない為黙って会話を聞くしかないのだった。

「それにしても、ヤマトって温和そうに見えて結構切れやすい？」

「いや、無駄な争いをしない主義だよ。

ただ、義兄や君らを馬鹿にされて黙ってるほど人は出来ちゃいない」

「……（ポツ）……」

「ヤマトって天然？」

3人そろって顔を赤くし、失礼なことをキュルケが言い放った。

「失礼な！誰が天然だよ」

「ヤマトよ！ ヤ・マ・ト！」

「……（コクリ）」

更に失礼な事を言うセラに頷くシャルロット。

「いや、天然じゃないよ。今の会話のどこにそんな要素があったの？」

言い返す大和に3人は溜息をついて会話しながら離れて行った。

「ちよつと？ シカトですか？ イジメだよ？ ないちゃうよ？」

大和は少し涙目で3人の後を追った。

~~~~~  
~~~~~

“ドーーーーーン”

夕食も終わり、皆が寝静まった時間。

毎日同じ音が響いて来る。

眠りを妨げるほどの音ではない。

大和がなぜ気が付いているのかというと、風と意識を同調していたからであった。

「今日もミス・ヴァリエールの訓練が始まったな」

セラに話しかけたつもりだったが当のセラは熟睡中だった。

入学して3日ほど経ってからだろうか、毎日同じ時間に人目を避けるようにルイズは訓練をしていた。

（しかし、なんで爆発するんだろうな？失敗⇨何も起きないってのが普通だろうに、ミス・ヴァリエールの失敗⇨爆発…どっちかと言うと暴走に近いと思うのだけだな…）

爆発する理由を考えるが答えが出ることはない。

「様子でも見てみるか」

寮を出て学院裏の広場へとやってきた大和の目に飛び込んできたのは、地面が穴だらけになった無残な物だった。

（これだけの状況を作り出した時間がせいぜい30分か…いったいどんな威力だよ…）

杖を正面に構え、10メートルほど離れた場所にある岩に向けて詠唱するルイズ。

「ウル・カーノ！」簡単な火属性『発火』のスペルである。

しかし起こった現象は岩手前の地面が爆発するというものだった。

「なんで…なんで出来ないのよ！ これで4属性全部失敗…」

その場に立ち尽くし、悔しさを隠すように俯いたルイジにヤマトが声をかけた。

「系統つて4つしかなかったっけ？」

たしか虚無とかなんとかがあったような？」

寂しそうに1人で魔法の練習をするルイズを見て、昔の自分と被ってしまったのだった。

「だれ！？ なんでここに？」

「ああ、すまない。

俺はヤマト・クサナギ・ド・フォルテ、ミスヴァリエールと同じクラスだ」

「ああー見た事あるわ。それで、何の用？」

「いや、眠れなくてね、散歩してたら音が聞こえたもので近付いてみたってとこ」

「ふーん…まあいいわ。

それでさっきの質問だけど虚無もいれて5系統ってのは間違いないわ」

「じゃあー練習していた4系統が失敗したのなら虚無の練習すればいいのでは？」

「あんだ馬鹿？ 伝説の虚無の担い手が私なわけがないじゃない！ だいたい、虚無の呪文を記した文献なんてどこにもないのよ？」

「ミス・ヴァリエールが虚無かどうかは知らないが、なんで呪文を記した文献がないんだ？」

「そんなこと知らないわよ！ 過去に居た虚無の使い手の数が少ないからとかじゃないの？」

「ふむ、では、系統に関係ないCOMMONマジックとかレベルの低いフライとかは？」

「…それも失敗したわ」  
今にも消え入りそうな声でルイズが答える。

「普通どんな系統でも使えるCOMMONマジックや低レベルの魔法もだめなのか…」

「今まで一度も成功した事がないの？」

「そっよ！悪い！？」

「いや事実を知りたいだけで馬鹿にしているわけではないから、そんなに怒るなっつて」

「……………」ジト目で睨むルイズ。

「最初に習う魔法ってレビテーションとかかな？」

「そうよ」

「で、それを習うときどういう風に指導された？」

「自分の中にある魔力を100%くらい使う感じで、石を浮かべると言われた。」

それが成功したら、石が浮かぶギリギリの魔力まで下げるって感じかしら」

「一回目で失敗したミス・ヴァリエールは2回目以降魔力を上げ続けたって感じ？」

「…そうよ、それでも成功しなかった」

涙目になったルイズは今にも消え入りそうで、日頃『ゼロ』と馬鹿にされても食ってかかる強気な少女ではなくなっていた。

「魔術に詳しいわけじゃないけど、系統には向き不向きがあるから別として、コモンマジックや簡単な魔法に系統は関係なくメイジなら誰でも使えるはずだよ。もしミス・ヴァリエールが虚無の担い手だとしても関係がないはず。ならなぜ使えないのか？ 多分…ミス・ヴァリエールの内包している魔力が多すぎるからだと思うんだ。100の魔力で良いものを1000くらい注ぎ込んでるって感じだと思っ」

「なに？ 私の魔力ってそんなに大きいの？」

「ああ。ミス・ヴァリエールの魔力は学院内の人全部を集めても足りないほどだよ」

「何で、あんたがそんなことわかるのよ？」

「俺も少し特殊でね、人の魔力を感知出来るって事でよろしく」  
「言った言葉の裏にあった他言無用の意味を賢いルイズなら解ると判断した。」

「便利な力ね…でも、魔力があっても魔法を使えないんじゃない意味がない」

「だからさ、レビテーションを唱えるにしても成功するまで魔力の放出を下げていけばいいんじゃないかと思うんだが」

「なるほど！」

早速魔法の詠唱を始めるルイズは派手に爆発していた。

「魔力の内包量からしてかなり下げなきゃ無理だから気長にな」

大和の言葉を聞いているのかいないのか、ルイズはひたすら詠唱を繰り返していた。

ルイズは1時間ほどで広場を破壊しつつし、肩で息をしながら大和の近くまで寄って来た。

「まあすぐには無理だよ。」

10の力でやってたものを1にしろってのじゃないから、  
ミス・ヴァリエースの場合は1000を1にしろって感じだし」

「ルイズで良いわ、ミスタ・フォルテ」

「じゃ、ヤマトでいいよ。ルイズ」

「ヤマトって変な人ね。」

普通は私の事を馬鹿にするか、ヴァリエールの名前を恐れて近寄らないのに」

「頑張ってる人を馬鹿に出来るほど哀れな人間じゃないよ俺は」

二人で破壊尽くされた広場を元通りにして寮へ帰ったところには真夜中だった。

~~~~~

「ヤマト〜！ 今日も練習に付き合ってもらえる？」

翌日の授業後、ルイズに呼び止められ魔法の特訓に付き合ってもらいと懇願された。

「ああ、良いんだけどタバサも一緒に良いかい？」

昨日は休んだけど、何時もはタバサと訓練してるんだ。タバサもいいかな？」

「…」

「そう、私はいいわよ」

「（タバサ？）」

「…わかった」

タバサは不機嫌そうに大和を睨み、ルイズはそんなタバサをみて何やら複雑そうな顔で了承した。

「ホント、ヤマトって鈍感…」非常に理不尽極まりないことをセラが口走った。

第2章 4話 ゼロと特訓（後書き）

キルケのフラグ回避したものの、
ルイズのフラグが立ちそうで怖い。

速くサイトを登場させないと…

フラグクラッシャー大和にご期待下さいw

駄文にお付き合いくださり感謝です^^

7 / 13 誤字修正しました。

7 / 18 3点リーダー、誤字、顔文字修正

第2章 5話 日常と初デート（前書き）

ルイズの素質…未恐ろしい…

最近シャルロットと二人つきりに慣れる時間ってないのでしょ。

特訓にはルイズが参加するし

昼間本を読んでたらキュルケがくるし

まあ〜楽しいからいいんだけどね^^

第2章 5話 日常と初デート

17、日常と初デート

特訓5日目

ついにルイズが『念力』を使えるようになった。

レビテーションやフライは風系統が微妙に混じるらしく無理だった
(シャルロットに聞いた)

しかし、ルイズの魔力が桁違いなこともあり、念力で宙に浮かせる
ことが出来るのがすごい。

レビテーションのように風を混ぜて浮かせるのは違い、純粹に魔
力だけで浮かせるってのが普通ではありえないということだ。(こ
れもシャルロットに聞いた)

170

ルイズに魔法の手ほどきをしたのはシャルロットだ。

当たり前だが大和には系統魔法どころかコモンマジックすら使えな
いのだから…

(そろそろ協力者を増やさないと、魔法を使えない状況で学院に居
続けることが厳しくなるな。

学院長くらいには相談しとくか…)

「(ルイズの魔法についてどう思う?)」

「(魔力が桁違いに強い)」

「(それも踏まえて、系統魔法が全て爆発ってことは虚無ってこと
は考えられない?)」

「(伝説の虚無だったらすごいこと、でも虚無だったら危険)」

「(伝説ってくらいだし、学院長くらいには相談しといた方がいいかな?)」

「(わからない、任せる)」

「それと、俺のこともそろそろ学院長に話して協力をお願いしてみようかと思う。

このまま学院に居続けるとなると精霊術と魔法の違いに気づいて面倒なことになりかねない)」

「(そう、それも任せる)」

「なにコソコソ話してるのよ! 私の魔法ちゃんと見てるの?」

シャルロットと大和が内緒話をしていることに気づいたルイズが文句を言うが、初めて魔法を成功させたことの達成感から満面の笑みを湛えていた。

「ちゃんと見てたよ、おめでとうルイズ」

「見てた、でもコモンマジックだけ」

「…たぶん新しい系統魔法なのよ! そう! それしか考えられないわ!」

「まあーコモンマジックが使えるようになったんだし、そのうち系統魔法もどうにかなるさ。」

それより、魔力のコントロールを磨かなきゃな」

「…ヤマト、タバサ、本当にありがとう。」

他の皆は馬鹿にするだけで助けてはくれなかった。

二人が助けてくれなかったらコモンマジックどころか、杖を捨ててたかもしれない」

真剣な眼差しで御礼を言ったルイズは大粒の涙を流した。

（魔法が使えないことへの劣等感と貴族としてのプライドで限界だったんだろうな、こんなに素直で優しい娘なのにな…）

「魔法が成功したのはルイズの頑張りがあったからだよ。」

俺たちはきっかけを与えただけ、この訓練だって元々タバサと一緒にやってたことだから。

気にしなくて良い。

ルイズはもっと自分に自信を持っていいと思うよ」

「…（コクリ）」

ルイズは止まらない涙を振り払い、華やかな笑顔を見せてくれた。

~~~~~

まず、幻獣とかの例外を除けばドットの魔法が当たっただけでも普通の人間は死ぬ。

それを踏まえると、10の耐久力しかない相手に10000くらいの攻撃を与えるような魔法は魔力の無駄になる。

スピードと手数が重要になるんだ。

ただし、相手が高位のメイジだったり耐久力の高いモンスターだっ

た場合は火力で押さなければ傷一つ付けられない場合もある。これも誘導、錯乱を下位の魔法で行い、上位の魔法は確実に当てることが重要だ。

系統魔法の弱点は1つの魔法を使用中は別の魔法を使えないことがある。

1対1での戦闘では守りに入ってしまうと一方的に攻められることも多くある。

シールドを張った場合、解除するタイミング1つで攻撃を食らってしまうからだ。

今シャルロットは接近戦をしながら詠唱を行う事を練習中だ。激しく動きながらの詠唱はかなりの集中力を要する。

大和の攻撃を杖で弾きシャルロットの蹴りが腹部を襲う。右へ避けた瞬間に背後からエアハンマーが襲いかかる。

回避が間に合わないと悟ると体を回転させ刀に風を纏わせてエアハンマーを切り裂く。

同時に回転の威力をそのままシャルロットへと叩きつける。

杖で受けたシャルロットは2メートル程吹き飛び尻もちをついた。

「今のは危なかった…大概のメイジならあれで終わってたよ」

「…ヤマトは防いだ…」

「いや、結構危なかったよ？　ってか防がなきゃ怪我してたよ？」

「……………」

「ん〜俺の場合接近戦が基本で魔法は補助的な役割だからね。」

魔法が主力で接近戦は補助的なこっちのメイジとは戦い方自体が違うんだよ」

「なぜ？」

「系統魔法でさ、同じ力量のメイジが戦った場合どの系統の火力が一番高いと思う？」

「……………火？」

「そう、エネルギー、質量などで火>水〓土>風が基本だと思う。ただし、こっちの魔法は掛け合わせができるから少し変わってくると思うけど、純粋な火力では火が一番だと思う。」

これを踏まえると、風しか使えない俺は他の術者と戦った場合に正面から魔法勝負なんてしたらまず勝てない。

向こうの世界では俺より強い術者が沢山いたから特にね。でも、速度、手数という面では風が飛びぬけて勝ってる。

遠距離では勝てないなら近接を磨いて魔法勝負をしなければ良いんだ。

それに、大きな魔法を行使するとそれだけ精神力がもたなくなるからね、持久戦でも魔法の使い過ぎは致命的なんだよ」

手合わせの合間にお互いの考え方や戦闘のしかたを話し合う。

1日2時間の特訓は二人に濃密な時間となっていた……………つい最近までは……………

「なぐに二人でコソコソ話してるのよ！」

私も混ぜなさいよ！ ファイナル・エレガント・スーパー・エクスプロージョンも結構的に当たるようになったんだから！」

「……………そのネーミングセンスだけは理解できないのだが」

「同意」

「なによ？ カッコイイからって嫉妬しないでよ？」

「いや、戦闘中にその長ったらしい名前を言つのはどつかと思つてぞ？」

「うっ」

「一言で済ませた方が良くないんじゃないか？」

「……………そうね、なんか考えとく……………」

意気消沈気味のルイズは今日も元気です。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

虚無の曜日、日曜日的な日に当たるお休みです。

「ヤマト〜遊びに行こう〜ヤマトってば〜」

「遊びについて何処にぞ？」

「何処でも良いよ」

朝早くからセラに起こされ王都へ買い物に出かける事になった。

寮を出た処で薔薇を銜えた少年と会った。

「やあ〜ヤマトじゃないか〜虚無の曜日に使い魔とお出かけかい？
僕なんてどの娘とデートしようか迷ってると思うのに、まあ〜もてるって辛いよね」

「…………おはようギーシュ。

もてるのは良い事だが……………お大事に……………」

「なんだい？ どういう意味……………」

「ギーシュ！ 誰と誰を選ばなきゃならないのかしら？
ちよっと詳しく聞かせて貰おうかしら？」

「いや、違うんだよ！ 僕にはモンモランシーだけだよ！」

ギーシュを引きずって広場へと消えていくモンモランシーを見ながら大和は手を合わせた。

「ギーシュって馬鹿よね？」

「まったく、懲りないよな……………」

「同感」

「うお！ タバサか吃驚した」

ギーシュを見送っているとすぐ横からシャルロットに声をかけられた。

「どこ行くの？」

「ああ、王都へ買い物でも行くところかと思ってね」

「…」なぜか照れるシャルロット。

「タバサも行くか？」

「いく」

「（折角のデートが…）」

嬉しそうなシャルロットと何故か不機嫌なセラと一緒に馬で王都へと向かった。

「これたべるううう」

「あれって何？」

「おいしいいい」

相変わらず露店でテンションのダダ上がりなセラに振り回されて人混みの中を進んでいく。

「…あっ」

「ほら、はぐれるよ」

大和は人の波に吞まれそうなシャルロットの手を掴み引き寄せた。

「…ん」

真っ赤な顔で俯くシャルロットの手を引いて近くにあったカフェテラスへと移動する。

テーブルに座る際、少し拗ねたような目で大和の顔を覗き込むシャルロット。

「流石に王都は人が多いね」

「まだ食べ足りないよ？」

「どんだけ食べるんだよ。取りあえずココで休憩」

タイミング良くウエイトレスが注文を聞きに来る。

「紅茶と…シャルロットは何にする？」

「……………え？ なに？」

「いや、何を頼むかなと」

顔を赤くし何やら呆けていたシャルロットは急いでメニューに目を通した。

「紅茶とシフォンケーキとパイと……………をお願いします」

「……………さすが」

「私はイチゴのケーキー」

ケーキを1ホール分頼んだシャルロットは再び物思いに耽る。

セラにしてもシャルロットにしても小さな体の一体どこに収まるのか不思議でならない。

30分程で完食したシャルロットと食べすぎで動けなくなったセラを肩に乗せ店を出た。

「シャルロットは何処か寄りたい店とかある？」

「……ない」

自分の手元を気にしながらも目線が服屋に流れたのを大和は見逃さなかった。

「じゃあ、あそこに入ってみようか」

シャルロットの手を引いて服屋の中へと入っていく。

王都の服屋の中でも中規模の店内には平民向けのものからある程度値段の張る貴族向けの物まで飾られていた。量産できるほどの機械化が発達していない為一点ものが多く、生地を展示している事の方が多かった。

「何か気に入ったものはあった？」

興味無さげに店内を徘徊するシャルロット。

しかし何時もと違う目の輝きを大和は気が付いていた。

（やっぱり女の子なんだよな…日頃は本以外に興味を示さないから新鮮な感じがする）

「…」

一着の服の前でシャルロットが止まり熱心に見つめる。

襟元の白い、水色のワンピースだった。

30エキユーという値札が見える。

(シャルロットの蒼い髪に合いそうな色だな)

「すみません！ この服ってサイズ合わせ出来ますか？」

「…っ、え？」

「シャルロットに似合いそうだからプレゼントするよ」

「いい、いい」

「俺がシャルロットに買って貰いたいんだ。

今度出かけるときはそれを着てくるってのはどう？」

「…うん」

サイズを合わせて出来上がるまでの数時間をウィンドウショッピングで潰す。

学院へ帰るまで終始顔の赤いシャルロットと未だにダウンしているセラ…

ただ、何時もより優しげな瞳のシャルロットを見て「ドキッ！」と胸を高鳴らせたのは内緒だ。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

目が覚めて広場へと散歩へ出かけた。  
虚無の曜日、天気も良く数名のカップルが王都へと出かけているのを何となく眺めていた。

嬉しそうに男子生徒の後を歩く女子生徒を自分に重ね、先を歩く男子生徒の姿を大和に置き換えて妄想する。それだけで顔が熱くなる。学院に来てからの自分が、それまで戦い続けて来た自分を壊していくような感覚を“焦り”と“不安”…少しの“期待”をもって感じていた。

なぜか大和の顔を見たくなったシャルロットは男子寮へと足を向けた。

「ギーシュって馬鹿よね？」

「まったく、懲りないよな……………」

男子寮の前まで来るとモンモランシーに引きずられて行くギーシュを見送る大和を見つける。

「同感」直ぐ傍まで近付き話に割って入る。

「うお！ タバサか吃驚した」

セラと一緒に何処かへ出かけるような素振りだった為、尋ねると王都へ買い物へ出かけるということだった。先ほどのカップルの光景

を思い出し少し顔が熱くなる。

「タバサも一緒に行くか？」

「いく」

妄想が広まる前に大和から誘われ即答してしまった。

妙にテンションの高いセラを追いかけるように人混みを掻き分けて通りを進む。

シャルロットは人混みが苦手だった。

背の低さもあり人の壁で前が見えないのだ。

人の流れに呑みこまれそうになった時、暖かい手がシャルロットの手を握る。

強い力で大和に引き寄せられた。

「…あっ」

「ほら、はぐれるよ」

「…ん」

耐えられないほどの羞恥と舞い上がりそうな高揚感で顔が熱くなる。

数分歩いた処でお洒落なカフェテラスへと誘われる。

席に着く際、離された手に少し寂しさを感じた。

「……………」

「……………え？ なに？」

大和に声をかけられたが先ほどの状況を繰り返し思い出していたシャルロットは聞き逃してしまった。

「いや、何を頼むかなと」

どうやら注文を取りに来たので何にするか聞いて来たようだった。

「紅茶とシフォンケーキとパイと……………をお願いします」

「……………さすが」

「私はイチゴのケーキー」

30分程でケーキを完食したがあまり味を覚えていない。

感情を外にあまり出さないシャルロットであるが、見る人が見れば『夢うつつな乙女』な表情であった。

（鈍感な大和は気が付いていない様だったが…）大和の肩でダウンしていたセラはそんな現状を完璧に理解して溜息をついた。

「シャルロットは何処か寄りたい店とかある？」

「……………ない」

また手をつなげないかな？と考えていたシャルロットは服屋を見つけたが自分の幼児体型を気にしている為オシャレすることに抵抗があった。

「じゃあ、あそこに入ってみようか」

再び手を繋がれたシャルロットは抵抗する間もなく服屋へと連れて行かれた。



王都の服屋の中でも中規模の店内には平民向けのものからある程度値段の張る貴族向けの物まで飾られていた。自分のような体型に合いそうな服は子供服以外にはないように感じた。

「何か気に入ったものはあった？」

すでに店内を2周して気になる服を見つけた。

(お母様が良く着ておられた服にそっくり)

それはシャルロットの母が好んで着ていた水色のワンピースだった。生地やデザインは値段からしても安物であったが、色合いなどは良く似ていた。

「…」

「すみません！ この服ってサイズ合わせ出来ますか？」

「…っ、え？」

「シャルロットに似合いそうだからプレゼントするよ」

「いい、いらない」

「俺がシャルロットに着て貰いたいんだ。

今度出かけるときはそれを着てくるってのはどう？」

「…っん」

長いこと見ていたため欲しそうに見えたのか大和がプレゼントしてくれると言った。

欲しい、欲しくないで言えば欲しかった。

しかし、自分に似合うとは思えなかったのだ。

でも大和は似合いそうだと言ってくれた。

それに大和からのプレゼントである。

いつも以上に顔が熱くなってしまった。

サイズを合わせて出来上がるまでの数時間をウィンドウショッピングで潰す。

サイズ合わせの終わった服を大和からプレゼントされ大事に胸に抱いて学院へと帰った。

自分の部屋のベットで今日1日の出来事を思い返し、ニヤニヤ笑いながら悶えるシャルロットだった。

## 第2章 5話 日常と初デート（後書き）

今回はEX的な話しにしてみました。

### 特訓風景と初デート

シャルロット視点で書くとしてもラブラブな感じになるのはなぜでしょう……

気持ちが入りすぎてるのかな？

私の文才ではこれが限界ですのでご理解願います><

3点リーダーの使い方がいまいち理解できていない作者でしたw

7/18 3点リーダー、誤字、顔文字修正

第2章 6話 夏休みとピクニック(前書き)

ギーシュってばかだけど何故か憎めない…

最近扱いが可愛そうになってきたけどね。

ピクニックって俺も初めての経験なのですよ。

多分…俺が一番テンション高いかもw

## 第2章 6話 夏休みとピクニック

18、夏休みとピクニック

テスト結果ができましたよ……………つと

A～Eまでの5段階評価

大和：筆記試験B、実技試験C

シャルロット：筆記試験A、実技試験A

ルイズ：筆記試験A（トップの成績だった…）、実技試験：D

キュルケ：筆記試験C、実技試験A

夏休み1日目。

殆どの生徒は実家へ帰郷してしまい学院には僅かな人数しか残っていないかった。

残り組：大和、シャルロット、キュルケ、ルイズ、ギーシュ、モンモランシー

他、名も知らない生徒数名

ルイズ、キュルケ、ギーシュは夏休み全部ではないが数日後には実家へ帰郷することだ。

モンモランシーは友人数名とポーションを作って売る（バイト）らしい。

大和とシャルロットは時間が取ればフォルテ領へと出かける予定

である。

何はともあれ夏休み初日の午前中、特にすることもなく大和とシャルロットとセラは何時ものように広場の木陰で読書に勤しんでいた。

「ヤマトくタバサく！ やっぱり此处に居た」

キュルケが小走りで向かってくる。

「どうしたの？」

「今暇よね？」

「暇と言えば暇だけど…なに？」

「暇じゃない」

「暇じゃないってタバサは本を読んでもただじゃない！」

「だから暇じゃない。本を読んでも」

「……じゃあヤマトだけでも一緒に出かけない？」

キュルケは悪戯な笑みを湛えてシャルロットを見つめる。

「出かけるって何処へさ？」

「モンモランシーが裏の森へ薬草を採りに出かけるからピクニックがてら一緒に行かないかって言ってきたのよ」

「ふん面白そうではあるね。タバサも行かないか？」

「行く」

「ふふっ」意味ありげにキュルケは微笑んだ。

準備の為に寮の自室へとそれぞれ帰って行った。

大和は昼食を弁当にしてもらう為、厨房へと向かう。

キュルケに昼食はどうするのか聞いた処、何も手配していないとのことだったので大和が頼みに行くことになったのだ。

「ヤマト様こんな所へ如何されたのですか？」

学院のメイド、シエスタが大和を見かけ声をかけてきた。

元が貴族や平民と言った格差とは関係のない世界から来た大和なだけに、シエスタ達平民への対応も柔らかいものであった。

その為、学院の平民からの受けがとても良いのだった。

「ああシエスタか。丁度良い、ピクニックへ出かける事になってね、10人分位昼食を弁当にしてもらえないか頼みに来たんだ」

モンモランシーが友人も誘っているとのこと少し多めに頼んだのだ。

(シャルロットもいることだし…)

「わかりました。マルトーさんに伝えておきますね」

「シエスタも一緒にと言いたいんだけど、裏の森には亜人もいるらしいから危ないね」

「そうだね。足手まといになるのも悪いんで次の機会にでもお願いします」

「うん次は一緒に行こうね。マルトーさんによろしく」  
マルトーというのは厨房の料理長で学院の平民の親分的な存在である。

シエスタと別れ寮の前まで来るとルイズに会った。

「おはよう、ルイズもピクニックに行くのか？」

「え？ 私は聞いてないわよ？」

良く考えればキュルケが参加する時点でルイズを呼んでない可能性が高い事を思い付いても良かったのだ。しかし、何時までも友人が少ないままでは寂しい。(シャルロットにも言えることだが)ピクニックへ誘って皆との間にできた壁を取り払う切っ掛けになればと考えた。

「モンモランシーが薬草を採りに裏の森へ行きたいらしくてね、どうせなら皆で弁当をもってピクニックに行こうって事になったんだ。良かったらルイズも一緒にどうかな？」

「偶々然、暇だから行ってあげても良くってよ」  
なぜか(ない)胸を張って勝ち誇った言い方だった。

「ふっ…じゃあ30分後に此处で落ち合おう」  
言い方が子供っぽく微笑ましくてつい笑ってしまった。

「ふうん分かったわ」

準備を終え、セラとルイズを伴って皆と合流する。



「何でルイズが居るのよ」

「何でキュルケがいるのよ」

「……………ルイズは俺が呼んだんだ。多い方が楽しいだろ？」

「…まあ良いわ、猫の手つてことでコレ持って貰うから」

「何で私が！」

「それぞれ仕事の分担よ。ヤマトもコレ持ってね」

「はいはい」

「分かったわよ」

其々弁当の入ったバスケットや飲み物の入った水筒を持ち森へと向かう。

学院の裏に広がる森は学院長の許可がなければ立ち入る事が出来ない。

その為、少し奥まで行くと様々な薬草が手付かずで残っているそう

但し、人が立ち入らないと言う事は野生の猛獣や亜人が生息している可能性も高いのだった。

「危険ではないか？」とモンモランシーに問うと、「だから貴方達に付いて来て貰ったのよ。よろしくね」と計画的に連れてこられたことが判明した。

「ん？」

「ヤマト？」

大和が声を上げた事に隣を歩いていたシャルロットが気付く。

「うん、2リーグ先に反応があつてね…ちょっと多いな…」

「どのくらい？」

「全部で30位かなあ…多分コボルド鬼だね」

「そう…やる？」

「皆と逸れるのも良くないし…モンモランシー！ 何処まで行くの？」

「もう少し先、後2リーグ位かしら」

「ああ〜丁度か…」

「何が丁度なのよ？」とルイズ

「丁度2リーグ位先にコボルド鬼らしきものがあるんだ」

「……えー！」「……シャルロット以外の反応だ。」

「そんな遠くの事が分かるのかい？ ヤマトは」

「ああ、セラが分かるらしいんだ」

「便利だね使い魔って…」

「え？ あ、あうん私は凄いのよ！」

調子を合わせて得意げになるセラだった。

「コボルド鬼の一匹や二匹、僕のワルキューレに掛ければ余裕だよ。僕に任せて皆は僕の雄姿を見学でもしていたまえ」

「…まあ俺とタバサも居るしどうにかなると思うけど、出来るなら他の場所へ行く事をお勧めするよ」

「僕一人で余裕だと言ったろ？ このまま進もう」

「……………何とかなるならこのまま進みたいわ。

人の手が入っていない所の方が薬草もいっぱいあるから」

「…じゃあ皆離れないようにして進もう」

ギーシュを華麗にスルーして先へと進む。

~~~~~

「じゃあギーシュ、頑張ってくれ」

「がんば」

「頑張れ〜」

「此処で見守ってるわ」

「早くね」

「骨は拾ってあげるわよ」

「「がんばってね……」」

上から大和、シャルロット、セラ、キュルケ、モンモランシー、ルイズ、友人2名……

「いや……多くないかい？」

「そうか？ギーシュなら余裕だろ？……」

「……まあ、あまり苛めてもな……」

意気消沈し涙目になったギーシュを不憫に思いながら大和が指示を出す。

「俺が真ん中に突っ込むから右に逃げたのをタバサ、左に逃げたのをキュルケが倒してくれ。」

ルイズは、あの手前の木よりこっちに来た奴を倒してくれ。

ギーシュはワルキューレを展開して此処を死守。

モンモランシー達は怪我をしたときに治療を頼む」

「僕は守りだけかい？」

「ギーシュがお姫様達を守る最後の砦だ。」

言うなれば近衛隊だから一番重要だぞ」

乗せやすいギーシュは大和の言葉で満足げになった。

「ルイズ、何時もの練習を思い出せ。やれば出来るから……気楽にいきなよ」

緊張の為か表情の優れないルイズも大和が声をかけたことで多少緊張がほぐれたのか笑みを見せてくれた。

「タバサ、キュルケ、左右の端っこに脅し程度の魔法を頼む」
コボルド鬼は50メートル程の範囲に集まっていた。
その両端にタバサとキュルケの魔法がさく裂したことで中央に集まってくる。

密集した中央に大和が刀を2本引き抜き突っ込む。

左右の刀に風を纏わせ独楽のように回転しながらコボルド鬼を切り伏せていく。

敵が密集している時に大和が好んで使う戦法だ。

派手に精霊術を行使出来ない状況ではこの戦い方が一番効率が良いとの判断だった。

時折風の刃を左端へと飛ばしキュルケの包囲網から逃れる敵を倒す。
シャルロットの方は問題なく殲滅していた。

大和は15匹切り伏せ、タバサとキュルケの魔法で7匹が倒されていた。

残り8匹。

(そろそろルイズにも自信を持って貰うか)

コボルド鬼を一匹後ろへと逸らし、密集している三匹へと切りかかる。

「ルイズ！ そいつを頼む！ 的の大きな腹を狙え！」

「っ！ エクセレント・ボム！」 “ドーン！” 「グェ！」

ルイズの掛け声と爆発音、コボルド鬼の断末魔がほぼ同時に聞こえ

て来た。

ルイズの魔法を受けたコボルド鬼は腹部に大穴を空けて倒れこんだ。
(エクセレント・ボムって…)

「やったあああ！」

飛びあがって喜ぶルイズを大和、シャルロット、セラ以外の面子が呆けて見つめている。

「よし！ 全部倒したみたいだよ」

「…何で返り血一つ付いてないのよ…あんたは」
接近して刀を振るっていたにも関わらず全身に薄い空気膜を纏っていた大和は返り血どころか汚れ一つ付いていなかった。

「汚れないように気を付けたからね」

「…何なのよその余裕は…」

「…ヤマトだから」

キュルケの問いかけにシャルロットとセラの声が綺麗に揃った。

あきれ顔のキュルケが「ごちそうさま」と言ったのを最後に二人は顔を赤くして大人しくなる。

「ルイズ上手くいったね、おめでとう」

「当然よ！ これくらい楽勝だわ！」

「うん、ルイズなら練習次第でもっと上手く魔法を使えるようになる」

るよ。

但し一人で無茶なことは絶対にしない事。わかった？」

「分かったわよ…」

調子に乗りやすいルイズにくぎを刺しておく事を忘れない

「僕は結局何もしてないんだけど…」

全く出番のなかったギーシュは小さくなっていた。

「いや、ギーシュが皆を守ってくれてると思ったから安心して戦えたんだ。

そうじゃなかったら後ろが気になって戦うどころじゃなかったよ」

「そ、そうか！まあ僕がレディー達を守っていたのだから安心できたってのは納得できる。

僕のワルキューレは無敵「はいはい、それよりヤマトって強いよねクルクル回ってあつという間に倒しちゃったし」…」

長くなりそうなギーシュの言葉を綺麗にぶった切りモンモランシーが大和に話しかける。

「本当あんなに強いとは思わなかったわ」とルイズ

「僕程じゃないけどね」とギーシュ（皆でスルー）

「そう言えばヤマトって二つ名はあるの？」

「いや、特にないよ」

「じゃあ『風車』とかどう？」

自信ありげにルイズが提案する。

「あんまり恰好よくないわね…」とキュルケが反応し、

「…旋風」とシャルロットが提案する。

「恰好いいじゃない！ 風車なんかよりよっぽど良いわよ」

「ヤマトはどっちが良いの？ 風車よね！」

「旋風」

ルイズとシャルロットが言い寄る。

「…旋風で…」

勝ち誇るシャルロットと納得いかないとダダをこねるルイズ。
会話に入っていない5人は三人のやり取りを生温かい目で見守っていた。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

綺麗な小川を見つけ昼食を摂ることとなった。

マルトーの作った弁当は満足のいくものであったという間に平らげたのだった。

「皆で一緒に動かないとダメかな？」

「この周囲に亜人とかの反応は無いつてセラが言ってるから、



あまり遠くへ行かなければ大丈夫だと思うよ」  
モンモランシーの問いかけにセラを引き合いに出して答える。

「よかった！ 手分けして探した方がいっぱい集められるから助かるわ」

薬草採取の為、思い思いに動き出す。

その場に残ったのは大和とシャルロットだけであった。

大和の居る場所から離れすぎないように周囲を散策する為だった。  
何かあったときに大声を上げることで大和とタバサが向かうと言う事になった。

キュルケはモンモランシーと行動し、それにギーシュが付いて行った。  
た。

ルイズとセラは友人二人に付いて行った。

小川のせせらぎと木の葉が擦れあう音。

穏やかな時間が過ぎて行った。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

Tabasa Side

何時以来だろう…

大勢の人と賑やかに過ごすのは…

お父様が亡くなり、お母様の心が壊れた日…

あの日から一人でいる事が当たり前になり、特に苦痛も感じなくな
った。

時々襲ってくる寂しさは本が癒してくれた。

…大和と出会い学院で再会してからは一人でいる事が少なくな
った。

最初のころは途惑いがあった。

でも、今では大和と一緒に居る事が心地よく、当然だと感じている。

目的を達成する為には強くなる事が絶対だ。

強くなることは一人になる事だと思っていた。

でも…一人で強くなるより仲間と強くなる事が大切だと教えて
貰った。

一人で抱え込むなと言ってくれた。

こんな私を助けてくれると言ってくれた。

今日のように大勢で騒いでいると昔を思い出す。

楽しかったあの頃を思い出すと涙が出そうになる。

けど、辛い涙ではない。

今が幸せだと感じるから。

昔と同じくらい幸せだと……………

「ヤマト…ありがとう」

考え事をしてしていると、つい口から言葉が零れた。

「ん？ なにが？」

「日の当る場所へ連れ出してくれて」

「……………シャルロットはさ、何でも自分一人で抱え込む癖が直ってないね。

前も言ったけど俺を頼ってほしい。たぶんキュルケ達もそう思うてるよ。

シャルロットの為に連れまわしてるんじゃないよ。

俺がシャルロットと一緒に居たいだけなんだ。

だから、シャルロットが楽しければそれでいいんだ」

「ん、私もヤマトと一緒にいると楽しい……………」

「うん、それでいいと思うよ」

大和は優しい。

私だけに優しい訳ではないけど……………

私には特に優しい（と思う……………思いたい）

家族以外で離れたくないと思えたのは大和一人だ。

今では誰より大切な人……………

起き上って私を優しく見つめる大和の傍で少しでも胸を借りて泣いた…

第2章 6話 夏休みとピクニック（後書き）

1日1投稿は難しくなっ
てまいりました><

リアル
の忙しさと文章能力のせい
です御免なさい。

顔文字無で書くの
って意外と難しい
ですね…

やっと大和の二つ名
が登場です！

名づけ親はシャル
ロットですお！

夏休み編は
まだ続きます。

駄文にお付き
合い下さって
ありがとうございます。

第2章・7話：夏休みと墓参り（前書き）

分かってたつもり…

分かってなかった傷の深さ…

セラが一番大人だった…

第2章・7話：夏休みと墓参り

19、夏休みと墓参り

ルイズ、キュルケ、ギーシュが帰郷し、学院は穏やかな日常が過ぎしていく。

夏休みに入って2週間が過ぎ徐々にシャルロットへの任務が来た。城から任務の内容を聞いて出て来たシャルロットの表情は陰っていた。

理由を聞くと今回の任務はオーク鬼の討伐、場所はシャレーの森。シャレーの森というのはシャルルの亡くなった場所だと聞いた。

（俺が召喚された場所はシャレーの森と言うのか…）

今回の任務の場所がシャルルが亡くなった場所と言うのに悪意を感じるな…）

シャルロットの表情が晴れないままシャレーの森へと移動する。

「オーク鬼ってこの反応かな？10匹程度だな……………」

シャルロットの反応はなく思いつめた表情で森を見つめている。

オーク鬼の反応がある場所へ向かいあと少しという所までたどり着く。

ココまでたどり着く間、シャルロットは一言も話すことはなかった。

「そろそろ見えてくるけど…大丈夫か？」

「大丈夫…」

思い詰めた表情のままシャルロットは答えるが、いつものような覇気が感じられなかった。

(思うところがあるのは仕方がない…か)

どんな言葉を掛けたところで意味を成さないだろう。頭では理解出来ているのだ。

しかし心が着いていけない。

シャルロットはまだ14歳であり、心は12歳で止まったままなのである。

それが分かるだけに大和は言葉を掛けたりはしなかった。

(ここだけはシャルロットを信じるしかないな…俺は傍に居る事しか出来ない)

「シャルロット、援護を頼む」

「…お父様はこの森の何処で亡くなったの？」
少し涙声でシャルロットが聴いて来る。

「っ！」

シャルロットの心がこれほど弱くなっていることに気づけなかった。敵を目の前にし、いつものシャルロットであればそれ以外の感情は殺すことが出来ていた。

どんなにしっかりしている様に見えても14歳の女の子であるのだ。

「シャルロットはここで待っていてくれ」

「…」

「片付いたら案内するよ。セラ、シャルロットを頼む」

「うん、分かった任せなさい」

何時も賑やかなセラもシャルロットの変化に戸惑いながらも儂さを感じていた。

それでも場の雰囲気を少しでも和ませようと明るく笑顔を見せた。

(セラには勝てないな…何時も助けられてばかりだ…)

「(ありがとうセラ)」

「(うん)」

小声で言葉を交わし、目配せをして大和は宙を舞った。

.....

お父様がこの森で亡くなった。

もう過去のことだ。

悲しくないわけじゃない。

辛くないわけじゃない。

でも目的のために全ての感情は心の奥深くに封印した。

なのに…お父様の亡くなった場所へ来ることになった時、
実際にこの森に来た時、

封印していた悲しみや自分の不幸を呪う感情が膨れ上がってしまった。

目の前の敵を倒さなければならない。

頭では理解している。

でも感情が追いつかない。

「お父様にあいたい……………」

「え!?!」

シャルロットの呟きにセラが反応する。

感情が追いつかないまま気が付けば飛び出していた。
目の前の敵が自分の父親の仇であるように見えたのだ。

……………

「シャルロット!」

セラの叫びが聞こえた。

振り返ると魔法を周囲にばら撒きながらオーク鬼に向かっていくシャルロットの姿が見える。

何時もの冷静さは欠け、焦りの表情に彩られていた。

意識が遠のく合間に大和の姿を探す。

遠くない場所で大和は剣を振るっていた。

何時もの華麗さは微塵もなくただ敵を切りつけているだけ。

この時初めて自分の行いを恥じた。

大和が冷静さを失うほど私の身を案じている。

そう思うだけで申し訳なさと嬉しさが込み上げてくる。

涙で視界が遮られる前に意識が暗転した…

目を覚ました時には川の近くだった。

あの後大和がオーク鬼を全て倒して移動してきたのだと分かった。

額と左でに包帯が巻いてあった。

「気が付いたかい？」

「…「ごめんなさい」

「いいさ、それよりどこか痛むところはない？」

「…「ごめんなさい」

「シャルロットの気持ちは分かるから…俺にも経験があるからね」

「違う……」

自分の醜態を詫びる気持ちもあつた。

だけど、それ以上に自分が倒れた時の大和の表情が頭から離れない。

心配してくれているのが良く分かった。

苦しめてしまったことが申し訳なかった。

過去に囚われ今を忘れてしまった事を謝りたかつた。

言葉にして伝えたい気持ちは沢山あつたが、

嗚咽と謝罪の言葉しか口に出来なかつた。

.....

「シャルロット、帰る前に連れて行きたいところがある」
シャルロットが落ち着くのを待つて声をかける。

「…わかつた」

シャルロットを抱え風を纏う。

上空から周囲を探索し、目的の場所を探し出すとゆっくりとその場所へ向かつて下降する。

「ここにシャルルを埋葬したんだ」

小高い丘に1本の杖が立っていた。
シャルルを埋葬した時に墓標の代わりに立てておいたのだ。

大和の言葉を聞いたシャルロットはゆっくりとした足取りで杖の前にしゃがみ込む。

「お父様……………」

暫くの間泣いていたシャルロットだが、先ほどのように取り乱すことは無かった。

「お父様の仇は必ず……………」

涙を振り払い毅然とした眼差しで墓標へと語りかける。

「シャルル…シャルロットは俺が守る」

「守られるだけじゃいや…ヤマトが死ぬのはいや…」

涙を浮かべ真剣な眼差しでシャルロットが呟く。

守ると言うのは自己満足でしかない。

本当の意味でシャルロットを守りきるには悲しませてはいけない。

命があっても心が壊れては元も子もないのだ。

そんなことは過去の体験から分かっていたつもりだった…

つもりでしかなかったのだと思いきらされる。

「俺は死ぬつもりはないよ。自己犠牲の上で幸せになれる人なんて誰もいないことは分かっているから。だから、シャルロットの幸せを守る」

それは、シャルロットの覚悟を、その身を、心を守りきると言う誓い。

大和がシャルロットの騎士になる事を意識した瞬間だった。

姿が見えなかったセラが小さな花を摘んで戻ってくる。

3人の中で一番大人なのはセラだと確信した。

…やっぱりセラには助けてもらってばかりだ…
くすぐつたい気持ちよかった。

第2章・7話：夏休みと墓参り（後書き）

シリアスになっちゃいました…

ぶっちゃけ無くて良かった話のような気もしますが…

ラブな感じを出したかったですが無理でした><

シャルロットの心の闇がこんなに深い！ってことでご勘弁を。

次回こそはラブな感じに！！！！

第2章・8話：夏休みと里帰り（前書き）

セラの目が怖いです…

カリムの目も怖いです……

シャルロットの目が可愛いです……

第2章 - 8話：夏休みと里帰り

20、夏休みと里帰り

「あれがフォルテ領。
一応俺の実家ってことになるのかな？」

「…うあ
」

シャルロットの口から小さく感嘆の声が漏れる。

眼下には豊かな農地と暮盤の目のような道が張り巡らされた街が広がっている。

何時ものように街の手前にある森へと降りる。

門番に徒歩で帰ってきたことを吃驚されたが、近くまで知り合いの馬車に乗せて来て貰ったと伝えると納得された。

ロアンへの面会を頼むとすぐに応接間へと通された。

「よく帰ったな大和。
学院の方はどうだ？」

腰掛けていたソファアールから立ち上がり迎え入れてくれた。

「なんとか馴染む事が出来てます。
義兄上もお元気そうだなによりです。
そして、此方が前に話していたシャルロット様です」

「始めましてロアン卿。シャルロットと言います」
丁寧な御辞儀をするシャルロットは良いとこのご令嬢に見えた。
(間違いなく良いとこのご令嬢ではあるが何時もの態度から最近忘れ勝ちだった)

「お話は伺っております。受入の準備は進んでおりますので、何時でも歓迎いたします」

「はい、その時はよろしくお願いします」

どこか余所余所しい二人を見比べ苦笑を浮かべる。

「どうした(の)ヤマト?」「」

ロアンとシャルロットが同時に問いかける。

「いや、こんな二人を見るのは珍しいからね。

義兄上は余所行き態度でことで分かるんだけど、シャルロットの言葉使いには慣れなくてね、吃驚したのさ」

「初対面ではこんなものだろう?」

ゆっくり慣れていけば良いさ。

将来の大和のお嫁さんだから大事にしないとな」

悪戯な笑みを浮かべとんでもない事をロアンが口走った。

「なっ……」

大和とシャルロットが顔を赤くし言葉に詰まる。

「……義兄上、流石にシャルロットに失礼だよ。

こんな何処の馬の骨とも知れない俺じゃあ釣り合わないだろう」

シャルロットは王位継承権こそ無くなったが現王の姪に当たる由緒ある血筋である。

対する大和は此方の世界では男爵の義弟でしかない。

「馬の骨つてフォルテの名が……………」

「そんなことない！今の私は唯のシャルロット…」

「ありがとうシャルロット。」

でも自分を卑下してるわけじゃないんだ。

単なる一般論だよ」

「ヤマトは私のこと嫌い？」

少し涙ぐみ上目使いで見つめてくる。

「うつ…き、嫌いなわけじゃないか！

シャルロットのことは好きだし大切に思ってるよ」

自分の顔が火照るのが分かった。

それほどの破壊力が今のシャルロットの表情と仕草にはあったのだ。

「ん…」

小さく頷くシャルロットはどこか嬉しそうだった。

「…ロアンが変なこと言うから二人の世界に入っちゃったじゃない

…」

「いや、煽った僕が言うのもなんだが…

ここまでピンク色の世界を作ってくれるとは思わなかったよ…」

呆れ顔のセラとロアンの会話が聞こえ、更に顔を赤くする二人だっ

た。

.....

大和にとってシャルロットは守るべき存在であると共に妹の幻影を見ていた。

此方の世界に来て見つけた自分の使命だと考えていた。

過去の自分にシャルロットを重ね、助けたいと思ったのが全ての始まりである。

そこに恋愛感情はなかった……………

シャルロットは可愛い。

年齢より遥かに幼く見える容姿ではあるが立ち振る舞いや言動などは大人びている。

そっちの趣味は持っていないと思っているが、恋愛経験の全くない大和は自分の心の機微に付いて行けないでいた。

時折見せるシャルロットの笑顔や先ほどの表情に冷静ではいられないほどの思慕感や独占欲に近い感情が沸き起こってくるのだ。

シャルロットの事を妹として、仲間として好意を持っているのか、恋愛対象としての好意なのか判断できなくなっていた。

.....

フォルテ領へと帰って来たその日の夜、ささやかながら晚餐が催された。

様々な料理がテーブルに並ぶ中、見覚えのある料理もあった。

「義兄上、これってもしかして『肉じゃが』だったりします?」

「ふふ、吃驚しただろう? タルブという村で醤油に似た調味料を見つけてな、作らせてみた」

「それって…」

「ああ、考えている通りだ。」

ただその人はもう亡くなったらしくて、子孫が未だに作り続けているそうだ」

「そうですか…」

大和は軽く黙とうを捧げる。

二人の会話に付いていけない他の参加者は首を捻るばかりだった。

晩餐会の参加者は大和、シャルロット、ロアン他に、カルロス、カルロスの息子カリム、内政を取り仕切るシュバートル、シュバートルの妻レクレアの8人だった。

カルロスの妻リリアはメイド長であることから給仕を行っていた。

「タバサ、どう? おいしい?」

「ん…甘くておいしい」

初めて食べる『肉じゃが』を気に行った様子で食べ続ける。

いつものような勢いはなく、良く食べる程度なのが気になった。

「（食が進んでないようだけど、何処か調子悪い？）」

「（……そんなことない、大丈夫）」

大和の家族である周囲の目があることでシャルロットは体面を気にしていた。

『良く見られたい』という気持ちを大和は理解していなかった。

感情の機微に聡いセラが溜息をつき、ロアンが苦笑した。

食事が終わり、テラスへ移動し雑談をする。

「タバサさんと僕は同じ年なのでね。

系統は風ですか、僕は火のラインになりました。

本を読むのが趣味なのですか？

僕は父上のようにこの領地を守る騎士になるのが夢です

「……………」

テラスに移ってから、カリムがシャルロットに再三話しかけている。年齢が同じで身長の高くないカリムとシャルロットが並ぶと兄弟のように見える。

シャルロットは簡単に返答しながらも何処か落ち着きがなかった。

「カリムはもう火のラインになったのか、カルロスさんも喜んでた
だろう」

「はい、この前初陣も済ませました。

将来は父上のような立派な騎士になりたいのです」

「そうか、カリムなら立派な騎士になるだろうな」

父親であるカルロスは良く言えば大らか、大雑把な性格である。

母親であるリリアの影響かカリムは礼儀正しかった。

「ヤマトは卒業したらどうするの？」

「んゝまだ考えてないな。」

そのうち義兄上を手伝う事になると思っけど…」

「けど？」

「守りたい人が居るからね。」

そっちが優先になる…この先どうなるかなんて分からないさ」

「…」

シャルロットの問いかけに対する答えになっていないとは思ったが今の大和ではシャルロットをどうすれば守る事になるのか分からないでいた。

シャルルの仇を打ち、母親を病気を治せばそれで守った事になるのか？ と問われればそうなのかもしれないが、それ以降のシャルロットを放り出すという考えはなかった。

「タバサは目的を達した後はどうしたいの？」

「…わからない」

「そっか、お互いゆっくり考えて答えを出せばいいよね」

「ん…」

ほんのり頬を染めるシャルロットは可愛かった。

「…ヤマト様とタバサさんは恋人なのですか？」

二人の会話を聞いていたカリムが問いかける。

「……う」

同時にお互いの顔を見てしまい頬を染める。

「い、いやそんなんじゃないよ」

「そんなに慌てたら説得力ないわよ……」
しらせ顔のセラがボソツとつぶやいた。

「……じゃあー僕がタバサさんの恋人に立候補してもよろしいですか？」

「……う」

二人して息をのみ、まじまじとカリムを見つめる。

「嫌だな〜冗談ですよ！ 冗談。」

そんなに困った顔されるとちよつと傷つきますよ……」

冗談のようには見えなかったがカリムは慌てて訂正する。

「（カリム……ドンマイ……）」

「（ヤマト様つて天然？ しつかりタバサさんのことを意識してるくせに単なるお友達状態？ タバサさんもヤマト様に気があるように見るけど……まだ僕にもチャンスあるのかな？）」

「（チャンス云々は限りなくゼロに近いようにも思えるけど、ヤマトとタバサだからね……」

天然なのは間違いないわよ。

それにしても、恋愛のことで年下のカリムに劣ってるヤマトってど

うなのよ？」

かなり失礼なことを言われてる気がする大和であったが、カリムの言葉を変に意識してしまい、シャルロットの顔をまともに見れずにいた。

「微笑ましいですな」

「…大和の恋愛に関する精神年齢はカリムより下のようだな…
なんとも情けない」

「ふふっ若いですから…こればかりは経験ですよ」

「しかしカリムの奴、タバサ様に結構本気のようにすな」

「若いってすばらしいですわ」

大人の会話も大和達を魚に盛り上がっていた…

~~~~~

S e r a   s i d e

私は妖精。

大和の恋人にはなれない。

異性としての1番は諦めているが1番の仲間？ 親友？ 理解者？  
何でも良いので近くにいららればそれで良いと思っっている。

幼さの残る顔立ちだが真剣な時の表情はかなり恰好良い。

身長も高く細身。

風の精霊に好かれていただけに掴みどころのない面が見られるが、他の人間にはない不思議な雰囲気が目人を引く。極めつけは誰にでも優しいこと。

そんな大和は結構もてるのであるが、本人にその意識はない。意識していないからこそ鼻にかけた所がないのだ。

欠点といえば『のんびり』した性格だろうか。

戦闘に関しては常に冷静で大胆な行動も取れるのに、こと恋愛に関しては天然？　　ってくらいの鈍感さを発揮する。

私としてはその事でかなりヤキモキさせられるのだ。

大和の相手が誰であろうと、私が1番の『何か』であり、一緒に居られるのであれば文句はない。

ただ、大和の相手を考えた時シャルロットなら…

微かに残った期待を諦める事が出来る気がする。

シャルロットは一途だ。

壮絶な過去により『自分』を封印してしまってるが、その根本は『可愛い』

十分な愛情を与えられ成長してきた者特有の『愛らしさ』が感じられる。

目的の為に非情になろうと本人は思っているようだがそれすらも『愛らしく』感じる。

結局、非情にはなり切れていない、優しい人間なのだ。

「ねえセラどうしたの？　急に静かになっちゃって…」

「「めんめん、ちょっと考えごとをしてたの」

晚餐会がお開きとなり、参加者はそれぞれの部屋へと戻って行った。カリムが「相談事がある」といってセラを自室へと促したのだった。

「それで、なんだっけ？」

「だから、ヤマト様とタバサさんって結局どついう関係なのかって話」

「ん〜見たまんまなんだけど…」

「見たまんまだと両想いのくせに、なかなかくっ付かない嫌味な力ツプルってことになるんだけど？」

「そのまんまよ…」

「…僕が入り込む余地はない？」

「……無い…かな」

「………はあ。結構本気だったんだけどな…」

「今日は朝まで付き合っわよ…」

「セラは優しいな…よし、お父様の『特別』なワインを開けちゃおう！」

不憫に思ったが、大和とシャルロットの間に入って如何にかできる

ようにも思えなかった。

(結局私が苦勞するのよね……………)

この日、朝までカリムに付き合い大和の愚痴を散々話した…

~~~~~

Y a m a t o s i d e

自室へと戻りベッドで休んでいた。

しかし何時まで経っても眠れず、ぼんやりと天井を見つめていた。

眠れない理由は分かっていた。

これからの事を問われ、答える事が出来なかった事への『答え』である。

シャルロットの目的を達成させる。

もしくは納得のいく結果に導く。

それが済んで、安全が確保できた後の行動だ。

ガリアの王族であるシャルロットの傍に居る事で迷惑をかけるのではないか？

シャルロットは傍に居る事を望んでくれるのか？

俺は…シャルロットの傍に居たいのか？

俺は……シャルロットの事をどう思っているのか？

悩み続けるが答えが出なかった。

“コンコン”

「はい、どちら様ですか？」

時間は深夜を回っている。

こんな時間に誰が？ と疑問に思うが心当たりがない。
返事がない為ドアへ近付き鍵を外す。

「どうしたの？」

廊下に立っていたのは枕を抱えたシャルロットだった。

「入っていい？」

「ああどうぞ」

部屋へと招き入れ話を聞く。

「どうしたの？ なにかあった？」

「…」

ベッドに腰かけたシャルロットは枕を胸に抱き不安そうに見上げてくる。

「何か話があったんじゃないのか？」

「……怖いの……」

「へ？ 何が？」

「……おばけ」

「……ん？ おばけが出たの？」

「出そうなの……」

元来暗い所とお化けが苦手なシャルロットは見慣れない天井と暗さに耐えきれなかった。

「……あの〜シャルロットさん？」

「一緒に寝て良い？」

「……それはまずいんじゃないかと……」

「だめ？」

不安そうな表情で見つめるシャルロットにダメとは言えなかった。

「……わかった、シャルロットはベッド使って。俺はソファ「ヤマトと一緒にねるの」……」

そう言って手を掴み布団へと潜る。

触れ合うシャルロットの肩が震えていた。

そつと頭を撫でると徐々に震えが治まり手を離す。

「ヤマト……撫でて」

「……はいはい」

幼い子供が何かをねだる言い方に笑顔が零れる。

大和を抱き枕にしたシャルロットの寝息が聞こえるまで頭を撫で続けるのだった。

第2章・8話：夏休みと里帰り（後書き）

夏休み編第3弾！

少しはあまゝい感じが出たでしょうか？

大和とシャルロットを近付ければ近付けるほどセラの立ち位置が難しくなってくるのですが…

マスコット役だけは死守するのです！

…ロアン以外の第三者がいる場合シャルロットではなくタバサと変えました…何も考えずにシャルロットを連呼してしまいました…

少しは 握 様のご期待に添えたでしょうか？（笑

第2章・9話・夏休みとドラゴン退治（前書き）

お化けとドラゴン……

ドラゴンの方が怖いような？

でも、不確かな存在って考えてみると怖いね＞＜

第2章・9話：夏休みとドラゴン退治

20、夏休みとドラゴン退治

晩餐会の翌日、ベッドから起きようとした大和は身動きを封じられていた。

昨晚『お化けが怖い』というシャルロットと同じベッドで寝たのだが（同じベッドで寝ただけ！ ココ重要！）

未だに起きる気配のないシャルロットに拘束されているのだった。

（さて、どうするか…起こすのも可哀想だし、寝顔は可愛いし、起きるまで見てるか？）

普段見せないあどけない寝顔は年相応の愛らしさがあった。

何時までも見ていたいような、見ていることが罪なような…この一時間がとても愛しく思えた。

「ん、んん…」

「おはよう」

「あつおはよう」

目を覚ますなり大和の顔を見つめ顔を赤くし挨拶を返す。

なんとなく照れくさくなりお互い無言で目を泳がせる。

数分の間会話もなく身動きが取れないでいた。

”コンコン”

「ヤマト様、起きていらっしやいますか？ 朝食の準備が出来ました」

「あ、ああ起きてるよ、すぐ行くから」
起こしにきたメイドの声に慌てながらも返事をする。

「タバサ様はこちらにいらっしやいますか？ お部屋にはいらっしやらないようなのですが」

「う、ああ」

不意に発せられた問いかけにまともな返答が出来なかった…

「では、食堂に準備が来ておりますので、失礼します」

メイドが遠ざかって行き胸を撫で下ろすが、この後の朝食が怖くなってしまうた。

シャルロットを部屋へ送り出した後素早く身なりを整える。
今後起こるであろう事態について対策を練るが何一つ名案は浮かばなかった。

シャルロットを伴い食堂へと顔を出す…思った通り生温かい視線が集中する。

「お、おはようございます」

「……おはよう（ニヤ）」「……」

カルロスは仕事中、カリムとセラはまだ寝ているとのことで朝食の場にはいなかったが、他の面子が同時に挨拶を返す。

「…」

(やばい…みんな勘違いしてる目だ…)

「タバサ様、昨日の夜は楽しんでいただけましたかな？」

薄笑いを浮かべ、ロアンがシャルロットに話しかける。

表面上は晩餐会のことを指した言葉だが…裏を感じさせる。

他の面子も興味深々でシャルロットを注視している。

「…はい、楽しく過ごさせていただきました」

シャルロットも表面上問題のない発言であるが…顔が仄かに赤く染まっていた。

(まずい、会話の流れを切らなければ…ただ、扱いを間違えると傷口が広がるな…)

「カリムとセラはまだ起きませんか？」

「遅くまでワインで盛り上がったのだそうだ。まあ自棄酒だろう」
変わらないニヤケ顔でロアンが答える。

(まずい、今何を言っても会話の流れは変わらない)

結局朝食が済んでそれぞれが仕事へ行くまで回りくどくからかわれたのだった…

変に否定しようものなら其処から傷口を広げられた。

この後数日の間、同じ話題で大和は遊ばれ続けた。

~~~~~

「はあああああ！」

胸を貫くよに迫る高速の突きを体を回転させ弾く。

回転を止めないまま相手を切りつけるが弾かれた勢いのまま距離をとられる。

勢いを増した回転から鋭い剣戟が追うように飛ぶ。

全てを受け切れることは叶わず武器を飛ばされて勝負がついた。

「突きを放った後の回避は素晴らしかったですが、攻撃される側に回った時は受けるのではなく距離をとった方が良いですよ」

「しかし、距離を取って相手に魔法を使われては…」

「アニエスと接近戦で互角以上に戦えて、隙を作ることなく魔法を放てるメイジがそうそう居ると思えないよ。仮にそういう相手と戦う事になったら、逃げる事をお勧めするよ」

理解は出来るが納得できないという表情で女剣士は姿勢を整える。

「はっ！剣妓で後れを取らないように研鑽します」

女剣士の名はアニエス。

平民である彼女は魔法を使えないが剣の腕は一流。

剣一本でメイジを倒す事の出来る『メイジ殺し』である。

フォルテ領に仕えて2年になる彼女は平民で在りながらカルロスに次ぐ実力を発揮していた。

剣の訓練でアニエスとまともに戦えるのはカルロスくらいなもので、忙しいカルロスに代わってここ数日の間大和が訓練の相手をしてい

た。

「ヤマト様、ロアン様がお呼びです」

「ああ、わかった。じゃあ訓練はここまでにしよう」

「はっ！ ありがとうございます」

メイドの後に続きロアンの待つ執務室へと向かう。

途中自室へ戻り、汗を拭き身なりを整える。

執務室にはロアン、カルロス、シュバートルが待っていた。

「この二人にはシャルロット様の事情を話してある」  
ロアンがそう前置きをし話を進める。

「当初、この城にシャルロット様を匿うつつもりだったのだが…」

「大丈夫です。義兄上の言いたい事は理解できます。

匿うのは一時の事で構いません。後は何とかしてみます」

ロアンはこのフォルテ領に住む民を守らなければならぬ身である。大和に協力したいがもしばれた時には家臣、民に危険が及ぶ可能性があるのだ。

たぶんシュバートル辺りから反対されたのだろうと推測できた。

「いや、私の直下では難しいと言うだけで、フォルテ領で匿う事には賛成なのだ。唯…」

「私が説明しましょう。言いだしたのは私なのですから」  
シュバートルがロアンの言葉を継ぐ。

「ヤマト様、私はフォルテ領を守る事を一番に考えております。シャルロット様をこの地に匿った事が公になった際どのようなことが起きるか心配なのです」

「分かっています。私の我儘でフォルテの民に災厄が訪れるのは避けたい」

「申し訳ありません」

ですが、ロアン様の知らぬところで匿われていたという事ならどうにでも逃げ道が作れます。

そこで、ヤマト様には領地を持って頂きます」

「待つて下さい。私は爵位を持っていません」

「ええ、ですから領地経営の勉強という理由で村1つを自治領として治めるのです。

将来的に爵位を持たれたら其のままその村を拠点として治めても良いと考えます」

「…それしか手は無いようですね。ですが、領地経営など私には出来そうにありませんよ」

戦い続けて来た大和には誰かの上に立つ、それも民を守るという立場が全うできるとは思えなかった。

「それについてですが、勿論協力致しますしヤマト様なら大丈夫だと思います。

それに、この話を知っている者の中にはヤマト様に仕えたいと言っているものも多数いらっしゃいます」



これには大和自身吃驚したがロアン以上に平民に優しく、様々な諍いを治めて来た大和に好意を抱く者も多かったのだ。

「わかりました。その方向でよろしくお願いします」

「大和、すまない」

「いえ、十分以上のことをして頂いてます」

深く頭を下げ謝罪するロアンに大和は申し訳なく思った。

「いや、この話とは別に頼みたい事があるんだ」

「なんででしょう？ お力になれる事でしたらなんでも言いつけて下さい」

「じつはな……………」

「それで、大和の領地だが丁度新たに庇護を求めて来た街があつてね、大和自身に救ってほしいんだ。

自分たちの領主になる人間が自ら救うという事実が役に立つだろうからね」

ゲルマニアとの国境に隣接するように深い森があり分け入ってすぐの場所に人口300人程度のホートスという村がある。

村から50リーグほど離れた場所に打ち捨てられた古城が存在するのだが、

最近その古城に火竜が住みつき村人に被害が出ているとの事だった。一度偵察の為に兵を派遣したが死者こそ出なかったものの返り討ち

にあつたそうだ。

出発は1週間後、メンバーは大和以外に10名が集まった。付いてくる兵士はそのまま大和領地で働く事になる。

全ての兵士は以前遠征した際に大和が率いたメンバーだった。驚いた事にライカもその中に含まれていた。

「ライカさんが来てくれるのは心強いです。貴重な水メイジが俺のところ引き抜かれて大丈夫なのですか？」

メイジ自身が貴重な存在であるが特に治療のできるミズのメイジは何処でも重用される。

「私以外にも水のメイジが入ったし、ヤマトの方が大変そうだからね」

貴族となった大和にも変わらない態度で接してくれる貴重な姉のような存在だった。

最初は口調が丁寧になったのだが、大和が人目のないところだけでも今まで通りでお願いしますと頼んだのだ。

「ヤマト…だれ？」

シャルロットが馬を寄せ大和に聞いてくる。

大和は待っていて欲しいと頼んだのだがシャルロットは聞き入れなかった。

「前一緒に亜人討伐をしたライカさん。水のラインなんだ」

「お初にお目にかかりますタバサ様。ヤマト様が治める領地に赴任する事になりましたライカと申します」

「よろしく」

ロアンから「タバサ様は大和の将来の嫁だ」と教えられていたため仕える主人として接してた。

大和自身はこの事を知らないため、ライカを含めた10名の暖かい目線の理由に気が付かないでいた。

3日の行程は何事もなく過ぎ、目的地であるホートスの村に着いた。村で一泊した後、村長に赴任の挨拶をし古城へと出発した。

2時間半ほど森の中を進み大和の索敵範囲に火竜と思われる反応を捉えた。

開けた場所へ移動し対策を練ようとしたとき、突如科竜の反応が移動する。

かなりの速度で此方を目指して真っ直ぐと近づいてくるのだ。

（おかしい…生き物の反応がない、それに火の精霊の反応が強すぎる。後、土の精霊も少し混じってる…先住魔法の類か？）

「敵が近付いて来る！ 散開して射撃準備を！」

指示を飛ばし、近付いて来る方向を凝視する。

暫くして現れた敵は姿こそ火竜であったが、内包している火の精霊が桁違いに強大だった。

「撃てー！」

大和の掛け声と共に9発弾丸とシャルロットのアイスニードル、大和の風が火竜を襲った。

しかし、当たったはずの攻撃は火竜の纏っている火の精霊を少し散らしただけであった。

「なっ!? 唯の火竜じゃない?」  
シャルロットを含めた数名の兵士から動揺した声が漏れる。

「たぶん、ゴーレムの類だな。さっきの攻撃で火竜もどきの魔力が少し削れた! 倒せない相手じゃないぞ!」  
精霊ではなく魔力と置き換え動揺を抑えると共に檄を飛ばす。

動揺が治まる前にゴーレムの口が開き口の奥で炎が凝縮し放たれる。

炎は味方を包み込む前に風の障壁を作り出し防ぐ。

「ブレスは俺が食い止める! 安心して攻撃を続けてくれ!」

炎の熱すら遮断した大和の障壁に逃げ腰だった者も攻撃を再開する。  
(攻撃による火の精霊の消費が回復している…精霊を召喚し続けてなければ無理だぞ…反則だろ)

精霊に意思を込め攻撃に使うと意識から離れた精霊は元の場所へと帰っていく。

それなのに目の前のゴーレムは減った精霊を新たに補充しているのだ。

ゴーレムという命令された意思しか持たない存在が精霊を新たに召喚しているとは考えられない。

(何か裏があるはず)とゴーレムを観察する。

(あれか?)

ゴーレムの胸に赤く輝く石が埋め込まれていた。

その石が光るたびに精霊を取り込んでいるように感じた。

しかし、風の障壁を維持し続ける大和には攻撃へと回す精霊の召喚の時間が取れないでいる。

その間にも攻撃を続けていた兵士達からは衰える事のないゴーレムの姿に焦りの色が見え始めていた。

（まずいな…時間をかけるとこっちが不利になるだけだ）

常に精霊を召喚し続ける事の出来るゴーレムと弾丸や魔力、精神力に限りのある大和達では時間が経つほどに力の差が出てしまう。

（少しの時間が稼げれば…）

「ライカさん！ 出来る限り大きな水の塊をぶつけて！ タバサはシャベリンの準備！ セラは数秒で良いから障壁を張って攻撃を防いで！」

言い捨てるように指示を出しセラの障壁を感じ取った後、自らの障壁を解き精霊の召喚を始める。

ライカの水塊がゴーレムへと迫り、水蒸気を撒き散らしながら衝突する。

大和の意図を理解していたシャルロットはその碎け散った水を元に巨大な氷の槍を作り出す。

大和の風がシャベリンに勢いをつけゴーレムの顔を粉碎する。

同時に、高密度で精霊を纏った大和は蒼い光の残滓を残しながらゴーレムへと接近し、赤く輝く石へと刀を突き立てた。

石は粉々に碎け集まった火の精霊が荒れ狂うように周囲へ飛散しようつとする直前、大和とゴーレムを中心に突如竜巻が発生し火の精霊を上空へと運んだ。

炎の竜巻と土埃が消え去った場所には大和一人が仰向けに倒れていた。

「ヤマトー！」

シャルロットが飛び出し大和へと走り寄る。

すぐにライカや他の兵士も近付きヤマトの怪我に声を失う。

赤い石を砕くまでは全身に空気の膜を纏い炎からの熱を遮断していたのだが、竜巻を作り出し炎の飛散を防ぐために自分を守っていた精霊までも使ってしまった為小さくはない火傷を負ってしまったのだった。

すぐにシャルロットとライカが治癒の魔法をかけ、徐々に火傷が消えていく。

「…ありがとう。タバサ、ライカさん」  
全身の火傷が痕も残らず消え失せた頃になって大和の意識が回復した。

少しの痛みを残しているが動けないほどでもなかった為体を起こすとシャルロットが抱きついて来た。

大和が火傷を負って倒れているのを見たとき、目の前が真っ暗になった。

人の心配ばかりして、自分の心配はしない。

そんな大和が許せなくなった。

怪我を治療し終わった時、思いつきり引つ叩いてやるうと思っていた。

でも…お礼を言われ、笑顔を見せてくれた時にそんな考えが全て飛んで行った。

ただ、安心した…大した事がなくて嬉しかった。

気がつけば胸に飛び込んでいた。

「無茶をしないで……」  
ただ泣きながらそう言うのが精いっぱいだった。

「ごめん、心配をかけたね」

優しく頭を撫でる大和に何も言えなくなった。

泣きじゃくるシャルロットを慰めつつ古城へと移動する。

古城と言うだけあって古めかしいものだったが、魔法が掛かっているのだから外観に壊れた所どころか亀裂すら走っていないかった。

中に入って更に驚く、壁や柱は勿論のこと調度品まで原形を留めていた。

2階へと続く階段の踊り場に持ち主であると思われる肖像画が飾られている。

「エルフ？」

「みたいだね。この城の前の持ち主だろうね」

肖像画を見つめ全員の驚きが周囲を満たす。

他の部屋も見て回ったが全ての部屋が原形を留めていた。

「掃除をすれば十分使えそうだね。人を雇って掃除から始めなきゃね」

「人を雇うにもお金をどうにかしないと……」

「そうだった…そこから考えなきゃね」

ロアンから準備金として5万エキューを受け取っていたが、ただ使っただけでは減る一方で収入を考えなければならぬ。

ロアンへの借金が18万エキューある、これを税収の1割を分割で治める。

国への税が2割、手元に残るのは2割の税収だけだ。

話しながら城の探索はほぼ終わり、残すは地下だけとなった。

幅1マイル程の階段を下りると頑丈な扉が姿を現す。

精霊による結界が張られており、大和の風で扉ごと切断了た。

「…なにこれ！」

「お宝じゃないのか？」

「すごい…」

部屋の広さは20畳ほど、そこに隙間なく宝石や金塊、高そうな装飾品や武具が飾られていた。

取り扱いに困った大和はロアンと相談する為、再度結界を張りなおし宝物庫をあとにした。

後日、ロアンに相談すると「大和が手に入れた古城にあったものだと所有権を大和のものとした。」

宝物庫から数点の金塊を処分し、ロアンへ18万エキューを返済し、名実ともに古城とホートスの村を含めた20アルバンの土地を所有する事になった。

この後2週間を古城で過ごし、ある程度の方針を固めロアンの所で文官をしていたフランとカイラに任せ、シャルロットと共に学院へ



帰ってきた。

新学期を明日に控えた午後、大和とシャルロット、セラは何時ものように広場の木陰で読書に励んでいた。

夏休みとはいえ、忙しく飛び回っていた為シャルロットを遊びに連れて行けなかったことを申し訳なく感じていた。

「あの城は大和の物でしょ？」

「ああ、そういう事になっちゃったね。元々タバサとタバサのお母さんを匿う為に手に入れたものだからタバサの物でもあるんだよ」

「…ん」

「もつと綺麗な城だったらよかったんだけどね…ちょっと古めかし  
いし」

「そんなことない、とても綺麗だった」

「そう？ まあタバサが気に入ってくれればそれで良いんだけどさ」

「…うん」

タバサは頬をピンクに染め笑顔で頷いた……………

「（ヤマトと私の『お城』…）」

小さく呟いた言葉に大和は気がつかなかった。

セリは気が付いていたようで呆れ顔であった。

第2章・9話：夏休みとドラゴン退治（後書き）

夏休み編第4弾です！

いい加減飽きたとか言われそうですが夏休み編はこれで終わりですので見捨てないでやってください><

そろそろネタが尽きてきましたがいかがでしたでしょうか？w

夏休みに色々詰め込まず小出しにすれば良かった…

今回もココまでのお付き合い感謝です^^

第2章・10話：男爵と子爵（前書き）

フーケでロングビルで…本名教えてくれないのよね…

優しい人間だと確信しているけど、まだ何か隠してる気がする。

早く信用される人間にならなきゃいけないのよね…

## 第2章・10話：男爵と子爵

22 / 男爵と子爵

オールド・オスマン。

トリステイン魔法学院の学院長であり、年齢100とも300とも言われている偉大なメイジである。

最近雇い入れた秘書のロングビルにセクハラをして折檻される姿を見ると“偉大なメイジ”には到底見えない…

「ミス・ロングビルや、ちょっとお尻を触っただけではないか。減るもんじゃなしそんなに怒る事ないじゃろう」

「減る減らないの問題ではありません！ 学院長ともあるう方が何を低俗なことをなさるんですか！」

「そんなに怒ると皺がふえるぞ？」

「だれが怒らせる事をなさったんですか！」

ロングビルが来てから毎日行われる風物詩となり果てている。

“コンコン”

おバカな騒ぎを一瞬で治め、真面目な口調で来訪者に要件を問う。

「1年のヤマト・クサナギ・ド・フォルテです。オールド・オスマ

ンに相談したい事があり伺いました」  
騒がしい学院長室から聞き覚えのある声が漏れていた。

オスマンの許可も貰い中へ入るとフーケが驚いた顔で見つめてくる。  
大和自身も十分驚いたが顔には出さず、重要な話があると伝え、  
フーケを外させた。

「重要な話とはなんだね？」

「私がシャルロットに協力している事はご存知ですよね？」

「ああ、なぜ君が協力しているのかは知らないが？」

「その話をしに来ました。それと協力していただきたい事があります」

大和はシャルルに召喚され、シャルロットに協力するようになった事。

召喚される前は別の世界で生活していた事。

自分が精霊術を使える事。

ロアンに協力してもらい今の身分を手に入れてこの学院へ入学した事。

ロアンが転生者である事以外は殆ど話した。

更に、精霊術を信用してもらったために無詠唱での術をいくつか披露した。

「……………精霊術まで見せられると信じるしかないではないか。  
して、協力してほしいというのはなんじゃ？」

「話した通り私は貴族の血をひいていません。ですので系統魔法などの授業で誤魔化しが効かなくなる場合を恐れているのです」

「うむ、風しか使えないという言い訳でも魔力を感知出来るメイジなら言い訳は難しいな。ん〜……この指輪を着けておきなさい。この指輪は本来足りない魔力を補う為に蓄えておく物じゃが、常に微量の魔力を放出しておるから派手な事をせん限りは授業も誤魔化せるじゃろうて」

「貴重な物でしょうに……お借りします」

「まあ、ロアン卿からの手紙も来ておったからの、これくらいは助力のうちに入らんよ。それにミス・タバサも君も大事な生徒じゃからの」

「ありがとうございます」

「ミス・タバサの事をよろしく頼むぞ」

日頃はセクハラなどで唯のエロジジイにしか見えないが、その根本には生徒思いの優しい人物だとオスマンのことを見直した。

「（なぜ、あの坊やがこんな所に……）」  
学院長室に訪ねてきた学生の顔を見て素の自分が出てしまいそうなほど驚いた。

ガリアで会った大和という青年だったのだ。

『土くれのフーケ』であることを知る相手なだけに、仕事に支障が出ないとも限らない。

あの時、警備隊に突き出さなかった大和であるから今すぐばれる可

能性は小さいと思われた。

(何にしても話をしておきたいね…人の寄り付かない場所…図書室がいいかね?)

大和宛に手紙を書き、メイドに大和の部屋へ届けるように言付けるとその足で図書室へと向かった。

「ミス・ロングビルでよかったかな？」  
予想していたよりも早く大和が現れた。

「なぜ、あんたがここにいる？ まさか貴族だったとは思わなかった」

ガリアでシャルロットの情報を探していた少年が貴族であるとは思ってもいなかった。  
それに、黒髪に黒目のトリスティン貴族など聞いた事もない。

「ヤマト・クサナギ・ド・フォルテってのが名前。それで此処へは仕事で来たのかい？」

「邪魔をする気？」  
暗に盗みの為に潜入している事を指摘され、前回は情報との交換で見逃されたことを思い出す。今回も見逃されるといふ保障は何処にもないのだ。

「いや、目の届かないところですからなら見逃すよ。ただ、何時まで続ける気だ？」

やっぱり変わった青年だ。貴族でありながら盗みに対する嫌悪感が薄いように感じる。

大和の言いたい事は理解できた、このまま盗みを続けていたらガリ



アの時のように捕まる時が遅からず来る。養う者が居なくなれば残された孤児やあの子が生きていけるとは思えない。

何時かは盗賊ではない真つ当な仕事でも探し、子供達との平穏な生活を夢見ていたのだ。

「…わかってるわ。でも、今はどうしようもないのよ」

「子供は何人いる？」

「さあ、戦災孤児だからね…10人までは知ってるけど最近戻ってないから、何人に増えてることが…」

「フォルテ領に来ないか？ 最近大きな城を手に入れてね細かい仕事なら幾らでもある。子供に出来る事をやってもらえれば、幾らでも生活する環境は提供できる」

「…あんだ、本当に貴族の坊ちゃんかい？ なぜそこまでしてくれる？」

なぜ、盗賊である私を助けようとしてくれるのか？

なぜ、自分から面倒ごとを背負い込もうとするのか？

貴族という人種を信用していない私からすると大和の言っていることが理解できなかつた。

「俺は妾の子でね、貴族とは無縁の生活してたのさ。貴族の立場を利用して自分のやりたい事をやってる。まあ〜義兄上もお人よしだからね、こんな俺を見捨てないでいてくれる。今すぐに答えを出す必要はないし強制をするつもりもない。俺を信用できると思ったら頼って欲しい」

目の前の青年が悪い人間には見えないが、孤児の他にあの子がいる。

普通の人間があの子を怖がらずに受け入れてくれるとは思えなかった。

だから、答えは保留し大和という人間を見てみようと思った。

「……………一応考えとく」

一言そう言って図書室を去った。

ここ暫くは平穏な日常が過ぎていった。

シャルロットの任務に付き添い、任務のないときは暇を見て自分のシエルファへ足を運ぶ。

シエルファとは大和が治めるようになった領地のことで、シャルロットの案で決まったものだ。

古城の名前もシエルファ城となった。

この間領地へと戻った際、隅々まで掃除が行き届き大和の部屋とシャルロットの部屋が隣り合わせて設けられている事に驚いた。

使用人の数も増え、それなりに大きな城だったため50人にも登った。

城に眠っていた財宝は半分ほど処分し、軍備や都市開発に使ったが領内に鉱山があり、少量ながら風石も掘れたためそれなりの収益が出ている。

ゴーレムが居た事で、猛獣や亜人も周辺には居らず今のところ平穏を保っている。

今後ゴーレムの脅威がなくなったことで亜人などが出没する事も考えられるが、今時点での平穏を求めて近隣の村からの移住者も少ない。驚く事にゲルマニアからの移住者も存在した。

初期の人口が約300人、現在では500人を超えたがまだまだ増えそうな勢いに街の規模拡大を始めている。

新たな街をシエルファ城近くに作るという計画が立ち上がったが城にはシャルロットを匿う予定なので、まずはホートスの街を発展させる事を優先させ先送りとした。その代わり、街と古城を結ぶ街道を広く平坦なものへと変えたのだった。

領地へはシャルロットも同行していた。

大和と連れ立って歩くと周囲の目が暖かいのが不思議だった。

ロアンの言い出した「将来大和の嫁」という格付けはフォルテ領からついてきた者だけしか知らなかったが、毎回大和がシャルロットを連れて来る事と、甘い雰囲気（周囲にはそうとれる）に許婚だという噂が広まっていた。

月の隠れる夜や雨の降る暗い夜には大和の部屋で一緒に寝ているのも原因の1つだった。

ただ、同じベッドで寝ているだけで男女の関係と言うよりも兄と妹という関係の方がシックリと来るのであったが…（セラも同じ部屋だし）

ウインの月ティワズの週虚無の曜日。

ロアンと大和はトリスタニアの王宮へと赴いていた。

通されたのは30人も入れれば一杯になりそうな謁見の間であった。小会議室程度の広さではあるが王座もあり、格式の高い作りであった。

「王后陛下並びに姫殿下御入来」と先触れと共に集まった全ての者が姿勢を正す。

ロアン、大和も含め全員が深く低頭し王家二人を謁見の間へと迎え

入れた。

王座の右にマリアン又王后、左にはアンリエッタ、先王の崩御以来トリスティンの王座は空位のままであった。ロアンへの受勲はマリアン又王后が行い、経験を積むという理由で大和の受勲はアンリエッタ姫が執り行うらしい。

庇護を求めてきた自治領の村5つを統合した功績により、ロアンは子爵へと取り立てられることになったのだった。

そして、自治領統合に大きく貢献し、ロアンの推薦と領地の暖簾分けをすると言う事で大和は男爵の位を受ける事になったのだった。裏ではかなりの金品が動いたが、今後シャルロットを匿う際にロアンへと責任が行くよりも大和もこの話を受けたのだった。

ロアンの受勲が終わり、大和の番となった。

進行役の貴族が献言を述べる。

「これなる臣ヤマト・クサナギ・ド・シエルファ、功著しく……」

長い献言に内心（何も功績の残るような事はしてないぞ？ あれか、お金か？）と決まりごとの文句である事は分かっていたが脱力感に見舞われていた。

（貴族社会って面倒くさいな…出来れば関わりたくなかった…）

進行役の貴族にアンリエッタの前へ来るように言われ、頭を下げる。

「我、トリスティン王が代理たる一子アンリエッタ、この者に祝福と貴族の資格を与えんとす。

汝、ヤマト・クサナギ・ド・シエルファ、始祖と我が国に、子々孫々変わらぬ忠誠を誓うか？」

アンリエッタが錫杖を大和の肩に当て良く澄んだ声で語りかける。

「誓います」

「よろしい。始祖ブリミルの御名において、汝を男爵に叙する。最後に右肩を2回、次に左肩を2回軽く叩かれ錫杖が大和の肩より離される。

続いて侍従からシエフィールド男爵家の紋章の入ったマントをアンリエッタが受け取り、大和の肩に纏わせる。

王家二人が退出したのち、進行役の貴族が去ると全ての儀式が終了となった。

「シエルファ殿、ルイズと仲良くして頂いてるようだが…学友としてだよな？」

ヴァリエール公爵が笑顔を称えながらも厳しい表情で声をかけてきた。

娘に悪い蟲がつかない様に遠まわしな？ 脅しだった。

「ええ、仲良くさせて頂いております。もちろん学友としてで、特別な感情はございません」

「ヴァリエール公爵様、大和には心に決めた相手がありますので心配はないと思います」

ロアンが大和の言葉を次いで語りかける。

「義兄上、その話は……………」

「そうか、うむ。これからもルイズと仲良くしてやってくれ」

ロアンの言葉に安心した表情を見せ、ヴァリエール公爵は大和から離れていった。

「（親ばかりだと聞いていたが…娘に彼氏ができたらどうなるのだろうな？）」

「（ルイズは可愛いですからね、気の強いところさえ治ればもてますよ）」

「（ヴァリエール公爵だけは怒らせるなよ？ 貴族の筆頭だからな）」

「（大丈夫です、ルイズは唯の友達ですよ）」

小声でロアンと会話し、全ての貴族が挨拶をして部屋を出て行くと最後に部屋を辞した。

受勲の夜はロアンと共に祝杯をあげ、翌日に学院へと戻ってきた。

現在トリステイン魔法学院は冬休み中であるが、2週間ほどの短い休みの為、殆どの学生は学院で過ごしている。

シャルロットの部屋を訪ねたが不在であった為、風で学院を探索するが見つけることが出来なかった。シャルロットと共に先に帰っているはずのセラも不在であった。

誰かシャルロットの居場所を知らないかと探していると、キュルケを見つけ話しかけた。

「キュルケ、タバサとセラを見なかった？」

「今日の朝、あの娘の部屋に行った時にはすでにいなかったわよ。」

セラも見えてないわ」

朝から見かけないということは昨日の夜から任務に出ている可能性がある。

（セラも付いていったかな？）

「ありがとう、少し探してみるよ」

キュルケと別れ自分の部屋へと戻り、机の上に小さな紙を見つけた。「チツ！ 最近気が弛んでたな… ついに俺もターゲットって訳か」紙にはタバサの字で『セラが攫われた、学院裏の森』と書かれていた。

風の精霊と意識を同調させたまま一気に裏の森へと飛び立った。

久しぶりに全力で風の精霊と意識を同調させたが、驚いたことに同調率が上がっていた。

搜索範囲が3リーグまで広がっていたのだ。現世でどんなに頑張っても遅々として精霊との同調率が上がらなかったのだ、それが一気に1.5倍まで上がったことを不思議に感じたが、考えるのを放棄してシャルロットとセラの気配を探す。

（いた！）

シャルロットの気配を感じ取り速度を上げる。

時速200リーグに届こうかという速さで目的地へと急降下する。

上空からシャルロットを確認すると、10数匹の様々なモンスターと戦闘中だった。

コボルト鬼、トール鬼、ワーウルフ、ロック鳥がジリジリとシャルロットを包囲していた。

（何で色々なモンスターが集まっているんだ？ ありえないだろ…）  
それぞれ種類の異なるモンスターが群れを組むことはありえない。

出会ったらモンスター同士で戦いになることが殆どであった。

「シャルロット！ 伏せる！」

声を張り上げ風の刃を近くにいた数匹に放つ。

「な！」

驚いたことに近くにいた5匹のうち2匹しか仕留める事が出来なかった。

残ったモンスターは先住魔法の障壁を展開しており、大和の放った風を防ぎきったのだ。

「どうなってるんだ？」

「わからない、私の魔法も効かなかった」

大和に言葉を返したシャルロットの表情には疲労が色濃く表れていた。

メイジが魔法を封じられると手の打ちようがないのは明白だった。

「シャルロット、怪我は？」

「大丈夫、それよりセラはあの洞窟」

シャルロットの指す方を見ると岩山に2メートルほどの穴が見えた。

確かに洞窟の中からセラの気配と異質な気配を感じ取れた。

(こいつ等のボス的存在がああ洞窟にいるってことか…操られている？)

洞窟内に感じる気配は精霊の力を強く感じた。

「シャルロットは少し休んでいてくれ。この後とんでもない奴が控



えてる」

シャルロットが頷くのを確認し、全ての敵に風の刃を放つ。

先住魔法の使えない敵がバタバタと絶命する中、6匹のモンスターが生き残る。

先住魔法が使えるということは言葉を理解できるほどに知能が高いはずであるが、生き残ったモンスターの目は知性を感じさせない暗い目をしていた。

何者かに操られているのではないかという考えが確信へと変わり始める。風での攻撃を繰り返しながら相手の動きを制限し観察を続けると、ロック鳥の首と額、ワーウルフの右手と額と首、トール鬼の右目、それぞれに1つずつの石が埋め込まれているように見えた。

（あれか…運が良いのは精霊を防御にしか使っていないってとこか）  
事実、守りに障壁を展開しているモンスター達は攻撃のために精霊を放つ事はなかった。

動きが取れない最小限の風を放ちつつ、精霊を召還し続ける。  
徐々に大和の周囲が青く輝きだした。

大和の周囲が霞むほどの精霊が集まり、一気に解き放った。  
モンスターの障壁が大和の風に拮抗するが、それは一瞬の事で障壁ごと身体を切り裂かれる。

精霊を切り裂くイメージとそれを成す事のできるほどの精霊を召還し使役する。

この2点さえクリアできれば精霊術にできない事はない。

どちらのイメージ、精霊を使役する力が上かで精霊術師の戦いは決まるのだ。

大和としては全力で放った攻撃であった。だが、思ったほどの疲れを感じていなかった。自分の限界が分からなくなった…現世でもこの世界でもこれほどの精霊を使役した事はなかったのに、それを成してなお限界ではないと感じた。

「すごい…」

大和が強い事は知っていたつもりだったが、ここまでとは思わなかった。

精霊術という先住魔法に近い力は脅威であるが、今まで大和が使っていた術は魔法で言うところのトライアングル（風×風×風）クラスの威力だった。それを戦いに特化した使い方で高い接近戦能力が大和の強さだと思っていた。

周囲に精霊術を悟らせない為に今まで抑えていたのは理解できる。それが、今目の前で見た戦い…というか殲滅戦はスクウェアレベルでも上位かそれ以上の力を大和が示したのだ。周囲の目を気にせず全力で戦ったら、伝説の虚無に対抗できるのでは？そう思ってしまうほどのインパクトがあった。

「シャルロット、大丈夫か？」

大和が振り返りシャルロットの傍へ近寄ってくる。

「ん…大丈夫。それよりセラを助けなきゃ」

これほどのモンスターを操っていた敵である。自分の力が役に立つかどうか…自信がなかった。

「出鱈目だな…あの方が重要視しているのが分かった…」

洞窟から黒いフードを被った長身の男が大和を見ていた。

「お前がこの騒ぎの主犯か、セラは無事だろうな？」

冷静な声音で大和が男に語りかけるが、周囲の空気が重くなるほどの殺気が大和から発せられていた。

これほどまで純粋な怒りを始めて大和から感じたシャルロットは身動きが出来なくなった。

「あの妖精なら無事だ。君の力を見せてもらったから、そろそろ御暇させてもらおうよ」

「俺が逃がすとしても？」

周囲に満ちた圧力が消え、男に殺到したことで周囲が重く感じたのは気のせいではなく大和の殺気に反応した風が満ちていたのだと理解できた。

「急がなくても、そのうち相手をしてあげるよ」

大和の放った風が見えない障壁に阻まれ、男はロープを翻し姿が消えた。

「セラ！ 怪我はないか？」

洞窟内で鳥かごのような物に入れられたセラを見つけ、大和とシャルロットが駆け寄る。

「ん…ふああ。あれ？ヤマトにシャルトット？ どうしたの？」

「……」

寝ぼけたセラに二人して声を失った。

話を聞くと、シャルロットと共に学院へと帰ったセラは夕食後シャルロットの部屋で寝ていたらしく、気がつけば現状に至るらしい……シャルロットは先に部屋へ帰ったセラが居らず、周囲を探しえいるとローブの男が大和に裏の森へ来るように伝えろと伝言を残し消えたとの事だった。

「まあ、無事でよかったよ。シャルロットもありがとう、セラを助けようとこんな所まで来てくれて」

「……ん、私にとってもセラは大切な友達」

シャルロットは顔を赤くしながら、セラの無事をよろこんだ。

「なんか良く分からないけど、二人ともありがとう」

セラも顔を赤く染めながら丁寧にお辞儀をし、大和の胸に飛び込んだ。

半分は照れなのだが、二人に心配されて心の底から嬉しさが込み上げたのだった。

「俺もガリア王に目を付けられたかな？」

ローブの男のいう『あの方』というのがジョセフとは限らないが今の時点で関わってきそうなのはガリア王ジョセフだろうと考えていた。

「巻き込んでしまつてごめんなさい……」

「シャルロットに巻き込まれた訳じゃないよ。」

シャルルに召喚された時点でガリアの事とは関係があった訳だからね、遅かれ早かれジョセフには目を付けられたはずさ」

「でも……」

「言つたる？ 俺はシャルロットを守る…だけじゃなく皆で楽しく  
生きたいだけなんだ」

守るといふ所で言葉を切るとシャルロットが切なそうに見上げて来  
たため言葉を足した。

「シャルロットが楽しく生きるために戦わなければならないのなら  
俺を頼つてほしい。

戦うくらいしか手伝えることがないからね…そういう生き方しかし  
てこなかったから……」

現世での大和は大事な人を守ることが出来なかった。

だからこそ、この世界で見つけた大事な人たちを失いたくなかつた  
のだ。

「ん…ありがとう」

顔を赤く染めて俯いてしまったシャルロットの言葉は少し震えてい  
た。

## 第2章・10話：男爵と子爵（後書き）

3日も開いてしまった…

楽しみに待って頂いてる読者様には大変申し訳なく思っております。

今朝起きたら風邪気味で…言い訳です…ハイ

原作には夏休み以外の長期休暇の記載を見つける事が出来なかったのですが、冬休みがあってもいいんじゃないかね？ってことで勝手に入れちゃいました…

次回からやつと原作へと突入する予定です！

前置きが長くなってしまいすみません><

出番の少なかった原作キャラから文句が出そうなw

ここまで読んで頂いて感謝です^^

7/26 誤字・脱字修正

大和 シェフィールドをシエルファに変更

第2章・11話：召喚試験と初めてのお使い（前書き）

お仲間が来たのは喜んでいいのかどうか…

ある意味ルイズの才能はシャルル並なのか？

非常にきょうみがあるな…

## 第2章・11話：召喚試験と初めてのお使い

23、召喚試験と初めてのお使い

フェリオの月ヘイムダルの週マンの曜日。  
入学式の終わった午後、2年生へと上がるための試験が行われていた。

魔法学院の名に相応しく、使い魔を召喚するというものであった。  
過去に使い魔を召喚出来ず留年したという生徒はなく、形式的な意味合いが強い。

大和は入学前に召喚してしまったという理由で試験は免除されていた。

ロアン、オスマンのお陰で誰も疑うことなく受け入れられていた。

「我が名はタバサ。

五つの力を司るペンタゴン。

私の運命に従いし使い魔を召還せよ」

サモン・サーヴァントを行うには自分の素姓を使い魔に明かす必要がある。

しかし、シャルロットの場合、周囲に人の居る現状では偽名の『タバサ』で呼び出さなければならなかった。

この件に関して昨晚、シャルロットから相談を受けた大和であったが、本名でサモン・サーヴァントを行うわけにもいかず、ただ勇気づけることしかできなかった。



「……おお！」「……」  
シャルロットの前に現れた鏡から6メートルもあるつかという竜が姿を現すと周囲の生徒達から驚きの声があがった。

「我が名はタバサ。」

五つの力を司るペンタゴン。

この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

見かけは平然としているシャルロットではあったが、見る者が見れば喜びを湛えた表情だとわかった。

竜に口づけをし、コントラクト・サーヴァントが終わる。

「ミス・タバサ、おめでとう。素晴らしい風竜だ」

試験管として付いていたコルベルが風竜を見上げ感嘆の声を漏らす。

次々に生徒達が使い魔を召喚していく中、最後にルイズが挑戦を行った。

召喚に成功したルイズは召喚した相手を凝視し驚いた表情を浮かべる。

周囲に居る生徒は勿論であるが誰よりも驚いたのは大和だった。

「あんた誰？」

「誰って……。俺は平賀才人」

「どこの平民？」

周囲の生徒がルイズを馬鹿にしているが、大和はそれどころではな

かった。

黒髪、黒目のどう見ても日本人にしか見えない平賀才人<sup>ひらがさいと</sup>という少年に見入ってしまった。大和がこの世界に召喚されたのだからこういう事もあり得ると思っていたが、自分の知り合いが、同じ世界の人間を召喚するとは思ってもみなかった。

ルイズがコルベールにサモン・サーヴァントのやり直しを要求したが却下され、コントラクト・サーヴァントを終わらせた。

「ヤマト、あの人って…」

「ああ、多分俺と同じだ」

シャルロットも才人の登場に驚き大和に確認をする。

「ヤマト」

「セラ遅いじゃないか、何してたんだ？」

「女の子は準備に時間がかかるのよ 今日を使い魔召喚の儀式があるんだから、お仲間が来るかもしれないじゃない……って、イルククウ？」

「セーぐあ！ ぐああああああ！」

才人が急に苦しみだし左手にルーンが刻まれて行く。

（危なくシャルルにキスされるところだったのか…それにルーン…知性のないモンスターまで使役出来ると言う事は呪いに近くないか？）

自分にも起こりえた事態に薄ら寒くなったが、それ以上にセラが風

竜のことをイクルルウと呼び、そのイクルルウが人語を話した事に驚いた。運よく才人の大声と被りシャルロット、大和、セラ以外には聞こえなかったようだ。

「今…しゃべった？」

「…多分韻竜、ばれたら面倒」

韻竜は、竜の上位種族とも言える幻獣である。外観は普通の竜と大差ないが、人語を解し、高い知能を誇る。更には先住魔法とさえも行使するという伝説にしか登場しないような竜なのだ。あまりにも人の前に姿を現さない為に、絶滅したものと思われていたのだろう。

「イクククウ私と大和以外の人間の前では喋ってはだめ」

「きゅい〜」

イクククウは、ひと鳴きし理解を示すように頷いた。

召喚の儀式も終わり生徒達は教室へと戻り始めるがルイズと才人は大声で漫才をしていた。

その会話の中に『東京』『日本』という単語を聞き自分と同郷だと確信する。

自分の名前を聞かれるとばれないまでも怪しまれるのは明白な為、ルイズのいない所で話をした方が良かったろうと考え話しかけずに教室へと戻った。

その日の夜、何時も訓練している広場に大和、シャルロット、セラ、イクククウが集まっていた。

集落で安穩と一生を終える事を良しとしない二人は度々集落を抜け出し出会ったのがきっかけで友人となった…要はお転婆なのだろう。セラとイクククウの話で大まかな関係が分かった。

大和がセラと会った時に『イルククウ』という単語が出て来たのを思い出す。

「セラはヤマトに召喚されたのね？」

「違うわ、召喚されたんじゃないじゃなくてヤマトと一緒に旅をしていたの。そして、シャルロットを守るために学院に入学したのよ」

「俺はメイジじゃないんだよ。先住魔法が使える人間ってどこかな？そんなのが周囲に知れたら面倒なことになるからセラには使い魔のふりをして貰ってるんだ」

イルククウの疑問にセラとヤマトが答える。先住魔法が使える人間という言葉にイルククウが反応した。

「それで精霊の力を強く感じたのね……」

イルククウの質問に答えるという形式で1時間ほど会話をするが、その間シャルロットは相槌を打つ程度しか言葉を発しなかった。イルククウという韻竜は竜族の中では若い雌……というより若い部類に入る。人間と会話したのは今回が初めてであり人間社会の常識などは皆無であった。

「じゃあこのちびすけはガリアの王族なのね？　なんか信じられないのね……」

イルククウはシャルロットのような幼い少女（見た目年齢12・3歳）が自分のような幻獣の中でもトップクラスの韻竜を召喚したことを不満に思っていた。大和がシャルロットがどれだけ凄いメイジか説明するが納得していなかった。

「ちびすけじゃない、タバサ」

「あー、シャルロットがガリアの王族なのは皆に内緒だから、普段は『タバサ』って名前で通してるんだ」  
シャルロットの言葉に大和が説明を足す。

「どうでもいいのね、ちびすけはちびすけなのね」  
終始この調子でシャルロットのことを軽く見ているイクルルウだった。

（まあそのうちシャルロットの凄さがわかるだろ…）  
シャルロットの実力さえ目の当たりにすれば問題はないと軽く考えていた。

大和の考えていた通り次の日にはシャルロットの実力をすぐに知る事になった。

翌日朝食の為に集まった生徒の中に才人もいた。

才人は地べたに座り、質素な食事を摂っており、同郷の少年が不憫でならなかった。

ルイズは元来根の優しい人間であるがそれ以上にプライドが人一倍高いのが難点である。

上手くプライドを傷つけないように対応すれば才人のような目に合わないのだが…

社会にも出ていない高校生が上下関係を正しく理解できる事はなかった。

（いきなり呼び出されて自分は平民で相手が貴族つてのも受け入れられないよな…

早いとこ才人と話してこの世界の生き方を教えた方が良さそうだな）

朝食も終わり教室へと移動する。

教室へも入れる大きさの使い魔は主人と一緒に教室内へ入っていた。大和とシャルロット、キュルケが並んで座り、そのひとつ前にルイズと才人が座っていた。

「キュルケのサラマンダーって尻尾が燃えてないか？」

「火がでてるけど他に燃え移ったりしないわよ。火傷することもないし」

「本当だ、熱くはないな…暖かい程度だ」

キュルケに説明を受けながらサラマンダーの尻尾の先を触ってみる。単純な火じゃなくて、精霊が宿ってる為燃やそうと思わなければ燃えないのだ。

「このサラマンダーの名前は『フレイム』だから、可愛いでしょ？」

「ああ、良い名前だ。よろしくなフレイム」

話をしているうちに教師が入ってきた。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。このシュバルズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

一人だけ俯くルイズを見咎めシュバルズが声をかける。

「おやおや。変わった使い魔を召喚したんですね。ミス・ヴァリエール」

人間を召喚するという偉業を讃えてなのか…馬鹿にした素振りはなかった。

しかし、周囲の生徒達は馬鹿にしたとらえたようでどっと笑いに

包まれた。

「ゼロのルイズ！ 召喚できないからって、その辺歩いてた平民を連れてくるなよ！」

ルイズは立ち上がり長いピンクブロンドの髪を揺らして、可愛らしく澄んだ声で怒鳴り返した。

「違うわ！ きちんと召喚したもの！ こいつが来ちゃっただけよ！」

「嘘つくな！ 『サモン・サーヴァント』ができなかったんだろう？」

ゲラゲラと教室中の生徒が笑うなか、大和が口を開いた。

「はあ、ミスタ・グランドプレ。気になる娘に意地悪するのは子供のすることだと思うが？ ギーシュに女性との接し方を習ったらどうだ？ 第一コモンマジックに関しては誰より上手く使えるルイズが『サモン・サーヴァント』を失敗する訳がないだろう。それに召喚された使い魔でなければコントラクト・サーヴァントでルーンが刻まれる訳がない」

「クツ！ そんな事はない！」

大和に指摘され口ごもる。

「大体、僕のクヴァーシルに比べれば平民なんて大したことはない！」

クヴァーシルと言う名のフクロウがマリコルヌの肩でひと鳴きする。

「使い魔のランクをどうこう言うなら、タバサの風竜やキュルケのサラマンダーからすると、フクロウってどうなんだ？」

「チツ！」

幻獣と比べられマリコル又は悔しそうに舌打ちし黙り込んだ。

「はいはい、そこまでよ。ミスタ・マリコル又、ミスタ・シエルフア。お友達ことを悪く言うものではないわ。それに使い魔にランクなんて関係ないですよ」

教師の女性が手を叩きながら双方の言い争いを止める。

「それにしても、ミスタ・シエルフアがこんな事に割って入るなんて珍しいですわね」

「いえ、友人とその使い魔を馬鹿にされたもので、ついカツとなっ  
てしまいました。申し訳ありませんでした」

普段から目立たない様に気を付けていた大和が人の言い争いに参加するような事はなかった。

ルイズの事もあるが、同郷である才人が馬鹿にされるのはなぜか不快な感情が湧き起こったのだ。

(自制心が足りないな…自分に言われてるような気がした…)

「いえ、貴方の言った事に間違いはありませんでした。他の方も今後使い魔を差別するような発言は控えるように！」

そう締めくくり、授業の準備を始めた。

「(ありがとう…)」

小さな声でルイズがお礼を述べる。

「(気にするな)」と返し正面に向き直る。

「では、授業を始めますよ」

壇上で杖を振り、石ころを幾つか出現させた。

「私の二つ名は『赤土』。赤土のシュヴルーズです。『土』系統の



魔法を、これから1年、皆さんに講義します。魔法の四大系統はご存じですね？ ミスタ・マルコリヌ」

「は、はい。ミセス・シュヴルーズ。『火』『水』『土』『風』の四つです！」

「正解です。この四つに今は失われた系統の『虚無』を合わせて、全部で五つの系統があることは、皆さんも知つての通りです。この五つの系統の中で『土』は最も重要なポジションを……………」  
言つてゐることはごもっともであるが、自分の系統が一番優れていると暗に自慢しているように聞こえた。

『土』の系統が物を生み出す重要な魔法であるのは間違いないが、この『土』の系統があるせいで科学技術の進歩が遅れているのも事実だった。

「ミス・ヴァリエール！」

「は、はい！」

「授業中の私語は慎みなさい」

「すみません……………」

「おしゃべりをする暇があるのなら、あなたにやつてもらいましょ  
う」

「え？ わたし？」

「そうです。ここにある石ころを、望む金属に変えてもらいなさい」

「……………」  
才人と話をしていたルイズはシュヴルーズに注意され、連金の実演をすることになった。

「先生！やめといた方がいいと思いますけど……………」

「どうしてですか？」

「危険です」

キュルケが、きつぱりとそう言いきると、教室のほとんどの生徒が全員頷いた。もちろん大和も…

「危険？ どうしてですか？」

二年生の講義を担当しているシュヴルーズにはキュルケの言っている意味が正しく理解できていなかった。

「彼女が努力家で大変真面目だと聞いています。失敗を恐れているは何もできません。さあ、ミス・ヴァリエールやってみなさい」

「ルイズ。やめて」

キュルケが蒼白な顔で言った。周囲の生徒も顔が蒼白になっていた。

「…やります！」

緊張した足取りで教壇へと歩いて行くルイズ。

「才人君、こっちへ来て隠れる」

「ん？ なんで隠れる必要があるんだ？」

「いいから、怪我をしたくなかったら俺の後ろに隠れる」

理解は出来ないが大和が強く言い放った為、スゴスゴと言われた通

りに大和の後ろへと下がった。

周囲を見ると生徒全員が机の下へと避難していた。シャルロット、キュルケ、才人の三人は大和の周囲に集まりルイズを凝視している。

ルイズが短くルーンを唱え、杖を振りおろすと小さな石ころは爆発した。

爆心地に近かったルイズとシュヴルーズは黒板に叩きつけられた。爆発に驚いた使い魔達が暴れだし、教室は阿鼻叫喚の修羅場と化した。

唯一無事だったのは大和を中心とした半径2マイルの場所だけだった。

風の障壁を張り爆風を防いだのだった。

「だから言ったのよ！ ルイズにやらせたら何時もこうなんだから！」

「もう、ヴァリエールは退学にしてくれよ！」

「俺のラッキーが蛇に食われた！ ラッキーが！」

「ちよつと失敗したみたいね」

煤で真っ黒になったルイズが、むくりと立ち上がり冷静に、淡々とした声で言っただけだ。

「ちよつとじゃないだろ！ ゼロのルイズ！」

「コモンマジックが使えたって、系統は何も使えないゼロじゃないかよ！」

当然のように周囲の生徒から反撃がきた。

爆発をすぐ近くで受けたシュヴルーズは気を失っていたため、大和が抱えて救護室へと運んだ。

昼食を終えた大和はシャルロットと共に使い魔達の集まる広場へと来ていた。

シャルロットがイルククウを早く人間社会に馴染ませる為、お使いに出すと言いだしたのだった。

どうやって竜をお使いに行かせるのか問うと、韻竜は人間の姿に化けることが出来るということだった。

イクルルウだけでは心配な為、セラも一緒に行かせることにした。

「これで、『精霊全書』っていう本を買ってきて」

シャルロットはそういうと1エキュールククウに渡す。

「なんで、私がそんな事をしなきゃいけないのね!」

「使い魔だから…言う事聞かないと御飯抜き」

「きゅいきゅい! 覚えてなさいよ!」

そんな棄て台詞を吐いてセラと共に飛び立った。

「なんで私がこんなことしなくちゃいけないのね」

「街にお使いって楽しいわよ? 私も人間に化けられたら喜んでお使いに来るけどなあ」

人間に化けたイルククウは学院のメイド服を着て街へと足を踏み入れた。

不機嫌なイルククウとは対照的にニコニコ顔のセラが何時ものように露店を冷やかしていた。

「セラはなんで人間なんかの使い魔のふりしてるのね?」

「人間じゃなくてヤマトだから一緒に居るのよ。ヤマトは優しいし、強いよ。私の村も救ってくれたの」

「あのヤマトって人なんで風の精霊に好かれてるのね？」

「なんでも精霊術師の家系に生まれたからって言ってたよ」

「それだけであんなに精霊に好かれるものなのね？」

途中大道芸を見学したりと、初めて見るものに心奪われながら本屋へと足を向ける。

最初の怒りも消え、ウキウキと周囲を散策していた。

露店から漂う美味しそうな匂いに釣られてイルククウがフラフラと近づいていく。

「この食べ物欲しいのね」

「さつき教えたでしょ？ シャルロットから貰ったお金は本の代金だから使っちゃいけないの！」

道すがらセラはイルククウに買い物に関する知識を教えていた。

「でも、お腹空いたのね！」

「…仕方がないわね、私が奢ってあげるわよ」

イルククウについて買い物へと来る事になったセラは大和からお小遣いを貰っていた。

初めて来た人間の街に時間も忘れて飛び回った結果、薄暗い路地へと迷い込んでいた。

「この地図役に立たないのね！ 分かりにくいのね」

はしゃぎすぎて自分の居る場所が分からなくなった結果、地図は役に立たなくなってしまうた。

「一人でどんどん進んじやうから…」

そうは言ったセラだったが、自分も目的を忘れて楽しんでいた為強く言えなかった。

「お嬢さん、道に迷ったのですか？」

紳士然とした男が声をかけて来た。

「そうなのね、本屋に行きたいのね」

「そうですか、宜しければご案内しますよ」

「ありがとうなのね」

男は気付かれないように口を歪め、路地を奥へと歩いて行く。

「まだ、つかないのね？」

20分ほど路地を進みいい加減疲れたイルククウは男に問いかけた。

「着きましたよ。オイ！」

男が大声を上げると複数の影がイルククウを囲んだ。

「なんなのね？ 本屋はどこなのね？」

「のこのこ着いて来たのを悔みな」

「なっ！ だましたのね！」

周囲の男達が一斉に飛びかかりイルククウを取り押さえようとするが、元が竜族であるイルククウの力に勝てるわけもなく逆に吹き飛ばされた。

「チツ！　なんて馬鹿力なんだ！　姉御くたのんます」  
ここまで案内してきた男が焦って叫んだ。

「なさけないねえ。女ひとり捕まえられないのかい」  
そう言つて現れた女は短く詠唱し杖を振るつた。すると、縄がイルククウを縛り付けた。

「なんなのね！　解けないのね！」  
いくら力を込めようと縄は切れる事がなかった。竜の姿に戻ろうとしたがそれも無理であつた。

「その縄は魔法で編んであるから簡単には切れないし解けないわ」  
薄く笑いを浮かべた女がそう言い放つた。

「イルククウ！　まってて、大和に知らせてくる！」  
イルククウが捕まり、セラでは対処のしようがない為、助けを呼ぶ為に空へと舞い上がった。

「チツ！　使い魔が逃げたじゃないか！　早くずらからないと面倒なことになる」

男達は暴れるイルククウを鉄格子のついた馬車に押入れ、逃げる準備を始めた。

馬車の中には同じように縛られた年若い娘が何人も捕まっていた。すすり泣く少女達に事情を聴き、自分が攫われたことをようやく理解し、攫つた相手にではなく、自分を使いに出した主人を怨むのだ

つ  
た。



第2章・11話：召喚試験と初めてのお使い（後書き）

風邪より復帰しました><

完治とまではいきませんが熱が下がったので随分と楽になったです。

遂に原作へと突入しました！

…が、いきなり続きものになってしまい申し訳ありません。  
原作をなるべく壊さずに大和を絡めていくのが難しい…

大まかには原作に沿って進みますが、多少変わるかと思しますので、  
そこら辺はご了承下さい。

皆様もお体には十分お気を付け下さい。

7 / 29 イクルルウ × イルククウ

第2章・12話：決闘と訓練（前書き）

今日の俺って大人げないな…

才人の熱血がうつったんだろうか？

俺以上に大人げない奴は沢山いるから気にしないでおくか…

## 第2章 - 12話：決闘と訓練

### 24、決闘と訓練

イルククウとセラを見送った後、大和は一度、寮の自室へと戻り再び広場へと足を向けていた。

廊下の角をまがった先に黒髪の少年の姿が目にとまった。前屈みでフラフラした足取りで今にも倒れそうに見える。

「才人君だったかな？　どうかしたのかい？」

「ああ、あんたか…ルイズに昼飯を抜かれた…」  
空腹による覇気のなさが痛々しく映る。

なんでも、『ゼロ』という二つ名についてルイズを馬鹿にした為、食事を抜かれたということだった。

「…自業自得っていうんじゃないのか？」

「…だってさ、ルイズのやつ俺の事を平民だの態度が悪いだの散々な扱いしやがったから…」

プライドの高いルイズの事、自分の召喚した使い魔が『平民』だったことが不愉快なのだろう。

「才人君、少し話をしないか？」

「…なんでさ？　ところであんたの名前なんていうんだ？」

「ああすまない。ヤマト・クサナギ・ド・シエルファ。ルイズと同じクラスだ」

「ヤマトクサナギ???」

「君が思っている通りだと思う。その辺の事に付いて話をしたいと思ってる」

大和の名前を聞いて興味を持った才人は大人しく後をついて移動した。

屋上へと移動し、向かい合って話を始めた。

「改めて名乗ろう。俺の名前は草薙大和。日本人だ」

「俺と同じ境遇なのか？」

「ああ、今から2年ほど前にこっちの世界に召喚された」

大和は召喚されてからロアンと出会い今の境遇にある事を大まかに話した。

ロアンが転生者である事やシャルロットの事は話さなかった。

「じゃあ草薙さんは精霊術っていう魔法を使えるっていうのか？俺の知ってる東京にそんな奴はいなかったぞ？」

「どんな世界でも『光と影』が存在するんだ。勿論『影』である俺達精霊術師は『光』である才人君達一般社会の人たちには気付かない様に隠してきたからね」

「そうは言っても、いまいち信じられない……」

「才人君は平成何年からきた？」

「才人でいいよ。平成16年に秋葉原からの帰りにこっちへ飛ばされた」

「俺の事は大和と呼んでくれ。俺が平成14年の時にこっちへ来たから時間軸はあつてるのかな？それだと、東京のビル倒壊の二ユースは知ってるか？」

「ああ、なんでもガス爆発だが、テロだか良く分からない事故だったよな？」

「あのビルは俺の家と対立してた家の隠れ家だったから壊したんだ」

「…はあ？ どうやって？ 爆弾でもつけたのか？」

「いや、こうやってね」

才人の目の前で竜巻が巻き起こる。  
数秒で消え去るが竜巻を目の当たりにした才人は腰を抜かすほど吃驚していた。

「まあ今の竜巻を10人で出現させればビルなんてあっという間だ」

「なんか、俺の常識が崩れて行くな…」

大和の行った事を全て信じたわけでもないだろうが、この世界での常識などがある程度大人しく聞いていた。

“ぐううう”

才人のお腹の虫が盛大になきだした。

「ああ、すまない。そう言えば食事を抜かれたんだっとな。  
…多分大丈夫だろう…行こうか才人」

才人を連れて厨房の裏口へと向かう。

「才人、俺の事は内緒にしておいてくれ。ばれると面倒だから」

「わかった。飯さえ食わしてくれば何でも言う事を聞いてやる」  
「どんな苦痛より空腹には叶わず、今の才人に食べ物を与えれば何でも従うだろう。」

「シエスタ、賄いでも何でも良いから余ってる食事があつたら頂きたいのだが、マルトーさんに聞いてもらえないか？」  
厨房の裏口にいたシエスタへと声をかける。

「ヤマト様、食事でしたら食堂から声をかけていただければすぐお出ししますか？」

「いや、俺が食べるんじゃない、才人が食事を貰い損ねてね」  
少し後ろで様子をうかがっていた才人がシエスタへと頭を下げる。

「俺は平賀 才人。ルイズに食事を抜かれちゃって…」  
何処までも東京の若者らしい才人は初対面でも敬語は使わないらしい。

「ああ…ミス・ヴァリエールが召喚したっていう平民の方ですね。  
わかりました、少し待っていてください」  
そう言うと、シエスタは厨房へと消えて行った。

暫くすると手招きで厨房の控室へと通され、椅子を勧められる。才人の前にシチューとパンが出されると我を忘れたように食事に没頭

した。

「すまないな、シエスタ。マルトーさんにもお礼を言っておいてくれ」

「いえ、お気になさらないで下さい。このくらいの事でしたら何時でも行つて下さい」

「フゴフゴ…ゴホツ」

お礼を言おうとした才人がパンを喉に詰め、シエスタの差し出した水を一気に啣り呑みこむ。

「はあはあ、ありがとう大和、シエスタ」

「フフ、急いで食べなくても御代りならまだありますよ」

笑顔で声をかけるシエスタに才人は涙を流しながらなんどもお礼を言っていた。

「じゃあ俺は行くから。またな才人、シエスタ」

談笑する才人とシエスタに声をかけて厨房を後にする。

「大和つてよくここに来るの？」

「そんなにはお越しになりませんよ。貴族の方で私達平民に優しく接してくれるのはヤマト様と、無口だけど変な眼で見ないタバサ様くらいです。学院の平民全員がお二人を慕ってます」

「へえ、他の貴族は平民つてだけで下に見やがるからなあ…大和はともかく、タバサつて人に会つてみたいな」

大和は才人と同じ世界から来た人間であるから貴族や平民と言つた

格差を気にする事はないのは解るが、タバサという貴族が平民に対して偏見を持っていないと言う事に興味がわいた。

「ヤマト様とタバサ様は一緒に居る事が多いので、恋人なんじゃないかという噂がありますよ」

少し残念そうに呟くシエスタを見て才人は何となく大和に怒りを覚えた。

「…大和って…」

大和とシャルロットの恋人説が学院中の噂になっている事を当人達だけが知らずにいた…

広場に戻ってきた大和はシャルロットと合流し、才人のことを話していた。

「って感じで、才人はやっぱり俺と同郷の人間だったよ。ただ、普通の人間で精霊術なんかの存在は知らなかった」

「そう。じゃあサイトは平民なのね？」

「ああ、ただし向こうの世界に平民とか貴族とかの括りがないから本人に平民という自覚は無いよ」

ただ、何の力もない普通の少年が召喚されるとするのは納得がいかなかった。

「ミスタ・シエルファ。学院長がお呼びです」

オスマンの秘書であるロングビルが近付いてきた。

「何の用だろ？」



「さあ、私は呼んでくるように言われただけですから」

シャルロットに「行ってくる」と声をかけロングビルと共に学院長室へと向かった。

学院長室へ入るとロングビルを退室させ、一つの小包を渡された。

「フォルテ卿から君へ届けられたものじゃ」

箱を開けるとBeretta M92FSと弾がマガジンごと20ほど、後手紙が入っていた。

手紙には銃の解析は終わった為大和へ返すと言う事と、試作で作った弾を使ってくれと言う事が書いてあった。試作で作られた弾は火薬の性能的に有効射程距離が多少下がっていると言う事だった。最大で16発の連射が出来る事を考えると、この世界では途轍もない代物ではあるが…

大和は召喚される際に2丁のM92FSを持っていたが、弾が残り2発しかなく使う事がなかったのだ。ロアンに弾を如何にかできないかと相談したところ時間はかかったが今回試作品が出来、送ってきたのだった。

手紙を呼んでいる間、オスマンが興味深そうに大和の銃を見ていた。

「こんなに小さな銃で役に立つのかの？」

「ええ、此方の世界にあるどの銃よりも高性能ですよ。私の居た世界でも一番使われていた銃ですから」

Beretta M92FSと言う銃はアメリカ軍制式であり、M9という名前で呼ばれる事が多い（以後M9）世界的にも信頼され

ている使いやすい自動拳銃である。

説明したところで理解できるとも思えず、連射できる銃と言う事で納得してもらった。

オスマンと話しこんでいると、来客を告げるノックが響いた。

「オールド・オスマン。大事なお話があります」

大和の要件も済み、コルベールが来た事で断りを入れて退室した。

学院長室からシャルロットの所へ向かう途中、ロングビルが慌てて走ってくるのが見えた。

「ミス・ロングビル。そんなに慌ててどうされたのですか？」

「ヴェストリの広場で決闘騒ぎが起きてるの」

「決闘騒ぎって、誰と誰が？」

「ミスタ・グラモンとミスヴァリエールの使い魔です」

ロングビルの話を聞いた大和は断りを入れてすぐに広場へと向かった。

ギーシュのことだ、大方女性絡みだろう。才人はその場で巻き込まれた結果余計な事を言ったのではないかと当たりを付ける。メイジ相手になんの力もない高校生が太刀打ちできるとは思えない。最悪怪我だけでは済まされないかもしれないのだ。

広場に着くと、学院のほぼすべての生徒が集まっているのではないかと思えるほどの人垣が出来ていた。

その中からシャルロットを見つけ声をかける。

「タバサ、どうなってんだ？」

「理由は解らない。今あの使い魔がボロボロに負けてる」

シャルロットが騒ぎを聞きつけ広場に來た時には既に決闘が始まっていたらしい。

ギーシュが青銅で作った1体の女性型ゴーレムで才人を殴り倒した直後のようだった。

口や頭から血を流しながらも才人は何度も立ち上がりギーシュへと向かっていく。

「寝てなさいよ！ バカ！ どうして立つのよ！」  
ルイズが目には涙をため才人の肩を掴み叫ぶ。

「ムカつくから」  
才人はルイズの手を振りほどきよろよろと数歩前進した。

「ムカつく？ メイジに負けたって恥でもなんでもないのよ！」

「うるせえ」

「え？」

「いい加減、ムカつくんだよね……。メイジだか貴族だか知んねえけどよ。お前ら揃いも揃って威張りやがって。魔法がそんなに偉いのかよ。アホが」

ギーシュが薄く笑みを浮かべながらそんな才人の様子を見ている。  
「やるだけ無駄だと思っがね」

「全然効いてねえよ。お前の銅像弱過ぎ」

ギーシュの顔から笑みが消えた。ゴーレムの右手が飛んで才人の顔を襲う。モロに頬に食ら………わなかつた。

「ギーシュ、貴族様は魔法も使えない相手に武器も与えず戦って決闘と呼ぶのか？」

才人を襲ったゴーレムは大和が振るった刀により真つ二つになっていた。何時も飄々とした態度の大和が明らかな怒りをギーシュに対して向けていた。

「な、なな何で大和がそんなに怒ってるんだ？」

怯えた様子でギーシュが金切り声をあげる。

「友人を決闘と称して傷めつけられたら普通怒るんじゃないか？」

「大和、有り難いが…余計な事はするな」

真つ直ぐに見つめてくる才人の目には覇気が表れていた。

「…フツ、君はかなりの頑固者だね。右手と肋骨は折れてるだろう。勝てる見込みはあるのか？」

「そんなもんはねえ。勝てる戦いしかない貴族になんか負けてやんねえ」

「お願い。もうやめて」

そう言ったルイズの声は震えていた。

「……泣いてるのか？ お前」

「泣いてないわよ。誰がなくもんですか。もういいじゃない。あん

たはよくやったわ。こんな平民、見たことないわよ。大和も才人を止めて！」

「ルイズ。ここで止めたら才人は今後一切戦えなくなる……」  
才人の意地やプライドなどこの世界へ召喚されてから随分と傷つけられていた。ここで何も出来ずに負けてしまうと、才人はこの世界で自分らしく生きて行く事はできなくなるだろう。

「そんな！ 死んでしまつたらどうしようもないじゃない！」

「誰が死ぬんだよ……勝手に殺すな」

痛みを堪えた言葉は途切れ途切れであつたが、力は失っていないかつた。

「ギーシュ！ 魔法も使えない、武器もない平民をいたぶつて楽しいか？」

「……まだ、向かってくると言つのならこの剣をとりたまえ」

ギーシュが連金で作り出した青銅の剣が才人の目の前の地面に突き刺さる。

「だめ！ 絶対にだめなんだから！ それを握つたら、ギーシュは容赦しないわ！」

「俺は元の世界にや、帰れねえ。ここで暮らすしかないんだろ」  
才人は独り言を呟くように、言った。その目はルイズをみていない。

「そうよ。それがどうしたの！ 今は関係ないじゃない！」

「使い魔でいい。寝るのは床でもいい。飯はまずくたっていい。下

着だつて、洗つてやるよ。生きるためだ。しょうがねえ」  
才人はそこで言葉を切つた後、左の拳を握りしめた。

「でも……」

「でも、何よ……」

「下げたくない頭は、下げられねえ」

才人はルイズを振り切り左手で剣を握つた。才人の左手に刻まれたルーン文字が、光りだした。

何が起こっているのか解らなかつた。

才人の左手のルーンが光りだしたと思つたら、大和でも注意して見なければ見逃してしまふほどの剣速で

ギーシュのワルキューレを7体破壊してしまったのだ。

（あんな速さで動けるような筋肉はついていなかった……いったい何が起こつたんだ？）

集まつた生徒全員が啞然とする中、才人はギーシュの右横の地面に剣を突き立てていた。

「続けるか？」

「ま、参つた」

ギーシュの敗北宣言により決闘が終わつた。

集まつた生徒たちからは「あの平民やるじゃないか」「ギーシュが弱いだけだろ」と言つた声が聞こえた。

大和が我にかえる前にルイズが才人へと駆け寄つて言った。

ルイズが駆け寄つた直後に才人が倒れこむ。ルイズは支えようとす

るが、才人を支える事は出来なかった。

倒れこむ寸前に大和が駆け寄り、ルイズと才人をまとめて支えた。

「サイト！」

倒れこんだまま動かない才人は、しかし寝ているだけであつた。

「ぐー……」

「…なんか、凄いな。才人」

これだけの怪我をしながら勝つて、ただ寝ているだけと言うのも規格外である。

「タバサ！ 怪我を治してもらえるか？ 他にも治癒が使える奴がいたら頼む」

駆け寄ってくるシャルロットとモンモランシーが才人へ治癒の魔法をかけて行く。

「ルイズ、彼は何者なんだ？ この僕の『ワルキューレ』を倒すなんて……」

「ただの平民でしょ」

「ただの平民に、僕のゴーレムが負けるなんて思えない」

「ふんだ。あんたが弱かっただけじゃないの？」

ギーシュはドットレベルとはいえ、もうすぐラインに届きそうな『土』のメイジである。

シャルロットやキュルケに比べると強くはないが、ただの平民に負けるほど弱くもない。

現に才人が剣を持ってあり得ない動きをするまでは手も足も出なかったのだ。

「ギーシュ。今回ばかりは才人にお礼を言っとけ。もし才人が負けてたら次の相手は俺だったからな」

殺気は消しつつも怒りを湛えた目でギーシュを睨みつけた。

「すまなかった。軽く魔法で脅せばそれで終わると思ってたんだ。だけど、サイトはワルキューレを恐れることなく向かってきたから治まりがつかなくなってしまう…」

最初からこんな大怪我をさせるつもりはなかったのだ、ただ才人が恐れることなく向かってきた為、おさまりがつかなくなってしまうのだった。

「謝るのなら、僕ではなくルイズと才人に。だろ？」

ギーシュはルイズへと頭を下げ、一緒に救護室へと向かおうとした。

「茶番は終わったのか？ 平民に負けたギーシュに邪魔をしたヤマト君？」

一学年上に当たるベリツソンとステイクス、同学年のマリコルヌとギムリが集まった生徒達の数歩前へと出た。

「茶番と思うなら、こんな所に来ないで昼寝でもしてたら良いんじゃないか？ そんなに暇なのか？」

悪意ある発言に先ほどから抑えていた怒気を抑えられなくなった。

「平民に負けるようなギーシュには僕達が訓練をしてあげるよ。決闘の邪魔をしたヤマト君も付き合ってくれないか？」

決闘ではなく訓練。複数対複数での戦闘がお好みらしい。



「なんで、ハッピーエンドで終わらせてくれないかね… 空気の読めないあんたらに言っても仕方がない事が…」

「その余裕は何処からくるんだい？ ああ、怪我をしてもそのチビに治してもらえるから大丈夫なのかな？ 無口なチビと宜しくやつてろ」

キュルケに振られたベリツソン、ステイクス、ギムリは最近キュルケと一緒に居る事の多い大和を快く思っていなかった。キュルケと一緒に居ると言っても、シャルロットとの3人であるのだが…

マリコル又は先ほどの授業でのことを根に持っていた為、この3人の行動に乗ったのだ。

キュルケやタバサ、ルイズにしても隠れファンが多数存在する。そんな3人と親しげに接している上、物腰が柔らかく、人当たりの良い大和はシエスタ達平民や複数の女生徒からも好意を受けているのだった。本人に自覚は無いが… そんな大和に対し大多数の男子生徒は快く思っていなかった。

「ギーシュは才人を救護室へ連れて行ってくれ」

「ヤマト一人であの4人を相手にするのかい？ 無茶だ！」

「大丈夫。それより、才人を頼むよ」

まだ何か言いたそうに見ていたギーシュだったが、大和の怒りを感じ、引き下がった。

「って事で、何時でもどうぞ」

4人に向かって数歩近寄り、やる気無さそうに大和が言い放った。

「杖を抜かないのか？」

「あんたら相手に魔法はいらないでしょ」  
挑発するように笑顔で応じる。

「なめやがって！ 後悔させてやるよ」

4人が一斉に詠唱を始め、大和に杖を向けるが、魔法が届く前に目標が目の前から消える。

風のように宙を舞った大和は手前に居たベリツソンとステイクスの鳩尾に打撃を銜えると、二人は意識を飛ばして倒れこんだ。残った二人は啞然としその場で固まっている。間髪をいれず二人に接近した大和は同じように意識を断ち切りあつと言つ間に訓練が終わった。

「何の訓練だったんだろうね。相手を甘く見すぎだよ」

聞こえるはずもない4人には目もくれずシャルロットとキュルケの居る場所まで下がる。

「ヤマトらしくない」

「あいつらつて、何がしたかったのかしら…」

タバサとキュルケが冷静に今の訓練を評価した。

「俺らしくないか…たしかにこんな熱血キャラじゃないんだけどな。才人に影響されたかな？」

今日1日を振り返って、何時もなら我慢できていたことが出来なくなっていた事に笑いが込み上げてくる。

才人への仕打ちだったり、ルイズへの周囲の態度、シャルロットへの暴言（チビって言われただけ）、大切に思っている者達が傷つけられる事への不満が溜まっていたのだった。才人の真っ直ぐな生き方に感化された訳でもないが、今回の大和の行動には多少の影響を

与えていた。

「大切な人達には笑っていてほしただけなんだ。たぶん、才人もそう思ってるんじゃないかな？」

性格が似ていると言う訳ではない。人間一人が守れるものには限界がある事も知っている。だから、せめて自分の大切なものは全力で守りたい。大和も才人も根本にあるものはそんなところだった。

「それより、才人が心配だな。救護室へ行ってみようか」

大和、シャルロット、キュルケの3人で救護室へと足を向けた直後、

「ヤゝマゝトゝ！ イルククウが大変なの！」

王都から全力で飛んできたセラは息も絶え絶えにイルククウの窮地を知らせた。

## 第2章・12話：決闘と訓練（後書き）

才人vsギーシュの話しって才人の最初の見せ場なんでしたらと原作に沿って書いてしまった…

何処を削っても才人の良いところが無くなっちゃいそうで…

こんな事を書いといて最後に大和が美味しいところを持って行くんですよねw

さて、次回やつとイルククウのお話の続きです！

今回の話にくっ付けようと思ったのですが長くなってしまいましたので、一旦切りました><

ご理解のほどお願いいたします。

第2章・13話：シルフィードとお姉さま（前書き）

イルククウが攫われた。

韻竜の姿に戻ればどうにでもなる筈なのだが…  
元の姿に戻れない理由があるのだろうか？

シャルロットを抱え、国境へと急ぐ。

## 第2章・13話：シルフィードとお姉さま

25、シルフィードとお姉さま

イルククウの乗せられた馬車はトリスティンとゲルマニアの国境に差し掛かっていた。

関所に近づくとつれて少女達が騒ぎ始める。

こんな風に、年頃の女の子たちが縛られていたら、絶対に御役人が見咎めるはずだというのだ。イルククウもそんな話を聞いてワクワクし始めた。

だが、現実は厳しかった。

中年の役人が二人、馬車の中を覗き込んできた。見張りの男はニヤニヤと笑みを浮かべている。

「積荷は小麦粉とあるが……」

不審に思つての発言ではない。何故なら上官と思わしき貴族は笑みを浮かべていたのだった。

「どっからどう見ても、立派な小麦粉でしょう?」

見張りの男は懐から革袋を取り出し、それを役人に手渡した。中を改め、もったいぶつた様子で頷いた。

「なるほど。確かに小麦粉だな」

少女達の間から、絶望のため息が漏れた。

そんな中、ただ一人、イルククウだけが怒りに身体を震わせていた。

「お前達、人間は! もう、最悪なのね!」

「なんだ？ お前は！ 小麦粉がしゃべるか！ 黙ってる」

「きゅいきゅいきゅいきゅいきゅいッ！」

怒りに任せて、イルククウは『変化』の呪文を解いた。

「な、なんだ！ トカゲ？」

徐々に『変化』が解け、身体が光り輝く。ロープの魔力により身体の膨張が抑えられるが、それも直ぐに耐えられなくなる。

「トカゲじゃないのね！ きゅいきゅい」

元の姿を取り戻したイルククウにより馬車の幌は引きちぎられた。

大きく翼を広げ、周囲の女の子を守るように雄たけびを上げる。

「くけー！」

あまり迫力はなかった……

周囲からマスケット銃による弾幕が張られるが、風を起こしたイルククウにかする事すらなかった。

暴れまわるイルククウにより兵士の二人が吹き飛び気を失う。

詠唱を終えたメイジからエアハンマーが幾つも飛び、イルククウを鈍器で殴られたような痛みを襲うが怒りに我を忘れたイルククウは恐れることなく先住魔法を使うとす。

「本当の風つてものを教えてあげるのね！」

だが、戦いには素人のイルククウはエアハンマーを放ったメイジに気をとられ、背後から浴びせられる『蜘蛛の糸』に身動きを封じられた。

「きゅいきゅい。なんなのね！？」

「この竜、いきなり現れやがって……。いったい、どうなってやがんだ？」

「誰かがこの竜に、女になる魔法でもかけてたんだろっさ」

韻竜は伝説上の存在であり、だれもイルククウがそんなものだとは思わなかったのだ。

「とにかく、仕事の邪魔だから殺っちまおうぜ」

男たちが杖を掲げ、イルククウにとどめを刺そうと詠唱を始めた。

イルククウは観念した。喜び勇んで召還の門をくぐったのは間違이었다。両親の言うように人間の世界はとても恐ろしい場所だったのだ。もし、生まれかわりが本当にあって、再び竜に生まれ変わる事が出来たなら、絶対に竜の巣からは一步も出ないと誓った……。だが、自分を襲う魔法の変わりに銃声と、氷の矢により自分を縛り付けていたメイジが倒れた。

倒れたメイジに見向きもせず、ゆらりと小さな影が現れる。

「ち、ちびすけ……」

それは、遠く離れた魔法学院にいるはずの自分の主人、シャルロットであった。相変わらず感情の乏しい表情で眠そうな目をしている。その背後には銃を構えた大和が寄り添っていた。

背後に立つ大和の周囲には風の精霊が穏やかに舞う。しかし、その精霊の数は今まで見たどの韻竜よりも多かった。

そして、シャルロットから立ち上る霧囲気は尋常ではなかった。魔力に鋭い韻竜であるイルククウには、その小さな身体が発するオーラが、並々ならぬことが分かった。

（こ、このちびすけ……。只者じゃない！）

背後の馬車から、ゆらりと一人のメイジが降り立った。この傭兵団



の頭であった。その姿を見たイルククウは戦慄を覚えた。年は20を過ぎたくらいだろうか、全身から立ち上るオーラはタバサと同等以上にも見て取れる。女性のメイジであった。(この人、強い…)

「あねご！」

「まったく、だらしないね。油断するなど、いつも言ってるだろっ？」

それから彼女はシャルロットを見つめると、唇の端を持ち上げて冷笑を浮かべた。

「おやおや、あなたは正真正銘の貴族のようだね。こりゃちょうどいい」

シャルロットは無言で女頭目と対峙した。その表情はいつもと変わらない。

「あんたほどのメイジがなんで人攫いなんかやってるんだ？」

シャルロットの代わりに大和が疑問を投げかけた。

「ん？あんたは傭兵かい？まあどうでも良いが。あたしは何より騎士試合が大好きでね。伝説の烈風のように都に出て騎士になりたい、なんて親に言ったら猛反対されたのさ。で、こっやって家を出て、好きなだけ騎士試合が出来る商売に鞍替えしたってわけさ」

「ただの人攫い」

シャルロットがそれだけ言うと、女頭目はにやりと笑った。

「そりゃ、食うためにはしかたないさ」

「あねご！ やっちまってください」

遠巻きに様子を伺っている手下が口々に叫ぶ。

「なに、これは騎士同士の決闘だよ。順序と作法つてもんがある。さて、正々堂々といこうじゃないか」

「私は騎士じゃない」

シャルロットは短く告げて、杖を構えた。すると、女頭目は首を振った。

「騎士試合に付き合わないと言うなら、あの竜と女たちに魔法を飛ばすよ？」

杖をイルククウや縛られている少女たちへと向ける。

その瞬間、突風が周囲に吹き荒れた。

「邪魔するやつは片付けたし、人質には手を出せない。思いつきりやっていいよ」

女頭目がイルククウ達に杖を向けた瞬間に、召喚していた風の精霊を解き放った。右手に構えたM9には15発の弾が残されていた。残った手下は10人、全員の足に銃弾を撃ち込み、杖は全て破壊した。風に乗ってイルククウと少女の近くに飛び、少女を縛っていた縄を刀で切ったのだった。

大和のすることはここまで、後はシャルロットに任せるつもりだった。相手の女頭目は多分シャルロットと同じトライアングルクラスメイジである。だが、シャルロットが負けるとは微塵にも思わなかったし、この決闘に勝つことには意味があると考えていた。シャルロットを甘く見ているイルククウの目を覚まさせるにはうつつけなのだ。

「ちっ！」

騎士の礼儀も作法もなく、エアーカーターをシャルロットへと放った女頭目は勝利を確信した。

杖を構えただけで、まだ詠唱に入っていないシャルロットにかわせるタイミングではないと思ったのだった。

しかし、見た目には13歳ほどの少女にしか見えないシャルロットが、あり得ない反応速度で横に飛んだ。女頭目の目が大きく開かれる。

一瞬で呪文を完成させたシャルロットは、その体術に驚く女頭目めにかけて魔法の矢を放った。

勝負はその一撃であっけなくついた。

魔法の矢は、女頭目の杖を切り裂き、同時にその服を地面に縫いつけたのであった。

信じられないといった顔の女頭目はもちろん、イルククウまでもあっけにとられていた。

同じ程度の魔力であっても、体術、詠唱の正確さと素早さ、魔力のコントロールといった技術でシャルロットを上回るメイジはそうはいないのだ。

「あ、あなた、何者……」

地面に縫い付けられたままの女頭目がシャルロットを見上げる。

「ただの学生」

シャルロットは小さな声で答えた。

面倒なことにならないようにと、イルククウに跨ったシャルロットは大和を残して飛び立った。

その後、大和は駆けつけた衛兵に賄賂を受け取った兵士と傭兵団を引き渡し、少女たちを保護してもらった。

魔法学院へと戻る空の上、シャルロットは無言で本を読んでいる。さっきのことなど、まるで意に介した風はない。そんなシャルロットの態度にイルククウは底知れぬ何かを感じた。

もしかしたら、この少女はとんでもない大物なのではないだろうか。こうしていると先ほどまでの戦いを勝ち抜いたメイジには見えな  
いのだ。

同じ魔法でも使うものによってその鋭さは変わる。ただの少女にか見えないこの人間のメイジが、そんな鋭さを秘めていることに素直に感嘆した。

「あ、あの……、タバサさま。どうもありがとう。助かったのね。でも、どうして私の居場所がわかったのね」

「あなたの視界を、わたしも見る事が出来る。使い魔と主人は一心同体。見える景色から行き先の見当をつけて、大和と一緒に飛んできた」

イルククウは、素直に感激した。同時に、今までの自分の態度を恥じた。

「昨日はごめんなのね。ちびすけとかなんとか、わたしひどいこと言ったのね」

「……………」

「そ、その上……、本を買うのも失敗したのね」

それまで無言だったシャルロットは、本から顔を上げた。イルククウは思わず目を瞑った。何か、罰を受けると思ったのだ。

（しかたないのね、散々失礼な言葉を投げつけた上に迷惑もかけたのね……）

だが、シャルロットの言葉は思いもよらぬものだった。

「シルフィード」

「え？ それ、なんなのね？」

「あなたの名前。風の妖精って意味」

イルククウは電流に打たれたように、感激に打ち震えた。この小さな自分のご主人様は……、あれだけ失礼な態度をとった自分に、使い魔として、人間世界の仲間として、新しい名前を考えてくれたというのである。

「素敵な名前ね！ きゅい！」

それ以上、興味はないといった風に、シャルロットは本に視線を戻す。ただ、ちよつと嬉しそうに頬に赤みが差しているのをイルククウは見逃さなかった。

そんな態度が、さらにイルククウ……、いや、今や新たに『シルフィード』という名前を得た韻竜の心をくすぐった。

「可愛いのね！ わたしも嬉しいのね！ なまえ！ 新しいなーまーえ！ きゅいきゅい！」

テンションうなぎ上りのシルフィードは陽気にはしゃぎ始めた。

「ねえねえ！ タバサさまのこと、『お姉さま』って呼んでもいいかしら？ 理由はないんだけど、そう呼ぶことが相應しいような気がするのね」

こくりと、シャルロットは頷いた。

少し離れた空の上で大和はシャルロットとシルフィードの様子を伺っていた。

随分と、打ち解けた様子に、先ほどのことが良いきっかけになったのだと嬉しく感じた。

スピードを上げ、二人に追いつく。

「人攫いは衛兵に引き渡したよ。後、少女たちも保護してもらった」

「そう、ありがとう」

「ヤマトも助けてくれてありがとうなのね」

声の弾んだままでシルフィードがお礼を言ってくる。

「いや、銃のテストも兼ねてたからね。お礼を言われると、こっちが恐縮する」

実際、シャルロットだけでどうにでもなる程度の相手だった。

移動の為に大和がついて来た事くらいしか、役には立っていないと思っていた。

「ヤマト、ここ」

シャルロットが自分の隣を指差し、手招きをする。

「いや、シルフィードの負担になるだろ。俺は精霊を纏ってれば学院まで余裕で飛べるよ」

シルフィードに乗れという意味だろうが、韻竜が自分の認めない人間を背中に乗せるとは思えなかった。

「人間一人も二人も大差ないのね。ヤマトも乗るのね」

「…ありがたく乗せてもらっよ」

シルフィードにまで言われると断る理由もなく、素直にシャルロットの隣へと移動する。

双月の明かりが照らす中、シルフィードはきゅきゅいと楽しげにわめき続ける。

大和は、右肩にかかった重さと暖かさを心地よく感じながら夜空の散歩を楽しんでいた。

ヤマト・クサナギ・ド・シエルファという人物について調べていた。フォルテ子爵の義弟、2年前までは平民として生活をしてきたそうだ。

驚いた事に昨年の夏休みに男爵となり、小さいながらも領地を得ていた。

大和が最近手に入れた城って言うてたのはこのことだったのだ。

学院での大和の評判は正反対の対応が聞かれた。

主に女子生徒、教師、メイドなどの平民からの評判は良いのだが、男子生徒からは、ヤツカミともとれる話が聞かれた。物静かで誰にでも優しい。高い身長と整った容貌と相まって、女性からの評判が高いのだ。それが面白い男子生徒からの評判が落ちると言う事だった。

物静かで何時も冷静な大和だが、先日の決闘騒ぎのときには友人と言い放った平民の使い魔を助けようとした。さらに、嫉妬に燃える男子生徒4人が訓練と称してちょっかいを出したが、魔法も使わずに返り討ちにしたのだ。

平民に接する態度は文句なしで気に入った。これならあの子の事も怖がらずに接してくれるのではないか？という期待が膨らんだ。だが、それと同時に、そんな大和でさえも、あの子には恐怖を覚える

かもしれないという恐れも付きまどった。

もう一度、話をしてみよう……それで、受け入れて貰えそうなら、助力を斯うのも良いかもしれないと考えた。

考え事をしながら自室の窓から外を眺めていた。

春といっても、まだ夜の風は肌寒く、夜気に当たって冷たくなった肩を抱き、そろそろ寝ようかと窓を閉めようとした。

「こんばんは、ミス・ロングビル、いや、マチルダ・オブ・サウスゴータと言った方が良いのかな？」

窓から5メートル程離れた所に、白い仮面をした男が浮いていた。

そこまで接近されるまで気配を感じる事が出来なかったロングビルは咄嗟に杖を握った。

「そんなに、怯える事は無い。君にとって悪い話をしに来たわけじゃないのだから」

何の感情もつかげえない声音に白い仮面も相まって不気味な雰囲気醸し出している。

「……」

「君の家族を奪った、アルビオン王家に対して復讐をする気はないか？」

「あんだ、トリステイン貴族だろう？　なんであんだがそんな事を言う？」

口調や仕草でトリステイン貴族である事は直ぐに分かった。

「我々はハルケギニアの将来を憂い、国境を越えて繋がった貴族の



連盟さ。我々には国境はない。ハルケギニアは我々の手で一つになり、始祖ブリミルの光臨せし『聖地』を取り戻すのだ」

「バカ言っちゃいけないよ。大体、その連盟とやらの遣いが、私に何の用だい？」

「我々は一人でも多くの優秀なメイジを必要としている。協力してくれないかね？『土くれのフーケ』殿」

「夢の絵は、寝てから描くものよ」  
ハルケギニアを一つにする？

トリステイン王国、帝政ゲルマニア、故郷のアルビオン王国、そしてガリア王国……、未だに小競り合いが絶えない国同士が、一つにまとまるなんて夢物語だ。

おまけに『聖地』を取り戻すだつて？ ああ、強力なエルフどもから？

ハルケギニアから東に離れた場所に住まうエルフたちによって、『聖地』が奪われてから数百年。『聖地』を奪還しようと、数多くの国が兵を送ったがその度に、無残な敗北を喫していた。

長寿と独特の尖った耳と文化を持つエルフたちは、その全てが強力な先住魔法使いであり、優秀な戦士なのだ。同じ数、いや倍の数で戦っても確実に勝利できるとは誰ひとり思っていない。

「私は貴族が嫌いだね、それにハルケギニアの未来になんて興味もない。あんたたちの夢を押し付けなくてもいい」

「君に拒否権はないよ。ハーフエルフと子供達の事を公開されるとまずいんじゃないのか？ ああ、私の口を封じても、この事を知っている仲間はたくさんいるから」

ハーフェルフという言葉に杖を向けるが、他にも知っている仲間が居ると牽制される。

「気に食わないが、従ってやるよ……ただし、子供たちに手を出したら承知しない」

今にも飛び掛ろうかという迫力で、引けない条件を提示する。

「お前が、裏切らない限り妹と子供には手を出さない事を誓おう」  
ハーフェルフ

「で、何時から動けばいいんだい？」

「まだ、時は来ていない。このまま学院の秘書を続けて貰おう。時が来れば連絡する」

「私が参加することになった組織の名前はなんて言うのか教えてくれないのかい？」

数秒の沈黙の後、仮面の男が静かに組織の名前を告げた。

「……レコン・キスタ」と……………。

第2章・13話：シルフィードとお姉さま（後書き）

レコン・キスタの名前が初めて登場！

ここから急転直下…とは行きませんw

のんびりがポリシーの作者ですので、ゆるりとお付き合いをお願い  
します^^

原作を読み返しながらの作業は思ったより時間がかかります。

記憶違いで変なこと書いてるかも知れませんが、オリジナルってこ  
とにしといてくださいb

駄文にお付き合い下さり感謝です！

8 / 3 誤字訂正

第2章・14話：デルフリンガーと宗三左文字（前書き）

買い物へ出かけることになったんだけど、

シャルロットの服装がヤバいくらい…イイ！

正面から見つめることができない意気地なしの大和です…

## 第2章・14話：デルフリンガーと宗三左文字

26、デルフリンガーと宗三左文字

虚無の曜日。

先日、シルフィードが買えなかった本を買いに王都へと向かう空の上、シルフィードとセラがシャルロットで遊んでいた。

「お姉さま！ その服どうしたのね？ 何時もの服と違うのね」

「何時か大和がプレゼントした服よね？」

「そうなのね！ 可愛いよね！ 似合ってるのね！ きゅいきゅい」

「もしかして、私とイルククウは、お邪魔なんじゃ？」

「私の名前はシルフィードなのね。セラも今度からそう呼ぶのね」

「…まあ、シルフィードの方が呼びやすいし、かまわないけど」

終始、頬を朱に染めたシャルロットは本に視線を落としていたが全く内容を理解していなかった。

今のシャルロットの恰好は、大和がプレゼントした水色のワンピースだった。

大和が想像していた通り、髪の色と相まって清楚で可憐な姿に鼓動が速まるのを自覚する。

「シャルロット、良く似合ってるよ」

「……ん」

俯いた状態から見上げてくるシャルロットの姿にワントテンポ鼓動の速さが上がる。

「見せつけてくれるわよね……」

「お姉さまとヤマトは仲がいいのね　そうだ！　ヤマトの事、お兄様と呼ぶのね」

セラとシルフィードのテンションの違いに笑いが込み上げてくる。この瞬間、シルフィードから『お兄様』と呼ばれるようになってしまった。

王都に着き、人間の姿になったシルフィードは学院のメイド姿になっていた。

「シルフィードも、何時も同じ格好じゃ何だし、服屋に行こうか？」

「私にも服を買ってくれるのね？　嬉しいのね！」

「私にも当然、買ってくれるんでしょうね？」

はしゃぐシルフィードとジト目で見つめてくるセラ。

「ふふっ、セラは色気より食い気じゃないのか？」

「失礼な！　私だつてたまにはお洒落がしたいのよ」

「冗談だよ。買ってあげるからそんなに怒るなよ」

頬をこれでもかと膨らませたセラは顔をそむけてしまいが…露店で買ったサクランボを与えると顔を綻ばせて囁り付いていた。なんとも小動物チックな食事風景に自然と大和の頬も緩む。

隣を見ると、目線を落とし、もじもじしているシャルロットに気がついた。

人通りが多いせいで、肩が触れ合う…身長差でシャルロットの肩が大和の二の腕くらいに触れ合うほど近くにいるのだが、シャルロットが会話に入ってくる事は無い。

どうしたのかと暫く見つめると、手をモゾモゾしている事に気がついた。

前回、手を繋いだ事を思い出し、庇護欲から手を繋いだ。シャルロットが自分を兄のように慕ってくれていると想っていたし、大和もシャルロットを妹のように想っていた。最近では時々、あやふやな感情に悩まされる事もあったが……。

基本、大和は男女の機微には疎い、朴念仁であった。

「はぐれると困るからね」

前回のように、手を繋いでもらえないだろうかと考えていたシャルロットは、大和がいきなり手を繋いできたとき、心臓が飛び出すかと思うくらい驚いた。お父様に召喚された大和に興味を惹かれ、今まで見た誰よりも圧倒的な強さに憧れ、何時も気にかけてくれる優しさに安らぎを覚えた。

兄のように慕い、今では隣に居る事が自然であると感じている。しかし、最近では兄としてではなく、一人の男性として意識することが多くなったように感じる。そう、シャルロットにとっての憧れの勇者が大和なのだ確信に近い想いを持っていた。

大和が自分の事を妹のように想っていることは何となく感じていた。

それが嬉しいような、悔しいような微妙な感情に戸惑う。学院での大和は自分の強さをひけらかすことなく…というか隠し、決して威張り散らす事は無い。高い身長に整った容姿、人当たりの良い優しい態度、既に自分の領を持つ男爵である。これだけ揃えば、もてて当たり前なのであるが、大和は朴念仁ぶりを発揮して全く気が付いていない。

自分に対する朴念仁ぶりはどうにかならないかと思うが、他の女性に気が行く事のない大和の朴念仁ぶりに今は感謝している。

手を繋いだまま露店を冷やかし、目的の服屋の門をくぐる。

「お姉さまとお揃いが良いのね！」

テンションの高いシルフィードはシャルロットとお揃いがいかと店中を探し回るが見つける事が出来なかった。店主に聞くと、品切れ中ということだった。

「これなんかどうだ？」

シャルロットのワンピースの色に近い水色で、白い縁取りのあるタイトスカートと丈の短いベスト、茶色のインナーを組み合わせた服であった。

「かわいいのね！ 気に入ったのね」

試着してみるとサイズはそのまままで問題がなかった。支払いをしようとする大和を止め、シャルロットが支払いを済ませた。

表向きには自分の使い魔だからという理由だった…だが、シャルロットとしては使い魔と言えど、自分以外の女性にやたら滅多に贈り物をしてほしくなかったというのも理由であった。

「じゃあ、俺からはこれをどうぞ、ミス・シルフィード」



先ほどの服に合いそうな黄色いスカーフをシルフィードにプレゼントした。

自分の想いを全く理解していない大和に軽い殺意を抱くシャルロットを尻目に、シルフィードは大喜びだった。

セラも対抗心を燃やしたのか、水色のドレスを希望してきた。当然妖精に合うサイズの服がある訳もなく、採寸して、後日受け取りに来る事になった。

シャルロットにも何か似合いそうな物は無いかと探していると、不自然な服を見つけた。不自然と言う言い方はこの世界には存在しないという意味であり、大和の故郷では当たり前前に存在していたものだった。澄んだ蒼い生地に赤い金魚の絵が鮮やかな浴衣だったのだ。たまに地球の物が見つかる事があるとロアンが言っていたのを思い出した。

「これ、おいくらですか？」

「ああ、綺麗でしょ？東方から流れついたものなんだけど、着るものだとは思っただけど着方が分からなくてね、綺麗な色だから飾っているの。欲しいなら、500エキューでいいわよ」

どう考えても高すぎると思ったが、これを型紙に起こして、浴衣を大量生産出来たら面白いかもと買う事にした。

「シャルロット、この浴衣をプレゼントしたいんだけど、足りないものとかあるから、何日か後で渡すね」

浴衣にはセットであるはずの帯がなかった。型紙におこす事も考え後日渡すと伝える。

「ゆかた？ それって服なの？」

「うん、故郷の物だよ。夏に着る民族衣装みたいなものかな」

「ん、ありがとう」

故郷の民族衣装をプレゼントされるといふ事実には、それ以上の意味を勝手に思い込んだシャルロットは顔を赤くし俯いてしまった。

服屋での買い物を終え、通りを歩いていると、ルイズと才人を見かけた。

シルフィードの事を説明するのが面倒なので、見なかった事にしてその場を離れようとするが、丁度その時一人の男が才人にぶつかるところを目撃した。その男は謝りながら路地へと姿を消す。

面倒ではあるが放っては措けず、シャルロットにシルフィードとセラを連れて、近くのカフェで待ってもらおうよう頼むと、路地へと足を向ける。

「ちょっと、待ってくれるか？」

数歩前を歩く、先ほど才人にぶつかった男に声をかける。

「さつき黒髪の少年から掏った物を返してくれないか？」

無言で此方を窺がう男は、徐にナイフを抜き、口笛を吹く。ぞろぞろと5人ほどの男が姿を現した。

「兄ちゃん、余計な事に首を突っ込むなってママに教えて貰わなかったのか？」

6人の男たちの頭と思われる男は杖を持っていた。

「あなた、メイジか。大人しく返してくれば直ぐに立ち去るよ」

「お前、馬鹿っつていわれねーか？　メイジと解って餓鬼一人で何が出来るんだ？」

「相手の力量を理解できないあなたよりは馬鹿じゃないだろう？」

「チツ！　殺つちまえ！」

大和の挑発に5人の男が獲物を抜いて飛び掛る。

全ての攻撃をかわし、尚且つ刀も抜かずに拳で気絶させていく。

メイジ以外の5人を気絶させた直後に20 سانت程の火球が飛んでくる。

大和とメイジの中間で火球は消え去り、同時に相手の杖が真つ二つに切り裂かれた。

当然、大和の放った風によるものだ。

起こった現象に理解が追い付いていないメイジは歩いて来た大和の拳を受けて気絶した。

「ほら、寄り道しない。スリが多いんだから！　あなた、上着の中の財布は大丈夫でしょうね？」

ルイズは、財布は下僕が持つものだ、と言って、財布をそっくり才人に持たせていたのである。

「あるよ、ちゃんと」……に」

懐にある筈の重い財布が無くなっていた。

「……………」

才人は戦慄する。

注意されていながら、スリにあつて全財産をなくした事がルイズにばれたら…

「…なに黙つてるのよ？ まさか…無くしたなんてことはないわよね？」

可愛いおでこに怒りマークが浮かんでいる。

「いや、その、やっぱ、剣はいらねーや」

どのような言い訳をしたところで、回避できるものではないが、苦し紛れの言い訳を探す。

「この！ ばか犬がああああ！」

杖を振りかぶり才人の頭に狙いを定める。振り下ろす前に後ろから声をかけられ、タイミングが失われる。

「仲がいいのは、良い事だけど、王都の大通りで騒ぎを起こすと衛兵に捕まるぞ？」

「誰が、仲がいいのよ!？」

怒り心頭のルイズが振り返ると、黒一色で統一された大和が呆れ顔で此方を見ていた。

「才人とルイズ」

「だから、この状況を見て、仲がよく見える理由を聞いてるのよ！何処までも惚けた、大和の言い草にルイズの声も大きなものへとなっていく。」

「喧嘩するほど仲がいつていうでしょ？　それで、ケンカの原因は？」

才人が可愛い娘を見かけて、見つめていたとかそんな事を想像した大和はニヤニヤと笑いながら問いかける。

「なんか、ムカツク顔ね…。サイトが、私の預けてたお金を無くしたのよ」

「ああ、そんなことが」

「そんなことつて！　買い物に来たのにお金がなくつちや買えないじゃない！」

「そう、怒るなつて。可愛い顔が台無しだぞ？　ほれ、さつき才人が財布を落とすのを見かけたから、拾って追いかけて来たんだ」  
そう言つて、スリから奪い返した財布を何故か顔の赤いルイズへと差し出す。

「おおおお！　大和、ありがとう！」

ルイズの折檻を覚悟していた才人は、嬉しさのあまり大和に抱きついた。

「…才人？　嬉しいのは解るが、俺にはそういう趣味はないから…」  
ジト目のルイズに勘違いされそうな現状に、嫌な汗が流れるのを感じた。

「いや、俺は大和の事、好きだぞ！」

潤んだ目で、とんでもない発言をした才人を、大和は無理やり引き離れた。

「喜んでもらえて、何よりだが、冗談が過ぎると財布の事以外で、ルイズから教育されるぞ……」

既にルイズは何処から取り出したのか、馬用の鞭を握りしめ、フルフルと体を震わせていた。

「こんの！馬鹿犬がああああ！」

結局才人はルイズから教育と言う名の折檻を受けるのだった。

何を買いに来たのかという質問に、才人用の剣を買いに来たという答えが返ってきた。

「才人は、何か武道か部活かの経験はあるのか？」

「いや、特別な事は何もしてなかった」

「んー、ギーシュのゴーレムを倒した時の剣速は、素人の物じゃなかったんだけどな……」

決闘の時の才人の動きを思い出し、あの時光りだした左手のルーンを見つめる。

「もしかして、左手に刻まれたルーンと関係があるのかな？」

「……まあ、ヤマトなら良いか。私も、それが一番疑わしいって思っているの。でも、ルーンの力であんなに強くなるって事が軍関係者にばれたら、面倒なことになりそうだから、黙っててよね」

確かに、ルーンの力で、素人が剣豪さながらの動きが出来るようになるなんて知られたら、実験動物宜しく、解剖でもされそうだった。

「ああ、言いふらすような事はしないさ。でも、学院長に相談して、事実確認くらいはする必要があると思うぞ。今後、戦いになった時、自分の事が分からないままだと危険だから」

「…考えておくわ」

「で、話は戻るけど、どんな剣を買った？ この前、使ったシヨ  
ートソード以外でも使えるんだろうか？」

人は一般人程度の筋力しか持ち合わせていない事は、解っていた。日頃の才  
原因を知りたいが、光ったのが過去1回であり、精神的に追い詰め  
られた時、限界を超えて勝ちたいと思った時など、ルーンが光る原  
因が何通りも考えられるのだ。

「剣のことなんて解らないから、どうでもいいわよ」

「カツコイイ剣がいい！」

「…素人二人で、武器なんて買いに来るなよ…」

心配になった大和は武器選びまで付き合う事にした。

武器屋の扉を開け、ルイズを先頭に足を踏み入れる。

店の中は昼間だというのに薄暗く、ランプの明かりが灯っていた。  
壁や棚に、所狭しと剣や槍が乱雑に並べられ、立派な甲冑が飾られ  
ていた。

店の奥で、パイプを吹かしていた五十がらみの親父が、入ってきた  
ルイズを胡散臭げに見つめた。紐タイ留めに描かれた五芒星ごぼうせいに気づ  
く。それからパイプを離し、ドスの利いた声を出した。

「旦那。貴族の旦那。うちは真つ当な商売をしてまさあ。お上に目  
をつけられるようなことなんか、これっぽっちもありませんや」

「客よ」ルイズは腕を組んだまま言い放った。

「こりやおったまげた。貴族が剣を！ おったまげた」

「どつして？」

「いえ、若奥様。坊主は聖具をふる、兵隊は剣をふる、貴族は杖をふる、そして陛下はバルコニーからお手をおふりになる、と相場は決まっておりますんで」

なるほど、上手い事を言くと大和は感嘆した。

「使うのは私じゃないわ。使い魔よ」

「忘れておりました。昨今の貴族の使い魔も剣をふるようです」

主人は、商売つ気たつぷりにお愛想を言い、大和と才人を品定めする。

「そちらの武器を持っていない方ですね、背のお高いほうはもう剣をお持ちのようですよ」

大和の持つ二本の刀。一本は『左』と銘を刻まれた、刀工一派の『さもんじ左文字』作の打刀。

もう一本は『左近将監』と銘を刻まれた、『長光』作の同じく打刀である。

どちらの刀もいわずと知れた名刀である。剣とひと括りにされるのも失礼な話であるが、剣や刀といった概念はないのだった。

「では、此方のレイピアなど如何でしょう？」

刀身が細く、1メートルほどの長さ。柄にハンドガードが付いた豪華な剣であった。



「人間を相手にするだけなら、レイピアでも十分だが、モンスターなんかも相手にする可能性があるなら、よした方がいいな」  
レイピアという剣は斬る為ではなく、刺す為に作られた剣であり、耐久度も低い。人間相手なら致命傷でも、モンスターなどを相手にした時はそうは行かないのだ。

「それでしたら、これなんか如何です？」

1.5メートルはあろうかという大剣だった。所々に宝石が散りばめられ、刀身も鏡のように光を反射している。

「店一番の業物でさあ。貴族のお供をさせるなら、このぐらいは腰に下げて欲しいものですね」  
才人も寄ってきて、その剣を見つめた。

「すげえ。この剣すげえ」

才人が気に入ったのを見て、ルイズはこれで良いだろうと思った。店一番と主人が太鼓判を押したのも気に入った。貴族はとにかく、なんでも一番でないと気がすまないのである。

「おいくら？」ルイズは尋ねた。

「何せこいつを鍛えたのは、かの有名なゲルマニアの錬金術師シユペー卿で。魔法がかかっているから鉄だつて一刀両断でき。御覧なさい、ここにその名が刻まれているでしょう？ おやすかあ、ありません」

「私は、貴族よ！」胸を反らせてルイズが言った。

「エキュー金貨で2千、新金貨なら3千」

「立派な家と、森つきの庭が買えるじゃないの」  
ルイズは呆れて言った。才人は価値が分からないらしくぼけっと突っ立っていた。

「その剣の価値は壁にしかないよ。丈夫かも知れないが、戦闘に役立つ剣じゃない」

面白がつて話を聴いていた大和が、流石に見ていられなくなって声をかける。

「旦那、この剣は有名な「俺の刀で試し切りさせてもらえるかな？」  
…すみません」

主人も実用性より、細工や宝石による見た目に価値があることは分かっていたのだ。剣に素人な貴族が来たものだから、高く売りつけようとしたのだった。

「何？ この剣って、大したことないの？」

ルイズが騙されたと思ったのかキツイ目で主人を睨んでいる。

「いや、実用性の面ではその価値はないってだけで、使われてる金  
属や宝石、芸術的には、それ位の価値はあるよ」主人を哀れに思い、  
助け舟を出す。

「そのの、兄ちゃん。若いのに良い目をしてるな。俺を買わないか？」

4人以外誰もいない店内で、5人目の声が聞こえてきた。

「なんだ？ 誰もいないじゃん」

声のした方を振り返るが、人影はなかった。

「いや、人じゃないよ」

乱雑に置かれた武具の中に1つだけ魔力を強く放つ剣があった。大和は店内に足を踏み入れた時から、気になっていたが、まさか喋るとまでは思っていなかった。

「お？ 兄ちゃんは気がついてたか」

皆の視線が集まる中、古ぼけた剣がガチャガチャと音を立てながら言葉を発した。

「剣がしゃべってる！」

「これって…インテリジェンスソード？  
ルイズが当惑した声を上げた。

インテリジェンスソード、今は失われた技法で意思を持たせた魔剣である。

「お客様、申し訳ありません。口の悪い奴です。デル公！ お客様様に対してその口の聞き方はやめるといつも言ってるだろう！」

「お客様って、背の高い兄ちゃんなら買われてやってもいいが、そっちの小さいのに買われるのは真っ平だ」

「お前、デル公っていうのか。喋る剣なんてすげえな  
才人は手にとって、まじまじと見つめた。

「違っわ！ デルフリンガー様だ！ 置きやがれ！」

「俺は、平賀才人だ。よろしくな」

デルフリンガーは黙り込み、才人をじつと観察する。

「おでれーた。見損なつてた。てめ、『使い手』か」

「『使い手』？」

「ふん、自分の実力も知らんのか。まあいい。てめ、俺を買え」

デルフリンガーの言う『使い手』と言うのがあのルーンの事だろうと思つた。

才人の力を知っているような発言に、大和は興味を覚えた。

(学院に帰つてから、聞き出すか…)

「買うよ」

才人はしゃべる剣という事だけに興味を持ってしまい、考えることなく即答していた。

「戦いを想定して鍛えられた剣だから、俺もデルフを買うことには賛成だ」

「大和までそういうのなら、仕方がないわね…」

しゃべる剣で尚且つ、みすばらしい見た目であった為、心底嫌そうな表情であつたが、大和が賛成しているため、反対する事が出来なくなつてしまつた。

「あれ、おいくら？」

渋々ではあつたが、ルイズは主人に値段を聞いた。

「あれなら、百で結構でさ」

「安いじゃない」

「こつちにしてみりゃ、厄介払いみたいなもんでさ」  
主人は、手をひらひら振りながら言った。

ルイズが100エキューをカウンターの上に置いた。

「毎度」剣を取り、鞘へと収め、才人へと渡した。

「どうしても煩いと思ったら、こつちやっつて鞘へと納めれば大人しく  
なりませう」

才人と主人のやり取りを背中で聞きながら、大和は適当に武具を眺  
めていた。

ふと、隠されるように立てかけられた刀に目がとまった。

手に取ってみると、見事な大太刀だった。

銘は『左』。大和の持っている打刀と同じものだった。長さが11  
0センチと80センチの差があったが。

『宗三左文字』という大太刀がある。現代日本では重要文化財に指  
定されている名刀である。

戦国時代には天下をとった武将がごとく所持していたことから  
あまりにも有名である。

『宗三左文字』は建勲神社に奉納されており、大和は拝見したこと  
があった。

その『宗三左文字』と瓜二つの刀が目の前にあるのだ。刀オタクと  
いう訳ではないが、心躍る大和だった。

「主人、この刀はおいくらでしょう？」

「いや、その剣に触っちゃいけませんぜ。なんせ持ち主の気を狂わ  
す魔剣ですから、手に入れたは良いが、変な噂のせいで売りに売れ  
ない厄介な剣なんでさ」

「呪われているということかな？ 特別それらしい魔力は感じない

が…」

「いや、呪とか魔法とかなら、対処のしようもあるんですがね。そんな理由もなく、持ち主の気が狂っちゃまって言うんでさ」

斬れすぎる刀は時々『妖刀』や『魔剣』といった名前を付けられることがある。実際に人の怨念によって『妖刀』になり果てることもあったが、そのほとんどは、斬れすぎる刀で何かを斬りたいという欲求が生み出す人災である。斬れすぎる為に、斬る魅力が強すぎるという点では『呪』に近いのかもしれないが。

しかし、この刀には魔力も、妖気も感じなかった。

「それで構わないから売っていただけないだろうか？」

「「ヤマト…止めといたほうが…」」

ルイズと才人が合わせたように同じことを言うてくる。少し顔が青ざめているように見えた。

「大丈夫だよ。この手の怨念やら呪については専門家だから」  
事実、この地に召喚される前は、妖魔やら怨念絡みの呪やらに関わることが多かったのだ。

「百で結構でさ…」

引き攣った表情のルイズ、才人、主人を尻目に満面の笑みで支払を済ませ、大太刀を受け取った。

武器屋を出たところで二人と別れ、シャルロット達の待つカフェへと向かう。

「ヤマト、おそ〜い」

「ごめんごめん。才人の剣を選ぶのを手伝ってたんだ」  
先ほどの一部始終を説明し、お詫びに夕食を奢るということで3人の許しを得ることができた。

夕食をとる為に大通りを歩いていると、不意に背後から声をかけられた。

「ヤマトとタバサじゃない。こんな所で何してるのよ?」

声をかけてきたのはキュルケだった。

シャルロットの格好に驚いた表情をしながら、「ああ、デートかと結論付けた。」

デートという言葉にシャルロットだけでなく、大和までも顔を赤く染め言葉に詰まった。

意識していた訳ではないが、改めて第三者から言われると、咄嗟の反応が出来なかった。

「キュルケこそ、ひとりで買い物か?」

話を変えるために、キュルケに質問をする。

「私はダーリンを追いかけて来たのよ。多分、ココに来たと思うのよ」

「ダーリン?」

「サイトのことよ。私のダーリン」

また、キュルケの悪い癖が出たのかとシャルロットと共に溜息を洩

らした。

「才人ならルイズと一緒に買い物が終わらして、帰ったぞ」

「ええー、行き違いかー。……何を買ったか知ってる？」

「ん？ ああ、才人用の剣を買った」

「剣か…」

何事か考えを巡らせているキュルケを不思議そうにシルフィードが見ていた。

「ちよつと武器屋にいつてくるわ。負けられないもの！」

「ああ、良くわからんが、がんばれ」

気合を入れなおしたキュルケはそれだけ言い残すと武器屋を目指して走って行ってしまった。

「結局何だったんだ？」

「さあ？」

「「そんなことより、おなかが空いた（のね）！」」

セラとシルフィードに急かされて、近くの宿屋で夕食をとり、帰途に就いた。

「今日は、良い買い物できたな」

「たのしかった」



「また行きたいのね」

「今度、私の服を取りに行かなきゃいけないから、来週もお買いものよ」

それぞれ楽しく過ごすことができた様子に、引率感覚だった大和は自然と頬が緩む。

（今度はヤマトとふたりつきりで、デート……）  
違う意味で頬の緩む者が一名いたりいなかったり…

第2章・14話：デルフリンガーと宗三左文字（後書き）

買い物デートをラブラブな感じで書きたかったのですが…

デルフを登場させる為に、文字数取られました><

まあ、大和の新しい武器と『浴衣』を買い付けることができたので  
よしとしますかw

今回はフーケ登場のはず…たぶん…

駄文にお付き合い下さり感謝です。

第2章・15話：盗賊と変な奴…（前書き）

フーケがこんなにも早く動き出すとは思わなかった。

今回、ほとんど俺は出ないのよね…

主役って誰だっけ……

## 第2章 - 15話：盗賊と変な奴：

27、盗賊と変な奴：

土くれのフーケ。ハルケギニア中にその名を轟かす、凄腕の盗賊である。

今、狙っているお宝はトリステイン魔法学院に安置されている『破壊の杖』である。

情報収集により、学院の宝物庫には『固定化』の魔法が何重にも掛けられており、魔法で扉を破ろうにも不可能であることが分かっていた。しかし、唯一物理攻撃が弱点であるということがつい最近わかったのだった。

「ゴーレムの一撃で破れるとは思えないし…手間取れば失敗は目に見えてる。さて、どうするかね？」

思案するフーケは焦っていた。今、この時に事を起こさなければ…。運よく今ならば一番の障害になり得る彼が居ないのだから…

それに、レコンキスタの活動を手伝うことになった為、少しでも稼いでおかなければならないのだった。

学院の屋根の上から宝物庫のある場所を凝視しながら物思いに耽っていた。

所変わって学生寮の一室。

ルイズの部屋で騒動が持ち上がっていた。

ルイズとキュルケが、お互いに睨み合い、才人は鳥の巢の上でキュルケの持ってきた剣を夢中で観察していた。一人無関心に本を読んでいるシャルロットはキュルケに連れてこられたのだった。

こういうイベントには、ほぼ確実に巻き込まれるはずの大和は、現在所用で席をはずしていた。

王都での買い物を終え、学院に帰った大和は、すぐに学院長に呼ばれた。

オスマンから渡された手紙はロアンからのもので、至急会って話が見たいと書かれていた。

そうだった経緯で、現在大和はフォルテ領へと戻っているのだ。

「ダーリンも私の剣を気に入ってるわ」

「なにいつてんのよ！ 使い魔の道具なら間に合ってるの！ ねえ、サイト」

ルイズが言い返すが、才人はキュルケが手に入れた剣を熱心に観察していた。

鞘から取り出し、剣を握る。すると、左手のルーンが光りだした。

それと同時に体が羽のように軽くなった。素振りをしたくなったが、室内なため自重する。

いったい、どんな理屈で自分のルーンが光るのだろうか？分かっていないのは剣を握ると光るということだけだ。しかし、今は光り輝く見事な剣に夢中であった。

「すげえ… やっぱこれ、すげえ……。ピカピカ光ってる」

ルイズはそんな才人を蹴つ飛ばした。

「なにすんだよ！」

「返しなさい！ あんたには、あのしゃべるのがあるじゃない！」

「や、確かに、あれはしゃべって面白いけど……」

錆びてボロボロの外見である。どうせ使うなら綺麗な方がいいに決まっている。しかも、キュルケはこの剣をただでくれるというのだから……。

「嫉妬はみつともないわよ？ ヴァリエール」

キュルケは勝ち誇った調子で言った。

「嫉妬？ 誰が嫉妬してるのよ？」

「そうじゃない。サイトが欲しかった剣を私がなく手に入れてプレゼントしたもんだから、嫉妬してるんじゃないかって？」

「誰がよ！ やめてよね！ ツエルプストーの者からは豆の一粒だつて恵んでもらいたくない！ それだけよ！」

「この剣を鍛えたのは、ゲルマニアの錬金術師シュペー卿だそうよ？」

それからキュルケは熱っぽい流し目を才人へと送った。

「ねえ、あなた。よくって？ 剣も女も生まれはゲルマニアに限るわよ？ トリステインの女きたら、このルイズみたいに嫉妬深くて、気が短くて、ヒステリーでプライドばかり高くって、どうしようもないんだから」

ルイズはキュルケをキツと睨みつけ、

「へ、へんだ。あんたなんかただの色ボケじゃない！ ゲルマニアで男を漁り過ぎて相手にされなくなったから、トリステインまで留学してきたんでしょ？」

「言ってくれるわね。ヴァリエール……」

二人の雰囲気が一気に険悪なものへと変わる。  
お互いに杖を手にかける。

それまで、じつと本を読んでいたシャルロットが二人より早く杖をふる。

つむじ風が舞い上がり、二人の杖を吹き飛ばした。

「室内」

シャルロットは淡々と言った。

「タバサはどっちの剣がいいと思う？」

キュルケが当たり前のように自分の剣が選ばれると考え、シャルロットに聞く。

「煩い剣」

興味なさげに、しかしはつきりと答えた。

「ほら見なさい！ ヤマトもこの剣は業物だって言ってたんだから先ほどとは違って変わって自信満々にルイズが追い打ちをかける。」

「くっ！ でも、サイトは私の剣を気にいつてるわ」

シャルロットや大和まで、あの汚い剣を高く評価している事に驚くが、今更引き下がる事は出来なかった。

「本人に決めて貰いましょうよ！ どっちの剣を使いたいの？」  
キュルケは熱い、ただし真剣な眼差しで才人を見つめる

「え？ 俺が決めるの？」

「当然じゃないの！ 誰が使う剣のことで、揉めてると思ってるのよ！」

ルイズもぐつと睨みつけた。

才人は悩んだ。剣自体では、キュルケのくれたピカピカの剣に心が傾いている。

だが、ルイズはキュルケの剣を選んだら、才人を許さないだろう。さらに、大和やシャルロットまでもが、デルフの事を良い剣だと言っていた。

才人はルイズを見た。

この前、決闘騒ぎの後、自分を看病してくれた…。

生意気で高慢ちきだが、根は優しいルイズである。助けてくれた事を棚に置いて恩知らずは良くない。それに、容姿的にはルイズの方が好みである。

でも、キュルケだって、自分の為にあの高い剣を買ってくれたのだ。自分を好いてくれている女性を蔑ろには出来ない。

選べない……。どちらか一方の剣を選ぶという事は、すなわち、どちらかの女性を選ぶと言う事…。

「どっち？」

ルイズとキュルケが同時に念を押してくる。

「その、二本とも、つてだめ？」

才人はてへつと可愛く頭をかいた。二人に同時に蹴られて、床に転がった。

「ねえ、そろそろ決着をつけない？」

キュルケはルイズに向き直り、睨みつけた。



「そうね」  
ルイズも負けずと睨み返す。

「決闘よ！」

「やめとけと」

才人が呆れて言った。しかし、ルイズもキュルケも怒りを剥き出しにして睨みあい、才人の言った事など耳に届いていなかった。

本塔に張り付いていたフーケは、誰かが近付く気配を感じた。とんとと壁を蹴り、すぐに地面に飛び降りる。地面にぶつかる瞬間、小さく『レビテーション』を唱え、回転して勢いを殺し、羽毛のように着地する。それからすぐに中庭の植え込みに消えた。

中庭に現れたのはルイズ、キュルケ、シャルロット、そして才人だった。

「じゃあ、始めましょうか」

キュルケが言った言葉に、心配そうな顔の才人が反論する。

「本当に決闘なんてするのかよ…危ないからやめとけよ」

「確かに、怪我なんてするのはバカらしいわね」

「そうね」

キュルケの言った言葉にルイズが同意する。

シャルロットがキュルケに耳打ちする。

「あ！ それいいわね」

キュルケは微笑み、ルイズに囁く。

「あ！ それいいわ」

三人は同時に才人の方を向いた。

とても嫌な予感を感じながらも、才人は身動きが取れなかった。

「おい。本気か？ おまえら」

才人の情けない声が虚しく響き渡るが、誰も反応しない。

本塔の上から才人はロープで縛られ、吊らされ、空中にぶら下がっている。

遠く地面の上にはルイズとキュルケの姿が小さく見える。夜とはいえ、二つの月のおかげでかなり視界は明るい。塔の屋上には、シルフィードに跨ったシャルロットが事の成り行きを見守っていた。シルフィードの口には二本の剣が咥えられている。

「いいこと？ ヴァリエール。あのロープを魔法で切った方が勝ち。勝った方の剣をサイトが使うのよ」

「わかったわ」

緊張の面持ちでルイズが返答する。

「使う魔法は自由。私が後攻よ。それくらいはハンデでくれてやるわ」

「いいわ」

「では、どうぞ」

微笑を浮かべ、自分の勝ちを全く疑っていないキュルケだった。

ルイズが杖を構えると、シャルロットがロープを揺らし始める。  
『ファイアーボール』などの魔法は命中率が高い。動かない的であれば、簡単に当たってしまうのだ。

しかし、ルイズには系統魔法が使えない。

「エクセレント・ボム」

詠唱もなく、ただ一言を叫んだ。

系統ではないエネルギーの塊が才人を目指して突き進む。大和やシャルロットとの訓練は伊達ではない。初陣も経験した。真っ直ぐに才人を縛ったロープに当た……らず、その後ろの壁を破壊してしまった。

しかし、爆発の威力が物凄く、爆風による壁の破片でロープも切断された。

「…私の勝ちね」

いまいち、予定と違ったが、勝ちも勝ちである。

「何が、勝ちなのよ！ 魔法は当たってないじゃない！」

「魔法の結果、ロープが切れたんだから、私の勝ちよ！」

再び二人の言い合いが始まり、地面に落ちていく才人を完全に忘れていた。

素早くシャルロットが才人にレビテーションをかけ、安全に地面へと下ろした。

フーケは植え込みの陰で一部始終を見ていた。ルイズの魔法で宝物庫当たりの壁が半壊しているのを見届ける。

フーケは薄く笑い、千載一遇のチャンスであるこの時を見逃さなかつた。長い詠唱を唱え、地面に杖を向けると、音を立て地面が大きく盛り上がった。土くれのフーケがその本領を發揮した瞬間だった。

「今のは無効よ！」

「何言ってるのよ！ 私の勝ちじゃない！」

「それより、ロープを解いてくれないか……」

才人のお願いにルイズが近づいていく。その時背後で巨大な何かの気配を感じ、振り返る。

その存在を目に入れた三人は、我が目を疑った。

「な、なによこれ！」

キュルケはパニックを起こし、その場から走って逃げてしまった。

才人は起き上がろうとするが、ロープで縛られたままのため、なかなか思うように動けないでいた。

我に返ったルイズが才人に駆け寄る。

「なんで、縛られてるのよ！ あんたは！」

「お前らが、縛ったんだろっが！」

急いでロープを解こうとするが、焦りでうまく解くことができない。すると、影が二人を覆った。

見上げるとゴーレムの巨大な足が二人を踏みつけようと下ろされるところだった。

「ルイズ！ 逃げろ！」 才人は叫んだ。

「く！ このロープ……」

ルイズは一生懸命にロープを解こうともがいている。ゴーレムの足が下りてくる。才人は目をつぶった。

間一髪、シルフィードを操るシャルロットが滑り込み、才人とルイズをシルフィードが両足に掴み、ゴーレムと地面が接触する隙間をすり抜ける。

才人たちのいたところに、ずしん！と音を立て、ゴーレムの足がめり込む。

「何だよあれ…反則じゃねーか」

震えた声で才人が感想を述べる。

「あんなに大きなゴーレムなんて、始めてみたわ」

驚愕の表情を張り付けたルイズが答える。

才人は先ほどのルイズの態度を思い出す。危険を顧みず、才人のロープを解こうとしてくれたことを…。

「なんで、お前は逃げなかったんだよ」

ルイズはきっぱりと言った。

「使い魔を見捨てるメイジは、メイジじゃないわ」

才人は黙ってルイズを見つめた。なんだか、とてもルイズが眩しく見えた。

フーケはここぞとばかりに、ゴーレムへ命令を放つ。

巨大なゴーレムはその重量を乗せた拳を宝物庫へと叩きつけた。フーケはインパクトの瞬間にゴーレムの拳を鉄へと連金し、見事に宝

物庫の壁を破壊することに成功した。

宝物庫に侵入したフーケは『破壊の杖』を奪い、去り際に『破壊の杖、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』と壁に刻んだ。

翌朝……。

トリステイン魔法学院では、昨夜からの蜂の巣をつついた騒ぎが続いていた。何せ、秘法の『破壊の杖』が盗まれたのである。それも、巨大なゴーレムが、壁を破壊するという大胆な方法で。

「ミセス・シュヴールズ！ 昨日の当直はあなたでしたね！」

「申し訳ありません」

シュヴールズは涙を浮かべ頭を下げた。まさか魔法学院に盗みに入る輩がというようなとは、夢にも思っていなかったため、部屋でぐうぐう寝ていたのだ。

「泣いたって、お宝は戻ってこないのですぞ！ それとも貴方が弁償しますか？」

「これこれ、女性を苛めるものではありません」

そこに、オスマンが現れ、口論に割って入った。

「しかしですな！ オールド・オスマン！ ミセス・シュヴールズは当直なのに、ぐうぐう自室で寝ていたのですぞ！ 責任は彼女にあります」

「ミスタ……、なんだっけ？」

「ギトーです！ お忘れですか！」

「そうそう。ギトー君。そんな名前じゃったな。君は怒りっぽくていかん。さて、この中でまともに当直をしたことのある教師は何人おられるのかな？」

オスマンは辺りを見回した。教師たちはお互い、顔を見合わせると、恥ずかしそうに顔を伏せた。名乗り出る者はいなかった。

「さて、これが現実じゃ。責任があるとするなら、我々全員じゃ。この中の誰もが……、もちろん私も含めてじゃが……、まさかこの魔法学院が賊に襲われるなど、夢にも思っていなかった。何せ、ここにいるのは、ほとんどがメイジじゃからな。誰が好き好んで、虎穴に入るのか？ ちゅうわけじゃ。しかし、それは間違いじゃった」

集まった教師は、バツの悪い表情で押し黙った。

「で、犯行の現場を見ていたのは誰だね？」

「この三人です」

コルベールが、ルイズ、キュルケ、シャルロットを指差した。

「ふむ……、君たちか。詳しく説明してくれ」

ルイズが進み出て、見たままを述べた。

「大きなゴーレムが現れて、壁を壊したんです。肩に乗ってた黒いローブを着たメイジが、宝物庫の中から何かを……、その『破壊の杖』だと思えますけど……、盗み出した後、またゴーレムに乗って敷地の外へ逃げて行きました。後を追いましたが、少し行っただけで土の塊だけが残されて、黒いローブのメイジは見当たりません」

でした」

「ふむ……後を追おうにも、手がかりはなしというわけか……」

「オールド・オスマン。フーケと思わしきメイジの居場所がわかりました」

今まで姿の見えなかったロングビルが現れ、調査の結果アジトが判明したと報告した。

「そこは、近いのかね？」

「はい。徒歩で半日。馬で四時間といったところでしょうか」

「すぐに王室に報告しましょう！ 王室衛士隊に頼んで、兵隊を差し向けてもらわなくては！」  
「コルベールが叫んだ。」

「ばかもの！ 王室なんぞに知らせている間にフーケは逃げてしまおうわ！ 魔法学院の宝が盗まれた！ これは魔法学院の問題じゃ！

当然我らで解決する！」

年寄りとは思えない迫力でオスマンが怒鳴る。

「では、搜索隊を編成する。我と思う者は、杖を掲げよ」  
誰も杖を掲げない。困ったように、顔を見合わすだけだった。

「おらんのか？ おや？ どうした！ フーケを捕まえて、名を上げようと思う貴族はおらんのか！」

ルイズは俯いていたが、それからすつと杖を顔の前に掲げた。



「ミス・ヴァリエール！ 何をしているのです！ 貴方は生徒ではありませんか！ ここは教師に任せて……」  
シュヴェールズが驚いた声を上げた。

「誰も掲げてないじゃないですか」  
ルイズは唇を強く結んで言い放った。唇を軽く『への字』に曲げ、真剣な目をしたルイズは凛々しく、美しかった。才人は口をぽかんと開けて、そんなルイズを見つめていた。

ルイズが杖を掲げるのを見て、しぶしぶキュルケも杖を掲げた。

「ツエルプトー！ 君まで！」  
今度は、コルベールが驚いた声を上げる。

「ふん。ヴァリールには負けられませんわ」

二人が杖を掲げるのを見ていたシャルロットは、無表情のまま、自らの杖を掲げた。

「タバサ。あんたはいいのよ。関係ないんだから」  
キュルケがそう言うと、シャルロットは短く答えた。

「心配」

「ありがとう……。タバサ……」

三人の様子を見て、オスマンは笑った。

「そうか。では、頼むでしょうか」

「オールド・オスマン！ 私は反対です！ 生徒たちをそんな危険

にさらすわけには!」

「では、君が行くかね? ミセス・シュヴールズ」

「い、いえ……、私は体調がすぐれませんので……」

「彼女たちは、敵を見ている。その上、ミス・タバサは若くしてシユヴァリエの称号を持つ騎士だと聞いているが?」

シャルロットは返事もせずに、何時ものように無表情でたっている。教師たちは驚いたようにシャルロットを見つめた。

「本当なの? タバサ」

キュルケも驚いている。王室から与えられる爵位としては、最下級の『シユヴァリエ』の称号であるが、シャルロットの年でそれを与えられるというのが驚きである。

男爵や子爵の爵位なら、領地を買うことでも手に入れることが可能であるが、『シユヴァリエ』だけは違う。純粹に業績に対して与えられる爵位……、実力の称号なのだ。

「ミス・ツェルプトーは、ゲルマニアの優秀な軍人を数多く輩出した家系の出で、彼女自身の炎の魔法も、かなり強力だと聞いているが?」

キュルケは得意げに髪をかきあげた。

それから、ルイズが自分の番だとばかりに可愛らしく胸を張った。オスマンは困ってしまった。褒めるところがなかなか見つからなかったのだ。

「その……、ミス・ヴァリエールは数々の優秀なメイジを輩出したヴァリエール公爵家の息女で、その、うむ、なんだ、将来有望なメ

イジと聞いているが？ しかもその使い魔は、平民でありながらあのグラモン元帥の息子である、ギーシュ・ド・グラモンと決闘して勝ったという噂だが」

オスマンは思った。彼が、本当に、本当に伝説の『ガンダールヴ』なら……。土くれのフーケに、後れを取ることはあるまい。

「この三人に勝てるという者がいるのなら、前に一歩出たまえ」  
誰もいなかった。オスマンは才人を含む四人に向き直った。

「魔法学院は、諸君らの努力と貴族の義務に期待する」

ルイズとシャルロット、キュルケは真顔になって直立すると「杖にかけて！」と同時に唱和した。それからスカートの裾をつまみ、恭しく礼をする。

「では、馬車を用意しよう。ミス・ロングビル。彼女たちを手伝ってやってくれ」

「もとよりそのつもりですわ」

四人はロングビルを案内役に、早速出発した。

深い森に入っただけしばらく進むと、馬車では通れない細い道へと行き当たる。

五人は徒歩で先へと進み、開けた場所へとたどり着いた。

「あの小屋が、フーケの隠れ家ってわけね」

森の開けた場所に、みすばらしい小屋が見えた。

才人が小屋へ近づき、中が無人であることを確認する。

「私は、森の方を調べてきます。近くにフーケがいるかもしれませ  
んので」

そう言っつて、ロングビルは一人、森の中へと入っていった。

「罨はない」

シャルロットが杖を振り、罨の有無を確かめた。

ルイズは見張りをするといい、小屋の外に残った。

小屋に入った才人たちは、フーケが残した手がかりはないかと室内  
を探す。

そして、シャルロットがチェストの中から……。

「破壊の杖」

見事にお宝を探し当てたのだった。

「呆気ないわね」

才人はその『破壊の杖』を見た瞬間、目を丸くした。

「お、おい。それ、本当に『破壊の杖』なのか？」

「そうよ。私見たことあるもの。宝物庫を見学したとき  
キュルケが頷いた。」

「そんな…、どうして、これがココにあるんだ？」

その時、外で見張りをしていたルイズの悲鳴が聞こえた。

「きゃあああああああー！」

「どうした！ ルイズ！」  
一斉にドアを振り向いたとき……。  
“ばこーん”と良い音を立てて、小屋の屋根が吹き飛んだ。  
屋根がなくなつたおかげで、空がよく見えた。そして青空をバックに、巨大なゴーレムの姿があつた。

「ゴーレム！」 キュルケが叫んだ。

シャルロットが真つ先に反応する。  
素早く詠唱を唱え、杖を振ると、巨大な竜巻が舞い上がる。ゴーレムを包むように荒れ狂うが、びくともしなかつた。

キュルケが胸にさした杖を引き抜き、呪文を唱える。

杖から炎が伸び、ゴーレムを火炎に包んだ。しかし、炎に包まれようが、ゴーレムはまったく意に介さない。

「無理よこんなの！」 キュルケが叫んだ。

「退却」

短くシャルロットが言い、キュルケとシャルロットはゴーレムから距離を取つた。

才人はその場に留まり、ルイズの姿を探す。  
ゴーレムの背後に立ったルイズは杖を振る。右足を三分の一ほど破壊するが、すぐに修復されてしまう。ルイズに気付いたゴーレムが振り向く。

「逃げろ！ ルイズ！」

才人が怒鳴り声を上げる。

「いやよ！ あいつを捕まえれば、誰ももう、私をゼロのルイズとは呼ばないしょ！」

ルイズは唇を噛みしめ、真剣な眼差しでゴーレムを睨みつける。

「あのな！ ゴーレムの大きさを見る！ あんなヤツに勝てるワケねえだろ！」

「やってみなくちゃ、わかんないじゃない！」

「無理だっつの！」

「私は貴族よ。魔法を使える者を、貴族と呼ぶんじゃないわ。敵に後ろを見せない者を、貴族と呼ぶのよ」

ルイズは杖を握りしめ、魔法を放った。しかし、やはりゴーレムはびくともしなかった。

ゴーレムが足を振り上げ、ルイズの視界は土の塊に覆われる。ルイズは目を瞑った。

才人は剣を構え、ルーンが放つ光を引きながらルイズを抱え、地面を転がった。

先ほどまでルイズのいた場所に、ゴーレムの足が叩きつけられた。

「死ぬ気か！ お前！」

才人は、思わずルイズの頬を叩いた。

ルイズは茫然と才人を見つめ、涙を流した。

「……、泣くなよ」

「だって、悔しくて……。わたし……。いつもバカにされて……。」  
目の前で泣かれて、才人は困ってしまった。ギーシュとの決闘騒ぎの時も、ぼろぼろと泣いたことを思い出した。ルイズは気が強くて、生意気だけど……。本当はこんな戦いなんか嫌いで…苦手な、ただの女の子なのだ……。

ルイズは端正な顔をぐしゃぐしゃに歪めて泣いていた。子供みたいだった。

何か、かける言葉はないかと考えるが、そんな時間を与えてはくれなかった。

ゴーレムが巨大な拳を振り上げていた。

「少しはしんみりさせるよ」

才人はルイズを抱えて走り出した。

シルフィードに跨ったシャルロットが、二人を助ける為に飛んできた。才人とルイズの目の前に着地する。

「乗って」

シルフィードに跨ったシャルロットが叫んだ。才人はルイズをシルフィードの上に押し上げた。

「あなたも早く」

シャルロットが、珍しく焦ったように言った。

しかし、才人はシルフィードには乗らずに、迫りくるゴーレムに向き直った。

「サイト！」

シルフィードに跨ったルイズが怒鳴った。

「早く行け！」

シャルロットは無表情で才人を見つめていたが、追いついてきたゴーレムが拳を振り上げるのを見て、やむなく上空へと舞い上がった。

「悔しいからって泣くなよバカ。何とかしてやりたくなるじゃねえかよ」

拳を避けた才人は、キュルケにもらった剣を構え、ゴーレムの手を切りつけた。

“キーン” 甲高い音を立て、半ばから剣が折れた。

「な？ 何がゲルマニアの錬金術師シュペー卿の鍛えた剣だよ！」

剣をデルフリンガーに持ち替え、再び剣を構える。

「サイト！ お願い、サイトを助けて！」

ルイズが涙目でシャルロットに懇願する。

「近寄れない……」

ゴーレムの上空を旋回しながら、様子を窺うが、振り回される拳により、近づくことが出来ずにいた。

才人がゴーレムを切りつけるが、すぐに修復してしまったため、大したダメージを与えることができない。しかし、足元を動き回る才人を気にしてか、上空に隙が出来るようになった。

シルフィードを操り、上空からゴーレムに近づき、魔法を浴びせる。様々な魔法を行使するが、ゴーレムはびくともせず、腕を振り回す。

ゴーレムの攻撃が激しくなり、一度離れようとシルフィードを操る。



次の瞬間、ゴーレムの拳が襲いかかった。

かわせるタイミングではなく、唸りを上げて巨大な拳が目の前を埋める。

「きゃあああああ」

ルイズとキュルケの悲鳴が木霊し、シャルロットは風のバリアを張り、衝撃に備える。バリアがあっても、無傷で済むような攻撃ではなかった。

突然、風がゴーレムを押し戻し、バランスを崩したゴーレムは後ろ向きに倒れこんだ。

「ヤマト！」

「え？ どこに？」

シャルロットの短い言葉に、キュルケとルイズは周囲を見渡すが、大和の姿を見つけることは出来なかった。

しかし、シャルロットは今の風を大和が放ったものだと確信していた。

「タバサ？ あなた笑ってるの？」

シャルロットは薄く微笑を浮かべていた。どこからか、大和が見てくれている。姿を現わせないのか、信用してくれているのか、判断できないが、シャルロットの中から恐怖と焦りが消えていた。

「二人とも、魔法を！」

無表情に戻ったシャルロットは短く指示を飛ばす。

「でも、すぐに回復されちゃうよ……」  
今までの攻撃が、全く意味をなしていないことから、二人とも自信をなくしていた。

「いいから」

シャルロットの鋭い言葉に、キュルケとルイズが魔法を放つ。  
キュルケの魔法が当たった個所が砕け、土埃が舞う。しかし、すぐに修復されてしまう。

ルイズの魔法がゴーレムの右手を半ばまで破壊する。同じように修復されると思われたが、砕けた部分が凍りつき、修復できないままだった。

シャルロットがタイミングを合わせて凍らせたのだった。

それを見たキュルケとルイズは合わせるように、同じ場所を狙って魔法を放つ。

ゴーレムの右手は肘から下が吹き飛び、断面を凍らされた為に修復できず、そのまま短くなった右手を振り回すだけだった。

「タバサ！」

上空での戦いを見た才人は、シャルロットに声をかけると剣を掲げて、ゴーレムの右足首を水平に切断した。

才人の声を聞いたシャルロットは、才人の真意を正確に理解し、切断された切り口を魔法で凍らせた。

右足を失ったゴーレムは、右へと傾き、そのまま倒れこむ。チャンスとばかりに、才人が残った左手を破壊する。

シャルロットは長く詠唱し、ゴーレムの胸に向けて杖を振った。

巨大な『凍りの槍』が勢いよく放たれ、ゴーレムの胸に突き刺さる。

そのまま、ゴーレムを地面に縫い付けた。

氷の槍を抜こうと暴れるが、両手を失ったゴーレムは徐々に緩慢となり、ただの土の塊になった。

少し時間を遡った森の中。

フーケとこ、ロングビルは木の陰から自分の作り出したゴーレムの戦いを見ていた。

見ている限り、大した時間も可からずに、自分のゴーレムが勝つだろうと確信していた。

ただし、フーケは余裕を持って見ているわけでもなかった。

今回の騒動は、使い方わからない『破壊の杖』の使い方を知るために仕組んだことであり、出来れば学院の教師が一人でもこの場に引っぱり出す予定だったのだ。

ただの生徒3人とその使い魔の平民を痛めつけても意味はないのだった。

しかし、生徒の中には有力貴族の子供が二人も来ており、追い詰めればあい、もしかしたら『破壊の杖』を使うのではないかと考えていた。

「な！ なに？」

ゴーレムの拳がちょこまかと逃げ回るシルフィードを捉えたかに見えた…しかし、突風によりゴーレムが後ろ向きに倒されたのだ。自然に起きた突風で30メートルはあろうかというゴーレムが倒れるわけがない。

「こんにちは。ミス・ロングビル」  
何時の間に背後を取られたのかも分からず、驚きと共に振り向くと、大和が立っていた。

「やっぱり、あんたか」

先ほどの風が、自然に起きたものではなく、大和が起こしたものと気づき、唇を噛みしめる。

「焦り過ぎじゃないのかな？ 土くれのフーケ…いや、マチルダと呼んだ方がいいのかな？」

笑顔を湛えたまま、大和が声をかけてくる。

「ッ！」

知らせてはいない本名を出され、舌打ちをする。自分が大和を調べていたように、大和もマチルダの事を調べていたのだと分かるが、どこまで知られているのか恐怖を覚えた。

「どこまで知られているのか、恐れるのも分かるが…俺は、貴方の味方だと言わなかったかな？」

「口だけで味方だと言われても、信用できると思うのかい？」

口ではそう言ったマチルダだったが、仮面の男が現れるまでは、信用する方に傾いていたのだった。

「ハーフェルフの妹さんのことを言ってるのか？」

「くっ！」

杖を構えるが、ゴーレムを作り出しているため、詠唱を唱えることはなかった。

「そんなに、構えないで欲しい。貴方が、俺の話を通るにしても、妹さんたちに手を出したりはしない。ただし、今後仲間の前に立ちふさがった時は、容赦しない」  
あくまで、冷静に、笑顔すら消さずに大和は言った。

「…前も聞いたけど、あなたに何の得があるんだい？」

「損得で納得すると言っのなら……。そうだな、領地に優秀な人材が増える。まあ、建前としてはそんなところかな？」

「建前じゃない本音は？」

「…気持ちかな…。マチルダのやってることは、世間的には悪だが、弱い者いじめをしているわけじゃない。贅沢がしたくてやってるわけじゃない。自分の子供を養っているわけでもない。そんなマチルダに平穏な生活を送ってもらいたい。怖がられて、外を知らない妹さんに、外の世界を知ってもらいたい。そんな気持ちかな」

「……変な奴だと思っていたけど、ここに極まった感じだね」

「この世界が変なんだと思うが…。確かに、俺が変わっているともとれるのかな」

「あなたは、エルフが怖くないのかい？」

自分のやってる事を、肯定するわけではない。だが、受け入れてくれる懐の深さに偽善も感じない。そんな大和のことを信じてみようと思っ始めていた。

しかし、エルフの事を怖がらない人間が皆無なることを知っている。大和が、妹のことを知っていてなお、助けてくれるというのがわか

らなかった。

「魔法を使えない平民からすれば、魔法の使える貴族や先住魔法の使えるエルフは同じように脅威だろ？ 力が怖いんじゃない。心が怖いんだ。マチルダが守ろうとする妹さんが力に溺れるようなことはいないと信じられる」

「…わかった。妹と子供を助けて下さい」  
マチルダは真剣な表情で大和に頭を下げた。

「いや、マチルダも含めて…ね？ それに、俺が助けるんじゃない、今までマチルダが守ってきた者全てをこれからも守るために、手伝うだけだよ」

少しの間、マチルダは涙を流し、力強く頷いた。

一度に子供たちを移動させるのは難しいため、少しずつ移住させるか、一度に移住させるタイミングを待つてから決行するか。現在、レコンキスタがアルビオンで不穏な動きを見せているため、様子を見ることになった。ロアンとも相談してから、準備を進めることにした。

レコンキスタ側が、子供たちの居場所を突き止めているかわからないため、マチルダは念のためにこのまま協力し、情報を探ることにした。

ざっと方針を決め、シャルロットたちの元へと向かった。

「「「「ヤマト！」「」」」」

ルイズ、キュルケ、才人の三人が驚きの声を上げる。

シャルロットは無表情に大和にテクテクと近づき、胸に抱きついた。

「え？ あれ？ タバサさん？」

シャルロットの意外な行動に思考が固まり、次の言葉が出てこない。

「ありがとう」

「流石にタバサには気づかれたか……」

ゴーレムを転倒させた時以外も、危険な攻撃が当たりそうな時には風を操り、防いでいたのだった。気づかれないように、最小限の手助けしかしなかったが、一緒に依頼をこなすことの多かったシャルロットには気づかれたようだった。

「……ん、んうん。ところで、なんでヤマトがココにいるのよ？」

咳払いを一つして、キュルケが聞いてくる。

「学院に戻ったら、5人だけでフーケを探しに出たって聞いたから、急いで追いかけたんだ。上空からゴーレムが見えて、優勢だったから、フーケを探してたんだ。そしたら、ミス・ロングビルと出会って、フーケも見つけて追っただけで、上手いこと逃げられたよ」

「……ヤマトから逃げ切るって」

大和の実力の一端を知るキュルケとルイズが信じられないと顔を青くする。

二人よりも大和の実力を知るシャルロットは、大和が嘘を言っている事に気付いたが、必要のない嘘を大和が付くはずがない事も理解

しており、見つめるだけで何も言わなかった。

「ところで、何時までそうしてるんだ？」

才人が冷たい目で大和を見つめる。他の三人も『ジト目』で見つめる。

「いや、えっと、タバサさん？」

「……………」

胸の辺りから見上げてくるシャルロットに言葉を失う。

「と、取り合えず、学院にもどろつか」

離れようとしないシャルロットを抱えるようにして、馬車へと逃げるように走り去った。



第2章・15話：盗賊と変な奴…（後書き）

ほぼ原作通りでお送りしております…

原作を読んでない方もいるかな？と思うと飛ばせなかった…

大和の出番が少ない回ですが、ニヤニヤ度は上げ気味で（笑）

駄文とお付き合い、ありがとうございました。

第2章・16話：舞踏会と二組のダンス（前書き）

セラです。

朴念仁のヤマトを何とかするのが私の使命！

って勝手に決めてます！

しかし、手ごわ過ぎる……。

最近、私の出番が少ないのは気のせいですか？

## 第2章・16話：舞踏会と二組のダンス

28、舞踏会と二組のダンス

『破壊の杖』の奪取に成功した5人は無事学院へと戻り、すぐに学院長室へと通された。

「そうか、フーケには逃げられたか…しかし君たちは『破壊の杖』を取り戻してくれた。心から礼を言う。それと、君たちには精霊勲章の授与を申請しておいた。フーケを捕まえたら『シユヴァリエ』の受賞も出来たのじゃが…」

「あの…サイトには、何もないのでですか？」  
ルイズがオスマンに尋ねる。

「残念ながら、彼は貴族ではない。使い魔にまで勲章の授与は無理じゃろう」

使い魔である才人は、ルイズが使役したとしか取られないのだった。

「何もいららないですよ」

才人が言った後を継いで、大和が言葉を述べる。

「私は全てが終わった後に合流しただけです、辞退させていただきます」

才人の活躍が認められないのに、少し風を操っただけの自分が褒美を貰おうとは思わなかった。

「いや、すでに申請してしまった」

「だから、辞退と言ったのです」

「君が言いだしたら、引かないのだろうね……」  
オスマンが諦めたように大和を見る。

「ええ」

「わかった。申請を取り消しとこう」

「ありがとうございます」

「さてと、今日の夜は『フリッグの舞踏会』じゃ。このとおり、『破壊の杖』も戻ってきたし、予定通り執り行う。今日の舞踏会の主役は君たちじゃ、用意をしてきたまえ。せいぜい、着飾るのじゃぞ」  
女性三人が礼をするとドアに向かった。

その場から動かない男性二人を、ドアに向かった三人が振り返る。

「先に行つていいよ」

「ちよつとオールド・オスマンと話があるんだ」  
才人、大和が続けて女性陣に言った。

ルイズは心配そうに才人を見つめるが、そのまま部屋を出て行った。

「何か、わたしに聞きたいことがおありのようじゃの」  
オスマンが雰囲気を察し、才人へと向き直った。

才人は頷いた。

「言つてごらんさい。出来るだけ力になるう」

「あの『破壊の杖』は、俺が元いた世界の武器です」

オスマンの目が光った。大和をちらりと見て、才人に向き直る。

「ふむ、元いた世界とは？」

「俺は、こつちの世界の人間じゃない」

「本当かね？」

再び、大和の方を見て確認をする。

「才人は、俺と同じ世界からこつちに召喚されたんです。才人と話をしましたが、間違いありません。それと才人、オールド・オスマンは俺の事を話してるから、気にせず話をしてくれ」

「そつか、じゃあ話が早いな。あの『破壊の杖』は、俺たちの時代の武器だ。あれをここに持ってきたのは、誰ですか？」

オスマンは溜め息をつき、話し出した。

「あれを私にくれたのは、私の命の恩人じゃ」

「その人はどうしたんですか？ その人は、俺と同じ世界の人間です。間違いない」

「死んでしまった。今から、三十年も前の話じゃ」

「なんですって？」

「三十年前、森を散策していた私は、ワイバーンに襲われた。そこを救ってくれたのが、あの『破壊の杖』の持ち主じゃ。彼は、もう一本の『破壊の杖』で、ワイバーンを吹き飛ばすと、ぼったりと倒れおった。怪我をしていたのじゃ。私は彼を学院に運び込み、手厚く看護した。しかし、看護の甲斐なく……」

「死んでしまっただんですか？」

オスマンは頷いた。

「私は、彼が使った一本を彼の墓に埋め、もう一本を『破壊の杖』と名付け、宝物庫に仕舞い込んだ。恩人の形見としてな……」

オスマンは遠い目になった。

「彼はベッドの上で、死ぬまでうわごとのように繰り返しておった。『ここはどこだ。元の世界に帰りたい』とな。きつと、彼は君と同じ世界から来たんじゃないかな」

「いったい、誰がこっちにその人を呼んだんですか？」

「それはわからん。どんな方法で彼がこっちの世界にやってきたのか、最後までわからなかった」

「くそ！ せつかく手がかりを見つけたと思ったのに！」

才人は嘆いた。見つけた手がかりは、あっという間に消えてしまった。

「才人、諦めるのは、まだ早いな。この『破壊の杖』以外にも、俺たちの世界から色々な物がこっちの世界に流れてきてるんだ。この

日本刀もそうだし、昨日は『浴衣』も見つけた。きっと、向こうへ帰る方法が見つかるさ」

「そうだな……。人ごと見たいに言うけど、大和は帰りたくないのか？」

「ああ、向こうに家族も居ないしね。この世界で『やらなければならぬ』ことも見つけた。この世界の未来を見てみたいと思ってるよ」

この世界の未来と言った大和だが、一人の少女が頭の中に浮かんでいた。

「それと、オールド・オスマン。オ人のルーンについて何か知りませんか？」

「そうそう、俺もそれを聞きたかった。この文字が光ると、何故か武器を自在に使えるようになるんです。試しに『破壊の杖』と呼んでいるロケットランチャーを持ってみたら、使い方を理解できました」

オスマンは少しの時間躊躇したが、徐に口を開いた。

「……これなら知っておるよ。『ガンダールヴ』の印じゃ。伝説の使い魔の印じゃよ」

「伝説の使い魔の印？」

「そうじゃ。その伝説の使い魔はありとあらゆる『武器』を使いこなしたそうじゃ」

「……どうして、俺がその伝説の使い魔なんか？」

「わからん」オスマンはきつぱりと言った。

「わからないことばかりだ」

「力になれんですまんの。ただ、これだけは言っておく。私はおぬしの味方じゃ。ガンダールヴよ」

「いえ……」才人は疲れた声で返事をした。

「おぬしがどういう理屈で、こつちの世界にやってきたのか、私なりに調べるつもりじゃ。でも……」

「でも、なんです？」

「何もわからんでも、恨まんでくれよ。なあに。こつちの世界も住めば都じゃ。嫁さんだって探してやる」

才人は再び溜め息をつき、退室を告げて出て行った。

「オールド・オスマン。伝説の使い魔を召喚したルイズは虚無ですか？」

才人が退室しても、その場に残った大和が端的に疑問を投げかけた。

「……わからん。ただ、可能性は高いように思う」

「系統魔法のどれにも適性がない。しかし、魔力は誰よりも多い。そして、伝説の使い魔を召喚した。伝説というのは虚無の担い手が召喚した使い魔という意味ですね？」

「ああ。そこまで気づいておったか。しかし、他言無用で頼むぞ。」



王家にでも知られば、戦争の道具にでもされかねん」

「わかっています。ルイズに血なまぐさい戦いは似合わない。シャルロットにも言えることですが……。力になれない自分が不甲斐ないですよ」

「いや、大和君はよくやってくれている。不甲斐ないのは私たち大人だ。これからも、あの子たちの事を頼む」

深く頭を下げたオスマンは、本当に申し訳なさそうだった。

アルヴィースの食堂の上の階が、大きなホールになっている。

すでに舞踏会の始まっている会場から少し離れたバルコニーで才人は杵にもたれてぼんやりと華やかな会場を見ていた。

「才人。こんなところで飲んだのか」

才人の姿を見つけた大和がワインのボトルを手にバルコニーへと歩いてきた。

「落ち込んでる真っ最中かな？」

「はあ。家に帰れるかも、と思ったのに……。思い過ごしだよ。飲まずにいられるか」

手に持ったグラスに残ったワインを一気に煽る。

「家に帰りたいたいと思える才人は幸せだな。でも、才人はルイズの事は嫌いかい？」

空になったグラスにワインを注ぎ、才人に話しかける。

「ルイズのこと……」

自分に対する扱いであつたり、プライドの高さなど、気に入らない事は多い。だが、才人の決闘の時に見せた涙や、時折見せる凜々しい横顔。

「嫌いじゃないかな……」

才人は少しはみかみながら答えた。

「この世界に呼ばれた事に、何かしらの意味があるはずだ。その意味なり使命を、ルイズと共に探す事で、帰る手段も見つかるともいれない。俺も協力するが、ルイズを守るのは才人、君だ」

「……どうせ、今すぐ帰れないからな、大和の言葉に乗せられるのも悪くない」

「フツ、素直じゃないな才人は」

「子供よね……」

「相棒はシャイだからな」

アルコールのせいか、照れているのか、顔を赤くしてグラスのワインを飲み干した。

バルコニーで三人と一本でくだらない話しをしていると、会場からどよめきが起きた。

二人で会場の方を振り返ると、ルイズが入ってきたところだった。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおな……り……り……」

ルイズは長い桃色かかった髪を、バレッタにまとめ、白いパーティードレスに身を包んでいた。肘までの白い手袋が、ルイズの高貴さ

をいやになるぐらい演出し、胸元の開いたドレスがつくりの小さい顔を、宝石のように輝かせている。

主役が全員揃ったことを確認した楽士たちが、小さく、流れるように音楽を奏で始めた。

ルイズの周りには、その姿と美貌に驚いた男たちが群がり、盛んにダンスを申し込んでいた。今まで、ゼロのルイズと呼んでからかっていたノーマークの女の子の美貌に気付き、いち早く唾をつけておこうというのだろう。

ホールでは、貴族たちが優雅にダンスを踊り始めた。しかし、ルイズは誰の誘いをも断ると、バルコニーへと近づいてきた。

「男二人で、何を話してるの？」

「世界情勢をちよつとね」

才人は茫然とルイズを見つめていた。言葉を発しない才人に変わって、大和が適当に返答する。

「何、黙ってるのよ？」

「あ、いや……」

ルイズに見とれていた才人は、声をかけられ、顔を朱に染めてしどろもどろになった。

「ルイズを惚れ直したんだろう」

大和がからかう様に返答すると、二人して俯いてしまった。

「おお、馬子にも衣装ってこのことか？」

デルフリンガーがルイズをからかう。

「うるさいわね」

ルイズはデルフリンガーを睨むと、腕を組んで首をかしげた。

「お前は、踊らないのか？」

才人は目を逸らしたまま言った。

「相手がいないのよ」

ルイズは手を広げた。

「いっぱい、誘われてたじゃねえかよ」

「流石に、俺でも気が付くが…。俺が言うのは野暮だな。才人、男から誘うものだぞ」

大和はそう言っつて、会場へと歩いていった。

「ヤマトに言われるつて相当なもんよ……」

呆れたようにセラが才人を一瞥し、大和の後を追った。

黙って手を差し伸べるルイズを見て、大和の言ったことに気付いた。

「俺と踊ってもらえるか？ルイズ」

礼儀や作法など何も知らない才人は端的にルイズをダンスに誘う。

ルイズの手を取り、会場の真ん中へと進む。

「そうは言っつても、ダンスなんかしたことねえよ」

才人がそう言っつと、ルイズは「私に合わせて」と言っつて、ステップを踏んだ。

見よう見まねで、ルイズに合わせて踊りだした。ぎこちない踊りで

はあったが、ルイズは才人に文句をつけるでもなく、澄ましてステップを踏んでいる。

「ねえ、サイト。帰りたい？」

「ああ。帰りたい。でも、どうしたら帰れるのか見当もつかねえからな。ま、しばらくは我慢するよ。それに、大和にも言われたからな」

「ヤマトが？　なんて？」

「ルイズを守るのは俺なんだってさ。それを了承しちゃった」

「ヤマトがそんなことを……」

少し考えてからルイズが再び口を開いた。

「ヤマトの守る人って、タバサかな？」

「大和の場合、タバサだけじゃなくって、親しい人全てって感じがするな。まあ、タバサが一番であることには変わりないと思うけど」

「ヤマトって不思議……。掴みどころがないって言うか、威張ったところがないし、なるべく目立たないように振舞ってる。そのくせ、私がバカにされたり、サイトが決闘で傷ついたりしたときには、自分の事のように怒るのよ？」

「大和は、人の痛みがわかる奴なんだと思う。人の事ばかり気にしてるくせに、自分の事は後回しなことか……。お人よしにもほどがあるけどな」

才人とルイズはお互いに笑いあい、たどたどしいダンスを続けた。

バルコニーから離れた大和は、シャルロットのいるテーブルへと向かっていった。

シャルロットは我関せずと言った感じで、黙々と食事をしていった。しかし、黒のパーティードレスを着たシャルロットは、普段とは違った高貴な雰囲気醸し出しており、遠巻きに声をかけようかどうか迷っている男たちの輪が出来ていた。無口、無表情なシャルロットであるため、相手にされないのではないかと、中々近寄れないのだった。

後ちよつとでシャルロットのいるテーブルに着くというところで、不意に声をかけられた。

「ミス・シエルファ。お一人ですか？」  
立ち止まり、声の方を向くと、五人の女子生徒が大和を見つめていた。

「あ、ああ」  
なぜ、声をかけられたのかわからず、口ごもる。

「それでしたら、私たちとご一緒しませんか？」

「だめ」  
大和を誘ってきた女の子が一瞬固まる。

何時の間にか大和の傍にシャルロットが来ており、否定の言葉を投げかけたのだった。

「ミス・タバサ。私たちが先に声をかけたのですが？」

表情は変わらないが、幾分声のトーンが下がっているように感じた。

「私の方が、先に約束してた」  
シャルロットは何時もと変わらない無表情であるが、声に迫力があつた。

五人の女の子たちは、後ずさりながらも大和に答えを求めるように見つめる。

「あ、ああ。ごめん、タバサの方が先約なんだ」

五人の女の子は悔しそうにタバサを睨み、ゆっくりと背を向けて歩いて行く。

その背中に「誘ってくれて、ありがとう。また今度ね」と大和が声をかけると、一斉に振り向き顔を赤らめた。

なぜ、振り向いたのかわからない大和は首を傾げていたが、シャルロットが袖を掴んで引きずるように自分のテーブルへと歩き出した。

「女の戦いを見たわ……。サイトには偉そうなこと言ってたのに、自分の事になると相変わらずの朴念仁なのよね……」

セラは、未だに顔を赤くして固まっている五人と、シャルロットに引きずられて行く大和を交互に見つめ、溜め息を吐いた。

不機嫌なシャルロットが、何時も以上の速さで食事を平らげていく。なぜシャルロットが不機嫌なのかわからない大和は、話しかけるタイミングを失い、黙々と食事をしていた。

「二人とも、舞踏会だと言うのに食べてばかりじゃ、勿体ないわよ」

男たちを引き連れてキュルケが近寄ってきた。

「ヤマト、暇なら私と踊らない？」

キュルケはシャルロットを一瞥し、いたずらな笑みを浮かべて大和をダンスに誘う。

周囲の男たちが不満の声を出す。殺気の込められた目線が大和に集中する。大和は穏便に断ろうと口を開きかけたが、先にシャルロットが反応した。

「だめ」

キュルケを真つ直ぐに見上げて言い放った。

「冗談よ。貴方達にはっぱをかけただけよ」

笑顔のままシャルロットを見返し、大和にウィンクをすると、何事もなかったかのように取り巻きを連れて離れて行った。

キュルケのウィンクの意味を理解した大和は、シャルロットに向き直り、片膝をついた。

「ミス・タバサ。もし宜しければ、私と踊っていただけませんか？」  
右手をシャルロットに差し出し、幾分緊張した面持ちでダンスに誘う。

「ええ。喜んで」

大和の手を取り、顔を赤くしたシャルロットが可愛い笑顔を見せた。

シャルロットの笑顔に、どきまぎしながらも手を引いて、ホールへと誘った。

シャルロットと踊るのは二回目だった。一回目の時はドキドキする



ような事もなく、平常心で踊れたのだが、今の大和には周囲を気にする余裕さえなく、ステップも才人を笑えないほどぎこちなかった。シャルロットも大和と目を合わせる事が出来ず、目線を大和の胸に固定している。しかし、チラチラと大和の顔を窺っていると、不意に大和と目線が合ってしまう。二人して顔を赤らめ、視線を外す。そんなことを繰り返し、ぎこちないダンスを飽きることなく踊った。

「世話の焼ける二人ね……」

「本当にね……」

大和とシャルロットを見ながら、キュルケとセラが溜め息を吐いた。

第2章・16話：舞踏会と二組のダンス（後書き）

連投！（短いけどね…）

ニヤニヤに持っていくと、書きやすい！><

原作を無視して、ニヤニヤ小説に……（笑）

基本さえ押さえればいいよね？

駄文にお付き合い下さり感謝です。

## 第2章 挿話1（前書き）

この話は冬の話ですので、10話と11話の間という設定です。

無理やりな感じと、久しぶりの投稿でグダグダですがご勘弁を…

謝罪は後ほど。

## 第2章 挿話1

クリスマスと誕生日 前編

ウインの月、エオローの週、ダエグの曜日。

シエルファでは町も城も煌びやかな飾り付けが成されていた。

何が行われようとしているのかというと、クリスマスと言う名のシエルファ聖誕祭である…逆か？

なぜハルケギニアでクリスマス？ と考える方が多いかと思われるが、それを語るには少し時間を遡らなければならない。

「大和の誕生日って何時？」

シエルファ城の執務室で一仕事終え、大和、シャルロット、セラ、シルフィードの4人でお茶を楽しんでいたとき、会話の流れでのシャルロットの発言であった。

「うん。俺の誕生日？ 12月25日だから、こっちで言うところの…ウインの月、テイワズの週、ユルの曜日か虚無の曜日位かな？」  
現世で言う12月25日を無理やりハルケギニア暦に当てはめると、大体その位じゃないかと思ったり、大和が答える。ぶっちゃけ、ハルケギニア暦だと、1年が384日あるため地球の1年を当てはめることが出来ないのだ。

「ソングツ、向こうでは誕生日ってどんなことをするのね？」  
シルフィードがクツキーを頬張りながら大和に聞いてくる。

「一般的にはケーキに蝋燭を年齢の数だけ立てて炎を灯して、祝われる人が炎を吹き消したり、祝う側の人が歌を歌ったり、プレゼントを上げるとかかな？」

「じゃあー来月には大和の誕生日会をしよう」  
セラが大和の周りを飛びながら提案してくる。

「この年になってまでお誕生日会なんて恥ずかしいだけだよ」  
苦笑いの大和は過去の自分の誕生日を思い出す。  
7歳までは家族に、8歳からは妹一人に祝ってもらえた。  
しかし、年末というのは怨霊であったり、悪鬼などの事件が多くゆつくりと家に居たためしかなかった。

「何歳になっても誕生日は大切な日だよ　私はヤマトの誕生日を祝いたいな」  
セラが歌うように言いながら大和の正面に回る。

「私も祝う　お姉さまも一緒」  
つられてシルフィードも囁し立てる。

「大和は祝われたくないの？」  
少し寂しそうにシャルロットが問いかける。  
大和の表情にほんの少し寂しさが見えた気がしたのだ。

「んー向こうでは俺の誕生日が神様の使い？　って言われてる人の誕生日と被っててさ、俺の誕生日よりそっちの話題の方が大きくて忘れられ勝ちになるもんだから慣れてないんだ」  
事実ではあるが、大和の事情とは関係ないことを誤魔化すように話した。

「神様の使い？」

シャルロットは小さく首を傾げ、疑問を口にする。

大和の世界に興味を持ったシャルロットは、事あるごとに地球について歴史を聞いていたため、頭の中に『ブツタ』『キリスト』『ユダ』などの名前が浮かんでいた。

「ああ、キリストの生まれた日が12月25日って言われていたんだ。そして、キリストの誕生日をクリスマスと違って、盛大に祝うんだ。まあ誕生日に託けて騒ぎたいだけのお祭りだったけどね」  
簡単に説明し、冷めた紅茶に口をつける。

”コンコン”

そんな時、執事長を務めるシエルトが訪ねてきた。

「大和様、急務の書類をお持ちしました」  
許可を得て執務室へと入ってきたシエルトは大量の書類を抱えていた。

「…夜までに終わるかな…」

ゲンナリした大和が両肩を落として書類を受け取る。

「……………邪魔しちゃ悪いし、席をはずす」

シャルロットが気を利かせたのか席を立ち上がった。

「ああ、ごめんね。早く終わらるから」

「何なのね？ 何で引つ張るのね？」

「何？ 痛い痛い！」

シャルロットがシルフィードの手を引き、セラを掴んで退室してい

く。

急ぎ退室する3人を見送り、書類の山をシェルトと共に片付けていく大和だった。

「痛いってば、シャルロット！」

「お姉さま！　なんでそんなに急いでるのね？」

無理やり連れ出された2人はシャルロットに文句を言うが、それに構わずシャルロットは自室へと向かった。

「来月大和の誕生日会をする」

自室へと入り、直ぐにシャルロットが声を上げた。

「良いんじゃない？　で、この3人でお祝いするの？」

セラが直ぐに賛成する。

「私も賛成なのね。お兄様のお誕生会〜ルルル〜楽しみなのね」  
シルフィードも賛成し歌いだした。

「大和の誕生会と領地の生誕祭を一緒にする」  
思案顔のシャルロットが考えを口にし、聞いた2人は驚いた顔をする。

「シャルロット…あなたがそんなことを考えるなんて、やるじゃない  
い」

「お姉さま、流石なのね　皆でいっぱいお祝い出来るのね」  
セラ、シルフィード共に笑顔で賛成する。

ここからの準備は怒涛と言える速さで進んでいった。

セラがメイド長や、文官長などの領地の首脳陣に相談した。

3人が思っていた以上にノリノリな首脳陣は強引に大和の許しを得て城下に立て札を掲げると共に、ロアンへの報告を行った。

1ヶ月という時間で如何に盛り上げるか。

この点で、地球でのクリスマスに近づけるのはどうか？　という意見がセラから出されると、大和への質問という名の尋問により情報収集が行われた。

「もうちょっと右だ〜〜！　そう、そのままゆっくり降ろせ〜」

「飾りが足りん！」

「こっちにも持ってきて〜！」

クリスマスまで1週間という時期、シャルファ城やホートスの町はこれでもか！　と言うほど飾りつけが成され、クリスマスツリーまで出現していた。

学院が冬休みとなり、シエルファへと帰ってきた大和達4人はこの状況を見て唯唯啞然とした。

流石にやり過ぎではないかとフランに尋ねたが、「この飾り付けは始祖の降臨祭にも使う」という事で問題ないと言われてしまった。

大和は書類仕事があるため、執務室に缶詰。



シャルロットは自室に籠っていた。

「……………」  
物音の殆どしない室内ではシャルロットが机に向かい、マフラーを編んでいた。

学院でも自室に籠って作業していたため、8割がた完成していた。

大和へのプレゼントを何にしようかと悩み、キュルケに相談した際に「ん〜ヤマトなら何でも喜ぶと思うけど、手作りなんかどう？」とアドバイスを貰い、マフラーを編むことにしたのだった。

（大和は喜んでくれるかな…）  
頬を朱に染めて大和に渡すことを考えていたシャルロットの手元は止まっていた。

セラ&シルフィードは大和へのプレゼントを用意するため、ロアン  
の元へと訪れていた。

自分達だけでは碌な物を準備できないと考えた2人が土のメイジで  
手先の器用なロアンに頼ったためであった。

「という事で、お揃いのネックレスでも用意しようと考えたのよ。  
で、ロアンに4つほど作ってもらいたいの」

「何がどうい訳か分からないが…君達2人が大和の事を大切に思  
っていることだけは伝わりますね」

いきなり切り出したセラの言葉に、からかうようにロアンが切り返  
した。

顔を赤く染める2人を見て、ニヤニヤしながらデザインを話し合っ  
た。

4人に共通する風をイメージできるようにデザインで風石をあしらったものを作ることになった。

…作るのはロアンであるから、セラとシルフィードは実質することもなく、せめてラッピングはきれいな物にしようと、準備をするのであった。

それぞれが準備に追われた1週間が過ぎ、ハルケギニアにおける『クリスマス』が開催されることとなった。

## 第2章 挿話1（後書き）

長く休んで申し訳ありません。

なかなか時間がとれ…言い訳してもしかたないですね<<

暇を見てなるべく投稿しますので、ご勘弁を。

久しぶりに投稿したのに、挿話の上短く、続き物って…

明日中に次を投稿しますので…しなきゃクリスマス過ぎちゃうしw

## 第2章 挿話2（前書き）

クリスマスの後編です。

書きたいことを唯唯書いただけの駄文です…

クリスマスが終わる前に投稿できてよかった^^；

## 第2章 挿話2

クリスマスと誕生日（後編）

ウインの月、エオローの週、ダエグの曜日。

クリスマスを明日に控えた前夜祭として、シエルファに仕える使用人達とのささやかなパーティーが催されていた。

使用人達も順番に休憩をとり、にこやかにパーティーを楽しんでいた。

「ヤマト様、1日早いですが「お誕生日おめでとございます」「」  
複数名が大和へと声をかけてくる。

大和自身も、堅苦しい貴族の集まりではなく、身内ばかりの雰囲気  
に終始笑顔で雑談していた。

「前夜祭でこれだけの料理なんて、明日の本番が楽しみなのね」

「シルフィードは食べることばかりね」

シルフィードが準備された料理をすごい勢いで片付けて行く横で、  
セラが飽きたようにつぶやいた。

「タバサは元気ないね？」

「…そんなことない」

何時もならシルフィード以上に料理を片付けて行くシャルロットは  
ワインを片手に大和の横に佇んでいた。

「食欲がない？」

「…明日のために控えとくの」  
数秒考え込んでからシャルロットがいいことを思いついたと言わんばかりに答える。明日、プレゼントを渡すことばかり考え、既にいっぱいいっぱいだとは間違っても言えないのだった。

正確にシャルロットの心が分かっているのはセラだけで、ニヤニヤとシャルロットの顔を見ていた。

全く分かっていないシルフィードは、

「んあ！ 明日の方が豪華な料理なのね！ 食べ過ぎちゃまずいのね！」

シャルロットの言葉をそのまま受け取り慌てていた。

ゆったりとした時間はあつという間に過ぎていった。

本番の明日のためにも、夜通し騒ぐと言うこともなく深夜を回る前に、シエフィード城も静寂に包まれている。

「大和、これプレゼント」

「（ありがとうシャルロット。開けてもいい？）」

「うん、気に入ってくれると嬉しいんだけど…」

「（うあ！ これって手編み？ ありがとう、とても嬉しいよ）」

「がんばって編んだんだけど、ちょっと不恰好になっちゃって」

「（そんなことないよ！ 売り物より綺麗だし、俺はシャルロットが編んでくれたのが嬉しいよ）」

「そういつてもらえると、私も嬉しい…」

「（シャルロット…大好きだよ）」

「私も大和のことが大好き…」

一人悶々と妄想中のシャルロットは布団に包まれてベッドの端から端までゴロゴロと転げまわっていた。

妄想でのシャルロットは自分の理想なのか、言いたいことを言えるようだった。

「大和様、本日は午後3時からロアン様のお迎えと、学院のお友達のお迎えがございます。それまでにはご自由にならしていただいて結構です」

朝食の席でシエルトから本日の予定を聞き、町にでも出かけようかと大和は考えていた。

「じゃあ今日は町にでも行ってみるかな。タバサ達も一緒にどうかな？」

朝食を終え、ゆっくりとした雰囲気の中で、大和がシャルロット達に声をかける。

「私達は用事があるから、タバサと2人で行ってらっしゃい」

「そんな：フガ：ハックション！」

「キヤアー」

反論しようとするシルフィードの鼻にセラが張り付きくしゃみをした瞬間に壁際まで飛ばされてしまう。

「（今日くらいはシャルロットと大和を2人つきりにさせるって話  
したでしょ！）」

「（そうだったのね…）」  
シルフィードの傍にまで戻ったセラが耳元で囁くように話しかけると、事前に打ち合わせていたことを思い出し、慌てて用事があると外出を断った。

「まあ、用事があるなら仕方ないか。シャルロットは大丈夫？」

「うん」

2人つきりでの外出に頬をピンクに染めながら控えめに返事をするシャルロットだった。

「うあああ、気合は行ってるなあ」

町へと一歩踏み入れれば、そこがハルケギニアである事を忘れそうなほどの様相であった。

クリスマスリーフであったり、雪を催した飾り付けであったりと指向を凝らした店や露天が並んでいた。

「シャルロットは何処か行きたいところある？」

隣を歩くシャルロットは両手に息を吹きかけていたが、見上げるような格好で大和の方を向いた。

（反則でしょそれ…）

手も耳も真っ赤にして少し潤んだ瞳で見上げてくるシャルロットは反則級の可愛さがあった。



コートのポケットに手を入れていた大和は左手を出してシャルロットの右手を握ると自分のポケットに誘った。

「暖かい…」

赤くなつた耳よりも赤くなつた顔でシャルロットが囁く。

「今日は一段と寒いね。今夜はホワイトクリスマスになるかもね」  
自身の恥ずかしさを隠すように言葉を続ける大和だった。

「ホワイトクリスマス？」

聞きなれない言葉にシャルロットが疑問を言葉にする。

「うん。クリスマスの日に雪が降って景色を白く染めることをそう言うんだ」

大和は空を見上げながら説明をする。

「素敵」

周囲のカップルに負けず劣らずな雰囲気で大通りを2人で歩く。  
恥ずかしさが勝り、言葉数が一気に減ったが二人とも幸せな表情だった。

「そろそろお昼でも食べようか？」

露天を冷やかし、気がつけば正午近くになっていた。

「うん」

2人で話し合い、晩餐会のことを考えて軽食で済ませることにし、カフェへと2人で入った。

店の外もクリスマスカラーで飾ってあったが、店内もクリスマスー

色の様相であった。極めつけは店の中央に180 سانت程のクリスマスツリーまで鎮座していた。

「今日って俺の誕生会と領地の建立際だったよね？ この統一性は……」  
地球でのクリスマス（それも日本文化仕様）が自分と自分の領地のお祝いであることがなかなか結びつかない大和だった。

「大和の記憶にあるクリスマスと今のこの景色は似てるの？」  
サンドイッチ食べ終え、紅茶を飲みながらシャルロットが話しかけた。

「ほとんど同じだよ。ここまで再現できるとは……びっくりした」  
電飾であったり、終始流れるクリスマスソングであったりと科学の発達していないハルケギニアでは再現が難しく、それ以外では驚くほどクリスマスを彷彿とさせる出来栄であった。

「そう？ よかった」  
シャルロットは大和が地球（異世界）には未練がないと行っていたのを思い出した。しかし、言葉で未練がないと聴かされても、自分だったら自分の生まれた世界に未練がないと言い切れないと思っていた。  
だから、今回の誕生日パーティをクリスマスに見立てて大和の故郷を感じてもらおうと考えていたのだった。  
それが余計なお世話であったとしても、大和に懐かしさと楽しさを感じてもらいたかった。

食事を終えた2人は急ぎ城へと戻り、大和は客を迎え入れる準備に

追われた。

「態々お越しいただきありがとうございます兄上」

「誕生日おめでとう大和。他人行儀な言い方は寂しいからいつも通りで頼む。どうせ、身内しか居ないんだからな」

畏まった挨拶をする大和に、苦笑を交えてそう諭すロアン。

「本日はお招きいただきありがとうございます」

カチコチになったカリムが挨拶をするが、親であるカルロスは笑いを堪えて見つめていた。

「ありがとうカリム、それとさつき兄上が仰られたんだ、固くならずに何時も通りでいこうか。カルロス隊長は何時もと変わらないようだし」

余りにもカリムが緊張しているため、かえって大和の緊張は解けていた。

ロアンが大和と馴染みのある人間しか連れてこなかったのも影響していた。

ロアンと共に来ていたのは、カルロス、カリム、リアアの親子で他は護衛とメイドが数人だった。

ロアン達を控え室へ通した後直ぐにルイズ、サイトが到着した。

「本日はお招きいただきありがとうございますシエルフア卿」

「ほ、ほんじつはおまお招き…今日は友人として来て貰ったから

硬い挨拶は無しでいこう」

ルイズの堂に入った挨拶と違い、サイトはかなりテンパッテいた。それを見た大和は笑いながら才人の方を叩く。

「今日来る貴族は学院の友人と兄上だけだから気楽に楽しもう」  
ルイズは釈然としない表情だったが、大和が駄目押しとばかりに切り出したため、反論することなく佇まいを崩した。

「まあ、大和の領地だし、人の目がないのならそれもいいわね」

「よかつたあ、俺こんなパーティーに呼ばれるの初めてだからどうしたらいいのかぜんぜん分かんないんだ」

「あら、ちゃんと教えたじゃない！ もう忘れちゃったの？」

溜息と共に肩の荷を降ろす才人に食って掛かるルイズ。何時もの2人に自然と笑顔が零れる大和だった。

続いてキュルケ、ギーシュ、モンモランシーが到着し、クリスマスパーティーが始まった。

「大和！ 何がどうなってるんだ？」

「驚いただろ？ クリスマスのことをタバサとセラに話したらこうなっただ」

才人がパーティーが始まって直ぐに大和に声をかけて来た。

大和は周囲を気にしながら説明する。

「驚いたってもんじゃないぞ。クリスマスツリーはあるし、開会の

言葉はクリスマスパーティーって言ってたし、何がなにやら……」

「大和くお誕生日おめでとう」

キュルケやモンモランシー、ギーシュ達がお祝いの言葉と共にプレゼントを渡してくる。

「ありがとう皆」

「それにしても綺麗ね」

「本当、あの木の飾りは他で見たことがないわ」

「モンモランシーの美しさには敵わないさ」

それぞれ感想を述べる中、ギーシュの発言は全員でスルーした。

急に会場が暗くなり、司会がとんでもないことを発言した。

「皆様、正面をご覧ください。サンタクロースの登場です」

会場にいる全員が正面を向いた瞬間にライトがサンタクロース3名を照らし出す。

「ッ」

大和はその3人を見て息を呑んだ。

シャルロット、シルフィード、セラがサンタクロース姿それもミニスカートバージョンで登場したのだった。

勿論ロアンの入れ知恵であり、滅多に驚いた顔など見せない大和を見れて満足していた。

「メリークリスマス!!!!」

3人はタイミングを合わせて高らかに声を上げる。  
3人の愛らしい姿に会場中から黄色い声と男性人の野太い声上がる。

周囲の声が収まると楽団が静かに音楽を奏で出す。

「真っ赤なおっはなの〜と〜なかいさ〜ん〜は〜」

3人が顔を赤くしながらも音楽にあわせて歌う。

「暗い〜夜道は〜ピッカピッカの〜」

大和の頬には何故か涙が伝っていた。

意識していなかったがやはり故郷への哀愁と言うのはあったのだと大和は驚いていた。涙を見られるわけにも行かず、歌の途中でバルコニーへと抜け出す。

夜風を浴び、火照った身体を冷ます。

月の隠れた夜は暗く、寂しさを感じた。

「どうしたの？」

振り向くとサンタ姿のシャルロットが立っていた。

「いや、ちょっと暑くなって、夜風にあたってたんだ」

「そう」

シャルロットは大和が泣いていたことに気がついていた。

「寒くなったね、中に入ろうか」  
大和が身体ごと窓を向き、ホールへと歩き出す。

「大和……」

シャルロットの横を通り過ぎようとした瞬間に背中から大和に抱きついた。

「タバサ？ どうしたんだ？」

驚いた大和が声をかけるがシャルロットは無言で暫く大和に抱きついていた。

「……前の世界に帰りたい？」

突然シャルロットが語りかけてくる。その声は震え、今にも泣き出しそうに感じた。

「前も言ったけど、前の世界に待っていてくれる人はもう居ないんだ。ただ、懐かしさと、思い出が頭を過ぎっただけだよ」

シャルロットの雰囲気になんか泣いていたことがばれていると分かった大和ははぐらかすことなく答えた。

「……前の世界以上に楽しい思い出を”ここ”で作ろう。私は大和が今いる”ここ”が大好きだから」

シャルロットの言葉で再び大和の頬を雫が伝う。

誰かに必要とされ、共にありたいと言われることに嬉しさが込み上げてくる。

シャルロット以外の友人達やロアンも同じように考えてくれているのかもしれない。しかし、言葉で伝えられることがこんなにも安心できると初めて知った。

「ありがとう…」

沢山伝えたい言葉があったが、それ以上は言葉にならなかった。

暫くそのまま涙を流した大和は頬に当たる冷たさに空を見上げた。

「雪」

振り出した雪を広げた手のひらで感じ咳く。

「本当」

大和の咳きに反応し、シャルロットもそらを見上げた。

「寒いわけだ」

「これ。プレゼント」

手に持っていた包みを大和へと渡す。

「ありがとう。開けてもいいかな？」

「うん」

「マフラー…手編み？」

「うん。初めてだから上手じゃないけど…」

「そんなことないよ。暖かい…ありがとう」

「…」

「クチュン」



「風邪を引くよ?」

「…」

可愛いくしゃみを聞いた大和は自分に巻いたマフラーを解き、自分とシャルロットの両方に巻きなおす。

自然にした行為であったが、いざ2人で一本のマフラーを巻くと思つた以上に体が密着し、恥ずかしくなってしまった。

2人とも無言のまま寄り添って雪を見つめていた。

「(出て行くタイミングを逃したはね…)」

「(お姉さま…なんか嬉しそうなの)」

影から見ていたセラとシルフィードは2人の雰囲気にかける夕イミングを失ってしまった。

「(これ以上外に居ると本当に風邪をひくかもしれないし…)」

「(そうなのね。風邪をひくと大変なのね)」

「こんな所にいた〜。探したんだからね」

「いたのね〜」

意を決したセラは今来たように声をかける。

「ん、ああ。ごめんごめん。暑かったから夜風にあたってんだ」

多少、シドロモドロになりながらもセラに答える。

微妙な笑いを顔に貼り付けたセラがシルフィードと共に大和の正面へと並ぶ。

「はい、大和へのプレゼント」

小さな包みをひとつ大和へと渡す。

「ありがとう。今開けてもいいかな？」

「うん」「すぐに開けるのね」

セラとシルフィードの言葉を聞いて包みを開けるとネックレスが出てきた。

チエーンの先についている飾りは風石を縁取りとしたコインサイズであった。

ただ、コインの片面には剣の絵が彫られており、その裏には『風』と漢字で彫られていた。ロアンの自信作だとのことだった。

「私達も同じものを持つてるのよ」

「お揃いなだね」

「そして、これがタバサの分」

驚きの表情でシャルロットがネックレスを受け取る。

片面は『風』の文字。その裏は杖の絵が彫られていた。

「ありがとう」

シャルロットは、はにかんだ表情でセラとシルフィードにお礼を言う。

それを見たセラは少し口角を上げる「ニヤッ」とした笑いをし、シルフィードは「お姉さまが嬉しそうなのね。ルルル〜」と歌いだした。

「へえータバサのは杖の絵なのか。セラとシルフィードのは、どんな絵が描いてあるの？」

「ふふふ。私のは妖精の絵」

「私のはドラゴンなの〜」

「凝ってるな〜、4人お揃いなのは本当に嬉しい。2人ともありがとうな」

寒さも忘れるほどに3人の顔は赤くなり、心も温かくなっていた。

大和の中で、今日という日がかけがえのない思い出となったのは言うまでもなかった。

## 第2章 挿話2（後書き）

まずは、申し訳ありません。

長いこと更新しなかった上にこのクオリティ…

重ね重ね申し訳ありません。

謝ってはかりでは返って皆様のご気分を害す恐れがあるので、気持ち切り替えて次話で頑張ります！

質問<<

シャルロットの誕生日って明記されてましたっけ？

明記してるようなら何方か教えていただけると助かります。

明記されてないようでしたら、適当に考えますw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3584m/>

---

旋風と雪風

2010年12月25日07時54分発行